望ましい家庭教育をめざして

福岡県における中学生の意識・行動と父親・母親の養育態度・行動の実態（その１）

昭和57年度　家庭教育総合セミナー報告書

福岡県教育委員会

はじめに

家庭は子どもたちの生活基盤であり、子どもの人格形成や基本的な生活習慣を培う場として重要な役割を担っているといえます。

本来、家庭で行われる教育はあくまでも私的な営みであり、家庭の実状に即して行われるべきものでありますが、福岡県教育委員会では、家庭教育が子どもの発達段階に応じその時期に適した教育が行われなければ効果があがらないという基本的立場にたち、家庭教育のあり方についての研修会や学習資料を提供する事業を展開しています。

そのひとつとして、県教育委員会では、昭和54年度から5か年計画で「家庭教育総合セミナー事業」を実施し、家庭教育にかかわる問題を具体的・実証的に調査研究をすすめてきました。

昭和54年度は、県内各地で実施された家庭教育に関する調査の分析、55年度は、県下19小学校の児童をもつ父親・母親を対象に「子どものしつけに関するアンケート調査」を実施し、その中間報告書を作成しました。56年度は55年度にひきつづきその最終報告書の作成およびその結果をもとに「小学生をもつ ― あなたの子育てのために」という家庭教育に関する啓蒙・啓発のための小冊子を作成して、県下市町村教育委員会および小中学校に配布しました。

本年度は、県下6中学校の生徒およびその父親・母親を対象に「中学生の生活実態のアンケート調査」および「中学生をもつ父親・母親のしつけに関するアンケート調査」を実施しました。調査内容が膨大であり、すべてを報告することはできませんが、今年度はその中間報告として「中学生の意識・行動の実態」と「父親・母親の養育態度・行動の実態」を中心に本資料を作成しました。

今後の望ましい家庭教育のあり方については、あらゆる場や機会を促えて十分に討議される必要があると思われますが、その際の研究資料としてこの冊子が活用されることを願っています。

最後に、この調査に御協力いただいた学校や父母の皆さんに心から感謝申し上げるとともに、この事業をすすめるにあたって、御多忙中にもかかわらず、終始熱心に御指導・御助言をいただいた家庭教育総合セミナー事業企画研究委員並びに関係者の方がたに厚くお礼申し上げます。

昭和58年3月

福岡県教育庁指導第二部社会教育課
課長　光安常喜

目　　次

はじめに

Ⅰ　調査の概要

1. 調査の目的 …… 1

2. 調査の方法 …… 2

3. 分析の基本的な視点 …… 5

Ⅱ　調査の結果

第一部　福岡県における中学生の意識・行動の実態

1. 中学生の学校生活

(1) 学校生活と勉強 …… 7

(2) 中学生と友人関係 …… 9

(3) 悩みと相談相手 …… 11

(4) クラスにおける活動 …… 13

2. 中学生の家庭生活

(1) 家庭生活と両親との交流 …… 14

(2) 父親イメージと母親イメージ …… 18

(3) 家庭における養育態度 …… 20

(4) 基本的生活習慣 …… 24

(5) こずかいとアルバイト …… 26

3. 中学生の日常生活と関心

(1) 勉強時間と学習塾・家庭教師 …… 27

(2) 帰宅後や休日の生活 …… 29

(3) テレビとラジオの視聴 …… 30

(4) 中学生の関心 …… 32

4. 中学生の非行・問題行動

(1) 非行・問題行動の発生率 …… 36

(2) 男女別の非行・問題行動 …… 38

(3) 学業成績と非行・問題行動 …… 39

第二部　福岡県における父親・母親の養育態度・行動の実態

1.　子どもの基本的生活習慣に対する親の養育態度・行動の実態

(1)　日常生活における親の子どもに対する世話 …… 43

ア　起床、ふとんの後始末、夜食の用意についての世話 …… 43

イ　まとめ …… 45

(2)　ことばづかい、みだしなみ、わがままなど子どもの行動に対する受容と対応 …… 45

ア．ことばづかいに対する対応 …… 45

イ．子どもの身だしなみに対する対応 …… 47

ウ．子どもの自分勝手な行動に対する対応 …… 48

エ．子どもの反抗的態度に対する対応 …… 48

オ．あとしまつのだらしなさに対する対応 …… 49

カ．テレビをみながらの食事についての対応 …… 50

キ．まとめ …… 50

2.　子どものこづかい、手伝い、性教育に対する親の養育態度・行動の実態

(1)　こづかいの実態 …… 51

(2)　手伝いの実態 …… 53

(3)　性教育の実態 …… 54

(4)　ま　と　め …… 55

3.　子どもの成績についての親の考え方

(1)　子どもの成績 …… 56

(2)　子どもの成績に影響する要因 …… 56

(3)　子どもの成績と報酬 …… 58

(4)　ま　と　め …… 58

4.　親と子の交流とその内容

(1)　日常における親子の対話 …… 59

(2)　家族そろっての夕食 …… 61

(3)　親子の交流 …… 61

(4)　ま　と　め …… 62

5.　子どもについての親の評価や実感

(1)　自主性や忍耐力についての評価 …… 62

(2)　子どもに対する腹立ちや気づかい …… 64

(3)　ま　と　め …… 65

6. 子どもについての悩み …… 66

7. 親の生活実態と養育意識

(1) 生活の規則性 …… 69

(2) 生きがい及び充実感 …… 70

(3) しつけについての自己評価 …… 72

(4) 対学校・教師批判 …… 74

(5) ま と め …… 74

Ⅲ 結論と今後の課題 …… 76

Ⅳ 家庭教育総合セミナー事業の概要 …… 79

資 料 …… 83

・本調査で使用した質問紙

・調査協力校名

※ 表紙絵 粕屋郡新宮町立立花小学校長 山 野 巌

Ⅰ　調査の概要

1　調査の目的

今日、少年非行は戦後第3のピークにあると言われている。昭和57年版「青少年白書」（1983）によると、交通事故にかかわる業務上（重）過失致死傷などを除いた非行少年の人数は、昭和56年には、257,730人に達し、これは10年前、すなわち昭和47年の人数143,937人の実に79.1％の増加になっているという。

また、飲酒、喫煙、けんかなどのいわゆる不良行為も昭和47年には約70万人であったのが、56年には約120万人へと大幅な増加を示している。しかも注目すべきことは、これらの非行や不良行為を行った者の中で、中学生の占める割合が非常に高いという事実である。

例えば、昭和56年における刑法犯少年（罪を犯した14歳以上20歳未満の者）184,902人のうち、69,338人つまり37.5%が中学生によって占められているのである。

しかし、今日の中学生の問題はこうした反社会的行動のみに限定されるものではない。むしろそれは彼らが共通して持っている問題性が典型的なかたちをとって現われた、象徴的な部分に過ぎない。

現代っ子は自主性（やる気）がない、耐性（がまんすべきことをがまんする力）がない、集中力・根気がない、思いやりがないなどと言われている。中学生もこの点に関して例外ではなく、こうした発達上必要な基本的能力の低下が非行の前提をなしていると考えられるのである。

では、こうした中学生たちは、自らの生活をどのように行い、また、どのように意識しているのであろうか。本調査の第一の目的は、この点を明らかにするところにある。

さて第二の目的は、中学生を持つ父親・母親の養育行動と生活態度の実態を明らかにすることである。

子どもはどの子も本来、向上の欲求と種々の可能性を持って生まれてくる。しかし、その可能性が望ましいかたちで実現するためには、親の子どもへのかかわり方、すなわち養育行動と、親が子どもに示す生活態度、つまり「後姿」が適切なものでなければならない。それは親のあり方によって子どもは自主性の高い子にも、やる気のある子にも、覇気のない無気力な子にも、耐性の高い子にも、わがままな子にもなりうるからである。

ところで、県教育委員会は昭和55年に小学生を持つ父親・母親の養育態度・行動の実態調査を行い、いくつかの事実を明らかにした。

それを簡潔に言えば、最近の親は子どもに対して極めて過保護な傾向が強いということであった。子どもの基本的な生活習慣をはじめ遊び、学習の各生活領域まで何くれとなく世話をし、与え、要求を受容する、子ども中心の対応が強く認められたのである。

この特徴を項目で示すと次のようになる。

① 子どもが本来、自分でできること、あるいは自分ですべきことを先取りし、世話をする傾向が強

い。

② 安易に物を与える傾向が強い。

③ 子どもの要求を安易に受容する傾向が強い。

④ しつけのために叱ったり、注意したりする親は必ずしも少なくないが、その叱り方に一貫性がない傾向がある。

⑤ 手伝いをあまりさせていない。

中学生段階での子どもの行動は、教師、友人、地域社会など様々な要因によって影響されており、必ずしも親だけが重要な役割を果たしているわけではない。また、親の影響力そのものも小学生の段階までは極めて直接的なものであったが、中学生ではいくぶん異なっていることが考えられる。しかし、親が子どもの行動の形成に大きく関与していることに変りない。この意味で中学生を持つ親の養育行動と生活態度が今日どのような実態にあるかを明らかにすることは、彼らを健全に育てていく手がかりを探る上で緊急の課題となるのである。

2 調査の方法

(1) 調査対象

本調査は福岡県下6地区、6校の中学生とその両親1,310組（各学校とも各学年2クラス）を対象にして行われた。回収数は1,303組で回収率は99%であった。但し実際の集計にあたっては、生徒、父親（父親に代わる者を含む）、母親（母親に代わる者も含む）の三者の一部が欠けているサンプルまた記入者が指定された者（父親ないし母親、またはそれに代わる者）以外か、不明なものは除外した。したがって有効サンプル数は、1,139組となり、その有効率は87.4%であった。

なお、サンプルの内訳を生徒の学年、性別、きょうだいの構成、きょうだいの中での位置、居住地域別で分類すると表1.2.3.4.5のとおりであった。

表1 学年別サンプル数

区分＼学年	1 年	2 年	3 年	合 計
生 徒	346	385	408	1,139
父 親	346	385	408	1,139
母 親	346	385	408	1,139
合 計	1,038	1,155	1,224	3,417

表2 男女別サンプル数

区分＼性別	男生徒	女生徒	合 計
生 徒	569	570	1,139
父 親	569	570	1,139
母 親	569	570	1,139
合 計	1,707	1,710	3,417

表3　きょうだい構成別サンプル数

区分＼兄弟数	1 人	2 人	3 人	4 人	5 人	6 人	7 人	合 計
生　徒	87	555	382	90	17	7	1	1,139
父　親	87	555	382	90	17	7	1	1,139
母　親	87	555	382	90	17	7	1	1,139
合　計	261	1,665	1,146	270	51	21	3	3,417

表4　きょうだいの中での順位別サンプル数

区分＼順位	長　子	二　子	三　子	四　子	五　子	六　子	合　計
生　徒	530	433	149	22	4	1	1,139
父　親	530	433	149	22	4	1	1,139
母　親	530	433	149	22	4	1	1,139
合　計	1,590	1,290	447	66	12	3	3,417

表5　居住地域別サンプル数

区分＼地域	都市住宅地	中都市新興団地	農　村	旧産炭地	過疎地	工業地帯	合　計
生　徒	217	185	165	185	200	187	1,139
父　親	217	185	165	185	200	187	1,139
母　親	217	185	165	185	200	187	1,139
合　計	651	555	495	555	600	561	3,417

(2) 調査の方法

本調査は質問総数55項目からなる質問紙「中学生の生活実態についてのアンケート」(中学生用)と質問総数41項目からなる「中学生のしつけについてのアンケート」(親用)によって行われた。

なお、親用には父親用と母親用があったが、質問の構成と内容は全く同じであった。またこれらの質問紙の構成は次のとおりであった。

表 6. 中学生用質問紙の構成

質問のカテゴリー	質問の内容	質問項目数
学校生活	・学校生活と勉強 ・友人関係 ・悩みと相談相手 ・クラスにおける活動	16問
家庭生活	・両親との対話 ・両親に対するイメージ ・親の養育に対する認知 ・基本的生活習慣 ・こづかいとアルバイト	19問
日常生活と関心	・勉強時間と学習塾 ・帰宅後や休日の生活 ・テレビとラジオ ・中学生の関心	16問
非行・問題行動	・非行・問題行動の体験	4問

① 「中学生の生活実態についてのアンケート」

この質問紙の構成は、基本的には、(1)中学生の学校生活を問う質問、(2)中学生の家庭生活を問う質問、(3)中学生の日常生活と関心を問う質問、(4)中学生の非行・問題行動を問う質問の4つの部分から成っていた。

そして、これらの各域に含まれる対象や事がらについて、子どもたちがどのように意識したり、あるいは実際に行動しているのかが明らかになるよう、合計55の質問が用意されていた。表6は質問紙の構成を示したものである。これら質問項目の具体的内容は本文および本報告書の最後に示している。

② 「中学生のしつけについてのアンケート」

この質問紙の構成は、基本的には子どもの生活や行動に対する親の養育態度・行動と親自身の生活態度及び生活実感を問う質問の２つの部分から成りたっている。すなわち、質問紙はまず、子どもの生活領域を基本的生活の領域、学習の領域、親子の交流の領域、その他の領域の４つの側面に区分し、これらの各領域に対する親の養育態度・行動の領域を世話、授与、受容、叱責、対話、相談などの側面に区分して、それらの実態が明らかになるように構成されていた。また付加的な質問として、子どもに対する親の意識と親自身の生活態度を問う質問が若干用意された。表７は質問紙の構成を示したものである。これらの質問項目の具体的内容は本文および、本報告書の最後に示している。

表７　親用質問紙の構成

子どもの生活領域	親の行動・意識	質問項目数
基本的生活領域	・世話　・受容 ・注意・叱責	１１問
学習の領域	・授与　・意識	3問
親子交流の領域	・対話　・相談	6問
その他の子どもの生活の領域	・こづかい　・手伝い ・性教育	5問
	・子どもに対する評価 ・子どもについての悩み ・子どもに対する気づかい ・子どもに対する期待	7問
	・親自身の生活の規則性 ・生きがいと充実感 ・しつけに対する自己評価 ・対学校・教師批判	9問

3　分析の基本的な視点

結果の分析は基本的には２の(2)で説明した各質問紙の構成に従って行われた。また、この際子どものきょうだい数、きょうだいの中での位置、居住地域などの条件はこみにし、学年別、性別に実態を示すこととした。なお、子どもの生活実態と親によるしつけの関連性については今回ふれず、両者並列の形式で実態のみ明らかにすることとした。

II. 調　査　の　結　果

第一部

福岡県における中学生の意識・行動の実態

1　中学生の学校生活

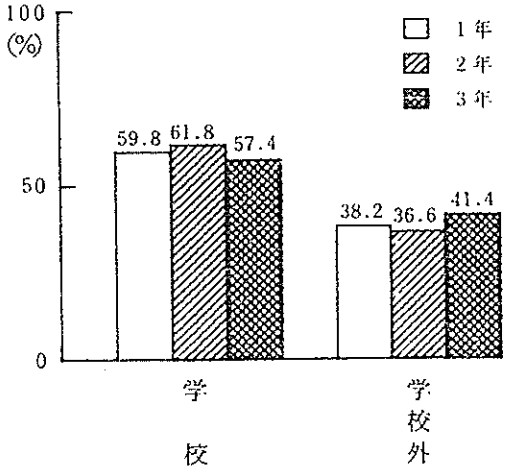
(1)　学校生活と勉強

言うまでもなく、学校は子ども達が一日の大半の時間を過ごしている場である。図１－１は、学校にいる時間と学校外にいる時間とでは、どちらが楽しいと感じているかをみたものである。学年差はほとんど認められないが、ほぼ６割程度の生徒が学校にいる時間の方が楽しいと感じている。

それでは、生徒は学校の勉強についてどのように感じているのだろうか。図１－２に示したように「やる気がある」という生徒が、１年生75.7％、２年生62.8％、そして３年生が61.7%を占めている。いずれも、６割から７割の生徒が学校の勉強に対してやる気をもって臨んでいるようであり、その意味では問題は少ない。しかし、反面「やる気のない」という生徒が３割もいるのは問題であり、１年、

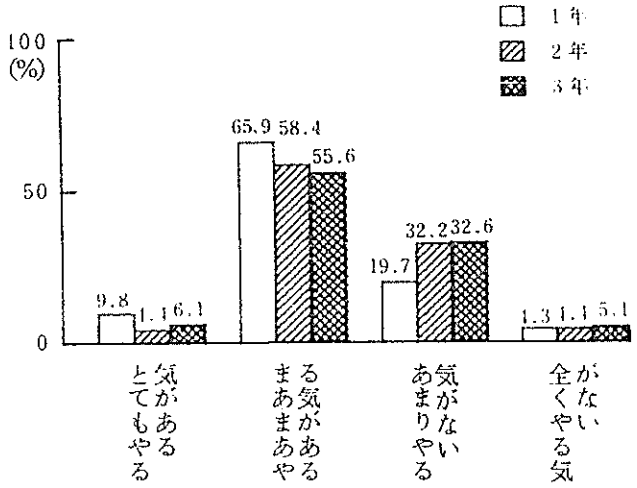
（図１－１）

あなたは、学校にいる時間と学校外にいる時間とではどちらが楽しいことが多いですか。



（図１－２）

あなたは、学校の勉強についてどう感じていますか。



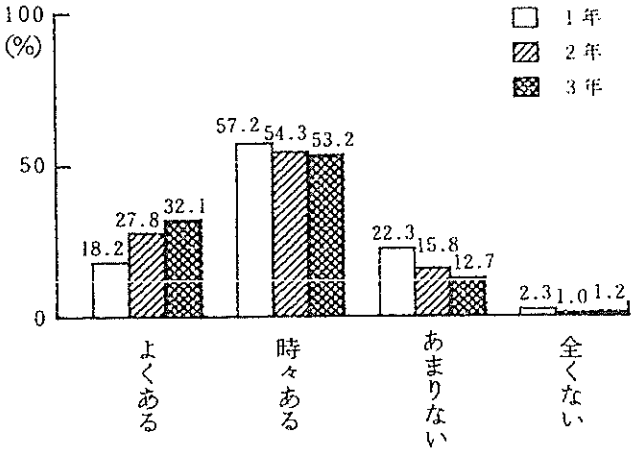
２年、３年と学年が進むにつれて、やる気をもって学校の勉強に臨む生徒が減少しているのである。

ところで、こうした勉強に対するやる気と学校の勉強に対する理解度とは密接な関係にあることは容易に予想できる。そこで、学校の勉強に対する理解度をみてみると、図１－３に示したように、どうも理解十分とは言えないような状況である。学校の勉強でわからないことが「よくある」という生徒をみても、１年生18.2％、２年生27.8％、そして３年生が32.1％といった状況である。

では、いったい中学生は、どうした意識・態度をもって勉強しているのだろうか。図１－４は、勉強するのはどのような理由によるのかという生徒の意識を示したものである。これに関しては、ほとんど学年差が認められないため、一応男女別の結果を示しておいた。男子で最も割合の高い理由は、「よい学校やよい会社に入りたい」というものである。それに続いて、「よい成績をとりたい」、さらに「学校でみんなについていけないと困る」といった理由が並んでいる。

（図１－３）

あなたは、学校の勉強でわからないところがありますか。

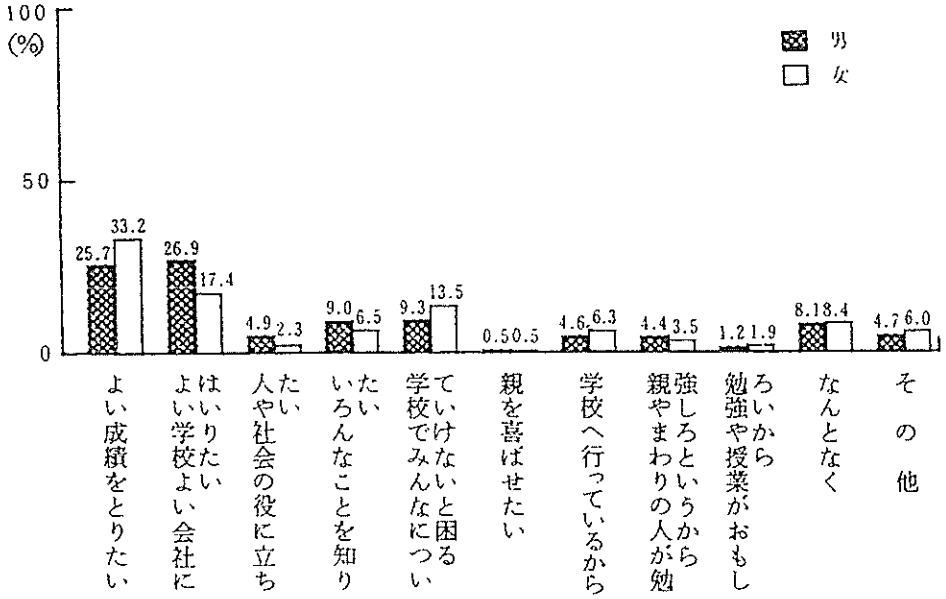


一方、女子では、「よい成績をとりたい」という理由が最も多く、次いで「よい学校やよい会社に入りたい」、さらに、「学校でみんなについていけないと困る」といった状況で並んでいる。男女間に若干の差異が認められるが、いずれにしても卒直な理由を持っていることが興味深い。生徒にとって勉強する理由は、決して社会や人の役に立つためでもいろんなことを知りたいからでも、まして親を喜ばせたいからでもない。やはり自分のためなのである。

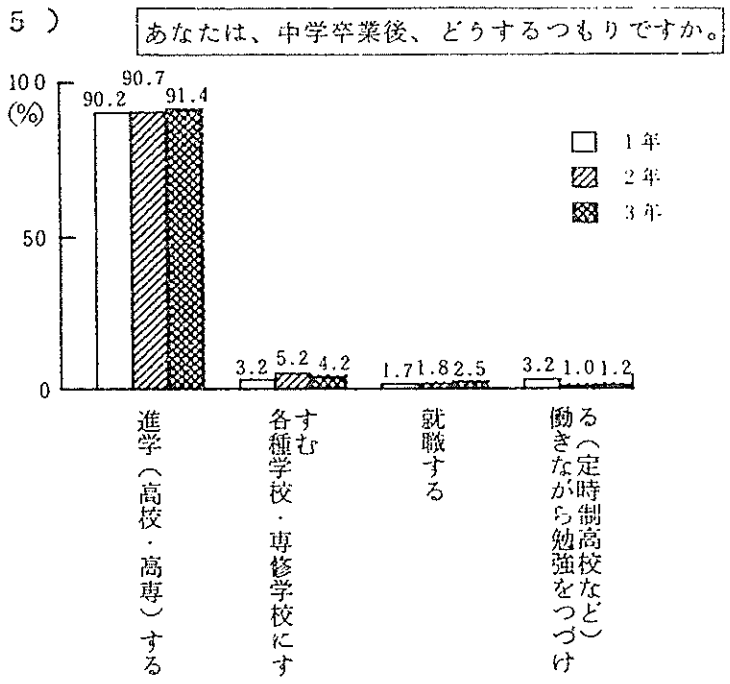
なお、一応中学校卒業後の進路についてみてみると、図１－５に示したような状況である。やはり、全体の９割以上が高校への進学希望である。

（図１－４）

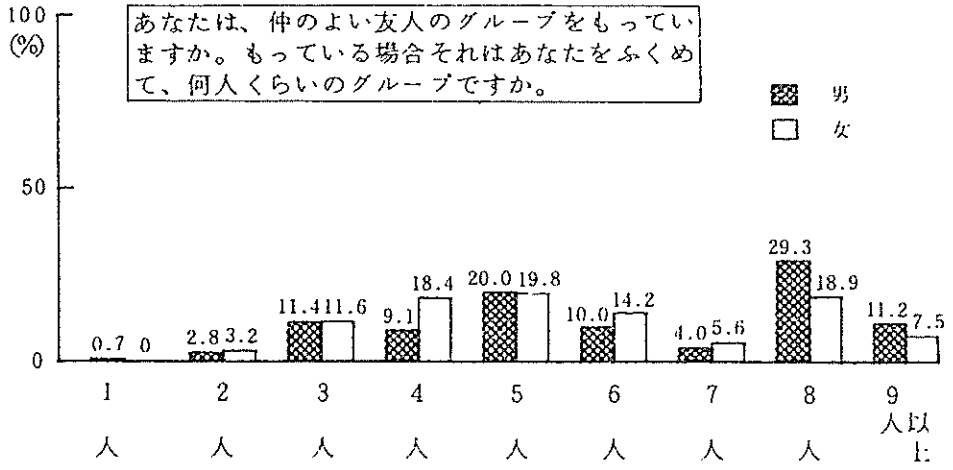
あなたが、ふだん勉強するのはどうしてですか。もっともあてはまるものを１つえらんで○をつけてください。



（図１－５）



（図１－６）



(2) 中学生と友人関係

中学世代になると、友人関係のあり方が変化し、しかも、友人からより多くの影響を受けるようになる。そして生徒の生活のなかで友人の占める意味が、かなり大きいものとなる。

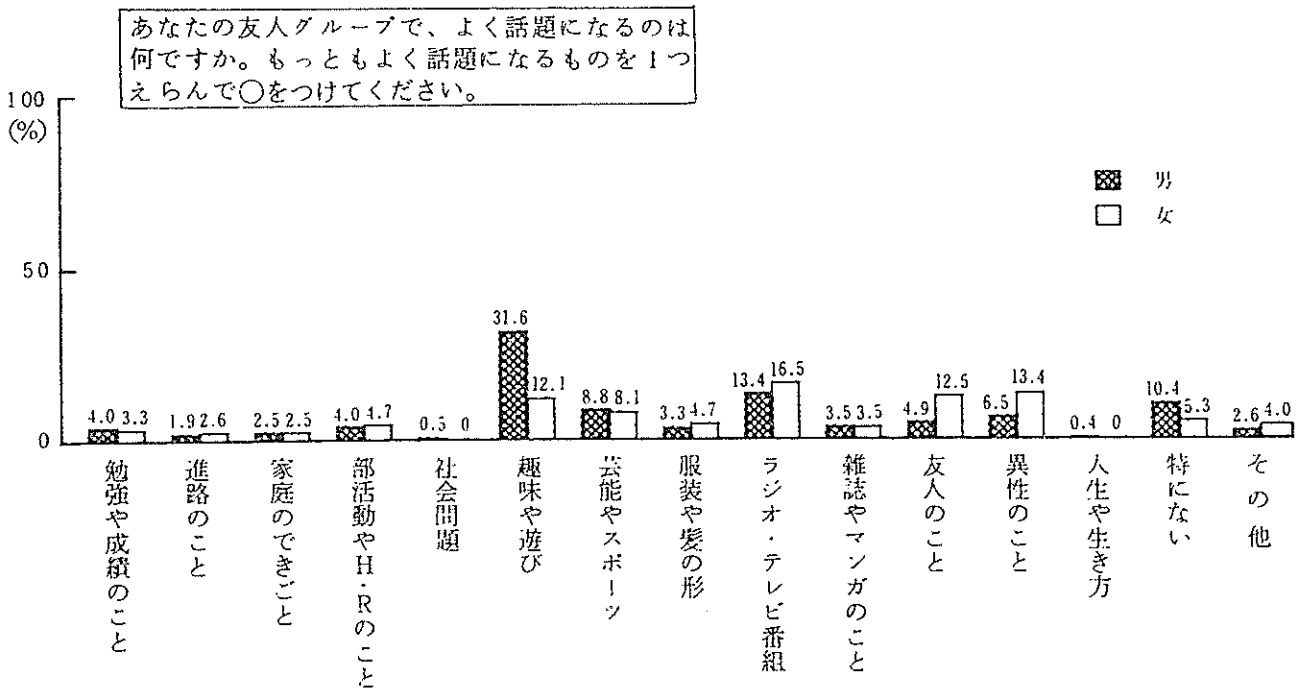
そこで、生徒がどの程度の友人グループを持っているのか、まずみてみたい。図１－６は、生徒の友人グループを男女別に示したものである。男子で最も多いのは、８人程度のグループで全体の３割程度を占めている。女子では、５人程度のグループで、これが20%を数えている。「友人グループを持っていない」という生徒は、ほぼ皆無に等しく、その面では問題ないと言えよう。

では、そうした友人グループのなかで、主として話題になるのはどんなことなのだろうか。図１－７に示したように、全く様々である。その中で、割合の高い話題をみてみると、男子では趣味や遊び、

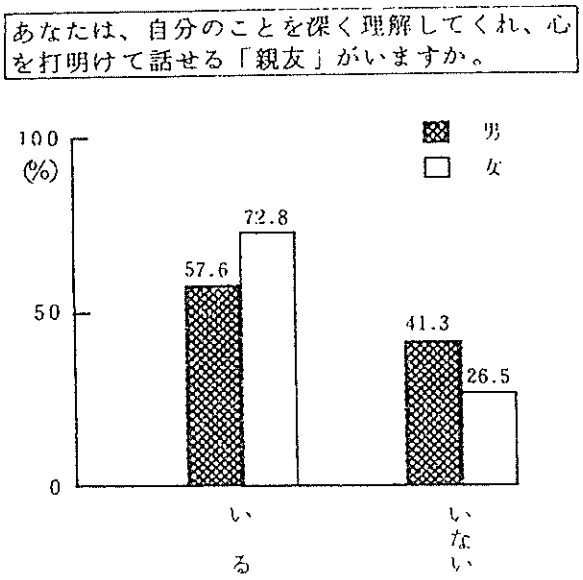
そしてラジオ・テレビ番組である。女子では異性のこと、ラジオ・テレビ番組といった話題が並んでいる。なお、こうした友人グループにおける話題については学年差はほとんど認められない。

次に、生徒は、どの程度自分のことを深く理解してくれ、心を打ち明けられる「親友」を持っているのだろうか。これも、図１－８に示したように男女別にみてみたい。「親友を持っている」という生徒は、男子で57.6％、女子では72.8％にのぼっている。男子に比べはるかに女子の方が「親友」を持っている割合が高い。こうした結果は、すでにみたように、友人グループが男子より女子の方が小規模であるという傾向と軌を一にするものであろう。

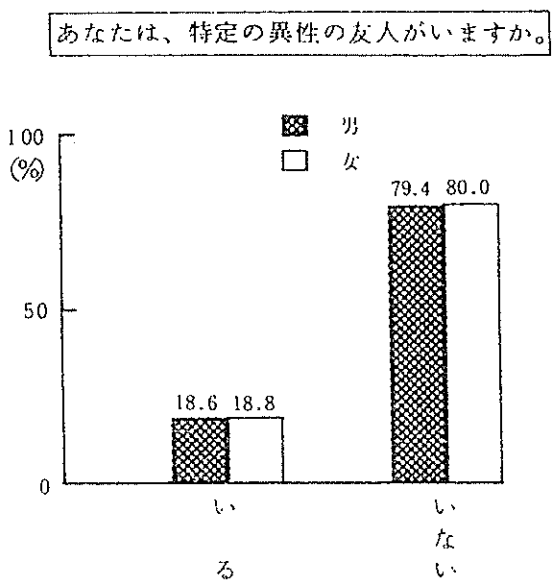
（図１－７）



（図１－８）



（図１－９）



ところで、特定の異性の友人をどの程度持っているのか、図１－９をみてみたい。男女とも全く差異がなく、特定の異性の友人を持っている割合は２割弱程度である。

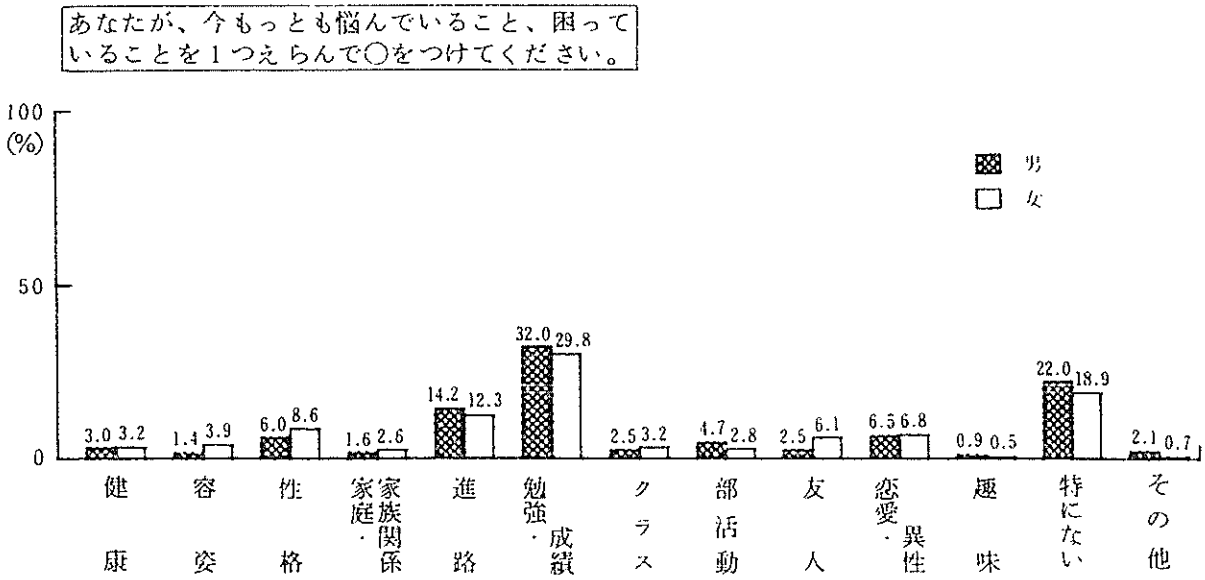
(3) 悩みと相談相手

中学生は、どんな悩みを持ち、それを一体誰に相談しているのだろうか。最初に、男女別に悩みの内容についてみてみよう。これは男女間の差異が全く認められず、最も多いのが勉強や成績に関すること、次いで進路である。進路、勉強といった問題がかなり大きな比重を占めていることは疑いないであろう。

ちなみに、こうした悩みの内容を学年別にみてみると図１－11に示したような状況である。勉強や成績については、すでに１年生段階から大きな悩みとなっているようである。そして、３年生では進路に関する悩みが大幅に増加しており、中学生の生活が進路や受験と切り離して考えられないことを物語っている。

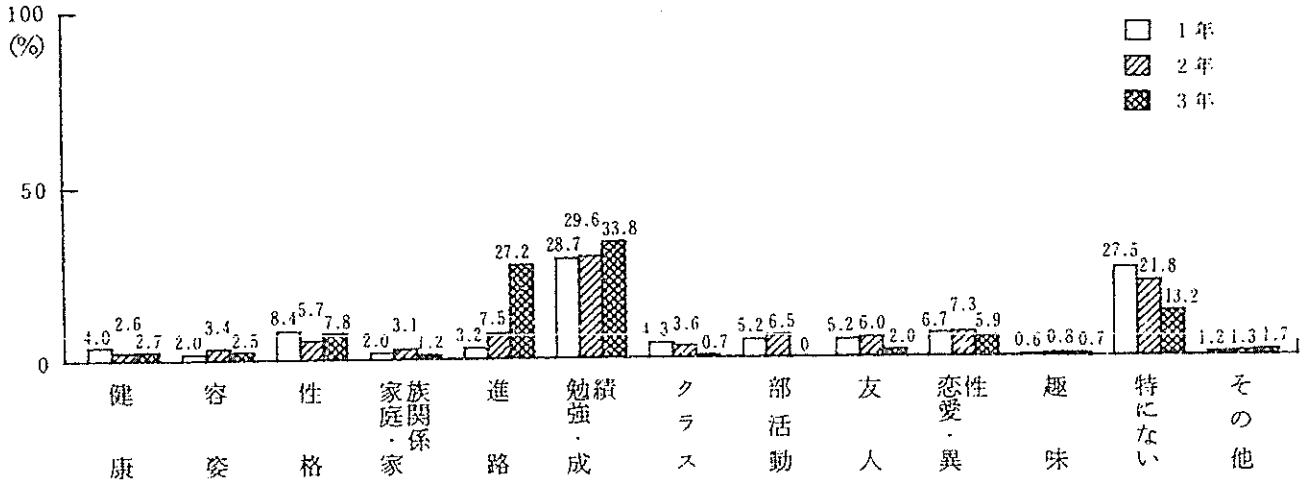
ところで、問題は、こうした悩みを一体誰に相談しているのかという点である。まず、図１－12に示した男女別の結果をみてみよう。男女とも、悩みの相談相手としては「友人」という生徒が最も多い。特に女子の場合、「友人に相談する」という生徒が７割をも数えており、いかに中学生にとって友人の持つ意味が大きいかを端的に示している。

（図１－１０）



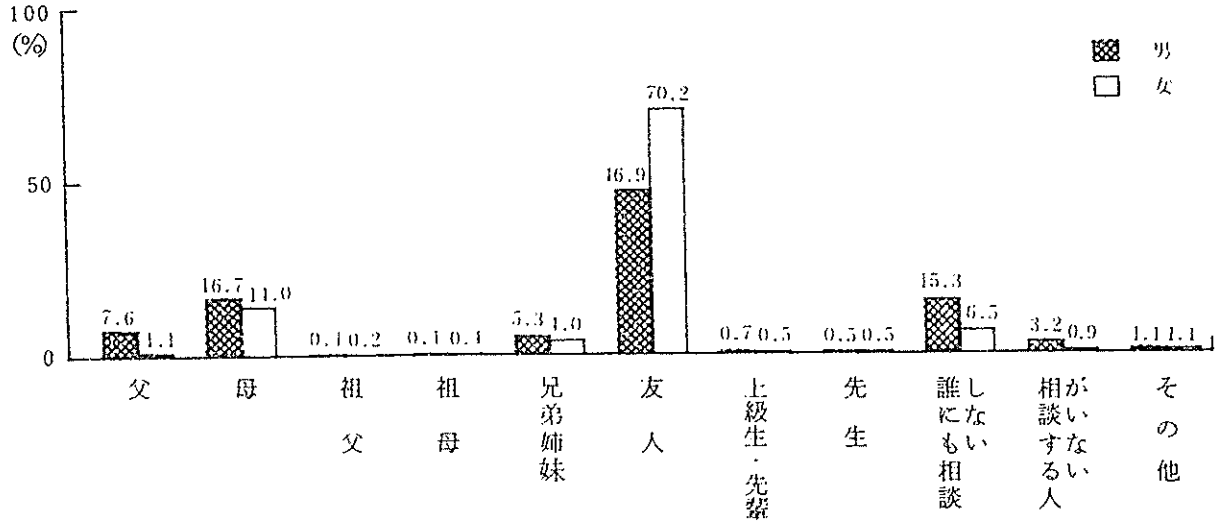
（図１－１１）

あなたが、今もっとも悩んでいること、困っていることを１つえらんで○をつけてください。



（図１－１２）

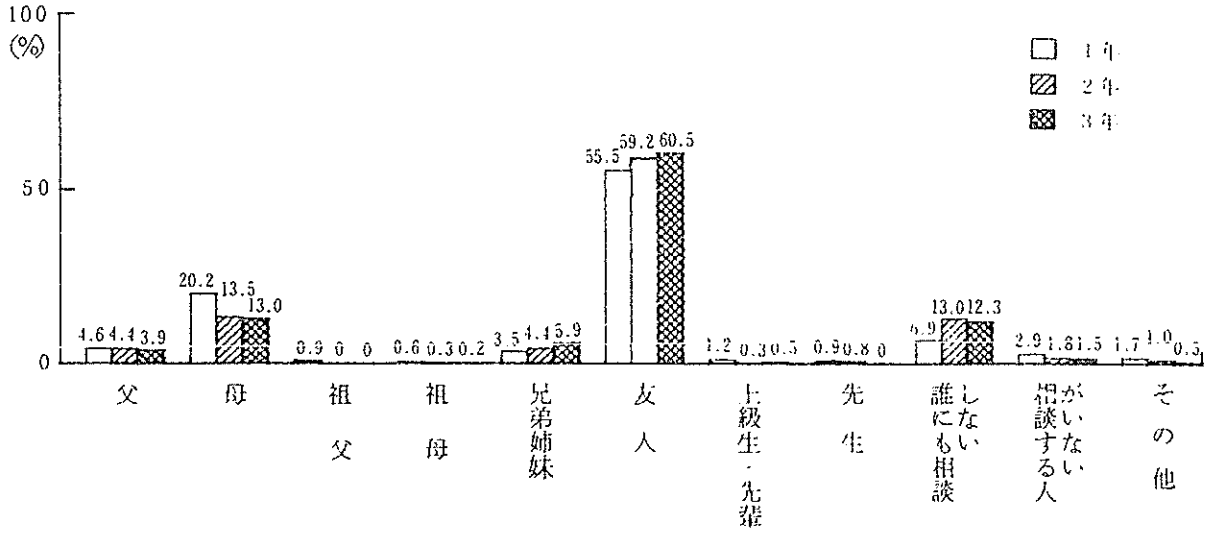
困っていることや悩みを、あなたは誰に相談しますか。



また、学年別にみてみると、図１－13に示したように、学年進行にともなって、親に相談する割合が低下し、「友人に相談する」という割合が増加している。いずれにしても、大半の中学生にとって悩みの相談相手は「友人」といってほぼまちがいない。その反面、教師、父親を悩みの相談相手として選ぶ生徒は全く少数である。

（図１－１３）

困っていることや悩みを、あなたは誰に相談しますか。



(4) クラスにおける活動

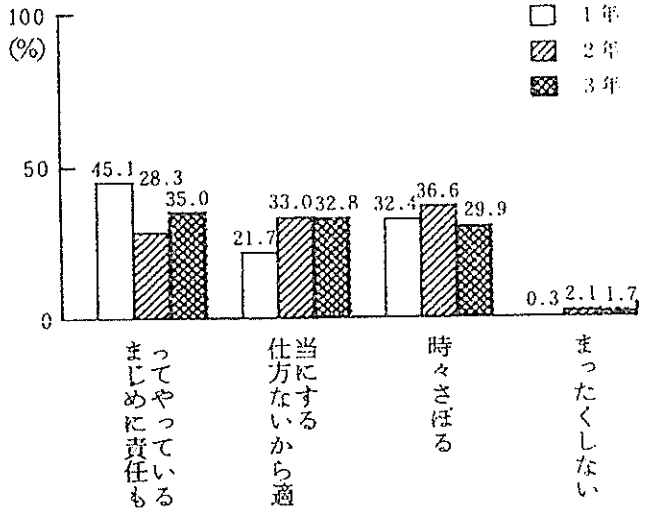
クラスにおいて決められた仕事や、クラス活動について、どんな態度をとっているのかみておこう。

最初に、掃除当番やクラスの決められた仕事に関する態度を、学年別にみてみると、１年生段階が最もまじめな態度を持っている。２年生段階が最もまじめさの欠けている学年と言えそうである。これは、中学校生活に関する、いわゆる「慣れ」であろうか。

一方、体育祭やクラスマッチなどクラス全体の活動については、「積極的に参加する」か、それとも「一応参加する」かの違いはあるにせよ、大半の生徒はこれに参加する姿勢を持っている。ただ、「積極的に参加する」という生徒が学年進行とともに減少し、逆に「一応参加する」という生徒が学年進行とともに増加している。おそらく、これは、受験の影響も考えられるであろう。しかし３年生になって「参加しない」という生徒が増加するというような傾向は全く認められない。

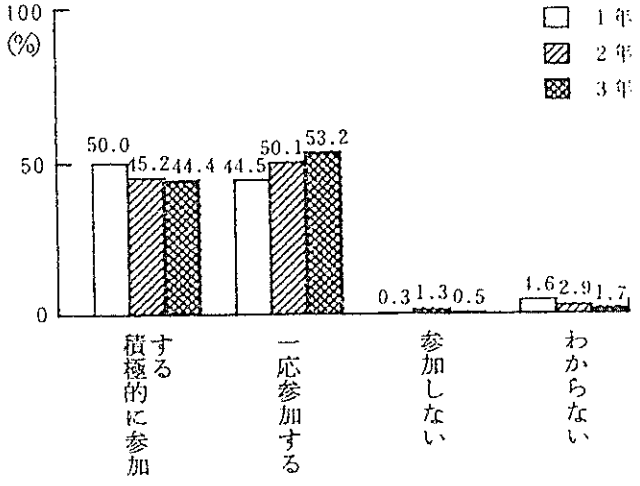
（図１－14）

あなたは、掃除当番やクラスの決められた仕事をどのようにしていますか。



（図１－15）

体育祭、クラスマッチなどクラス全体で何か活動するとき、あなたはそれに対してどのような態度をとりますか。



2　中学生の家庭生活

(1)　家庭生活と両親との交流

まず、大まかに家庭生活に対する満足度からみてみたい。これを男女別に示したのが図２－１である。満足している生徒が、男子 67.5 %、女子 61.6 %をそれぞれ数えており、いずれも６割以上の生徒が家庭生活に満足している。

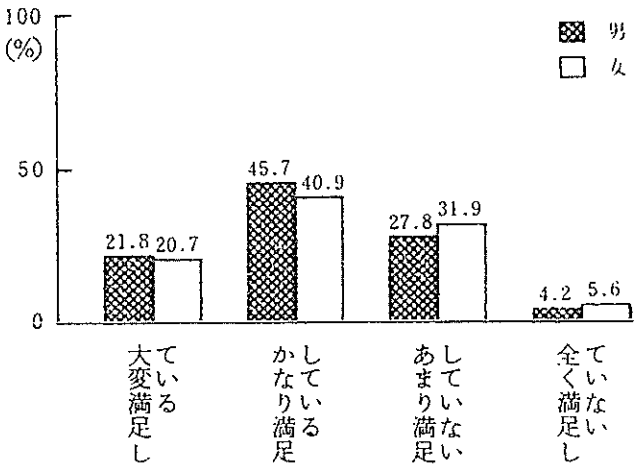
次に、家庭のなかで両親とどの程度対話があるのかみてみよう。なお、両親との対話と一言で言ってもその内容は多岐にわたっている。そこで、対話の内容を、テレビやスポーツに関するような一般的な話題、将来のこと、人生のことといったような話題、そして、学校生活に関する話題の３つに分けて検討することとした。

テレビやスポーツといった一般的な話題については、図２－２に示したような結果が明らかである。これについて、父親と話している生徒は、男子 67.9 %、女子 51.8 % とやはり男子の方が父親との対話を持っている割合が高い。とは言っても、女子も決してその割合が低いわけではなく、半数以上が父親と一般的な話題に対話を持っているようである。

一方、母親との対話については、男子 59.4 %、女子 76.1 %といった状況で、ここではやはり女子が男子を上まわっている。いずれにしても、テレビやスポーツといった一般的な話題に関する限り、両親との対話はあると言ってよいだろう。

（図２－１）

あなたは、家庭生活に満足していますか。



それでは、将来のことといった話題についてはどうだろうか。図２－３に示したように父親との対話では男子 50.4 %、女子 39.5 % と、女子の割合がかなり低下している。母親との対話は、男子 57.5 %、女子 66.4 %といった状況である。

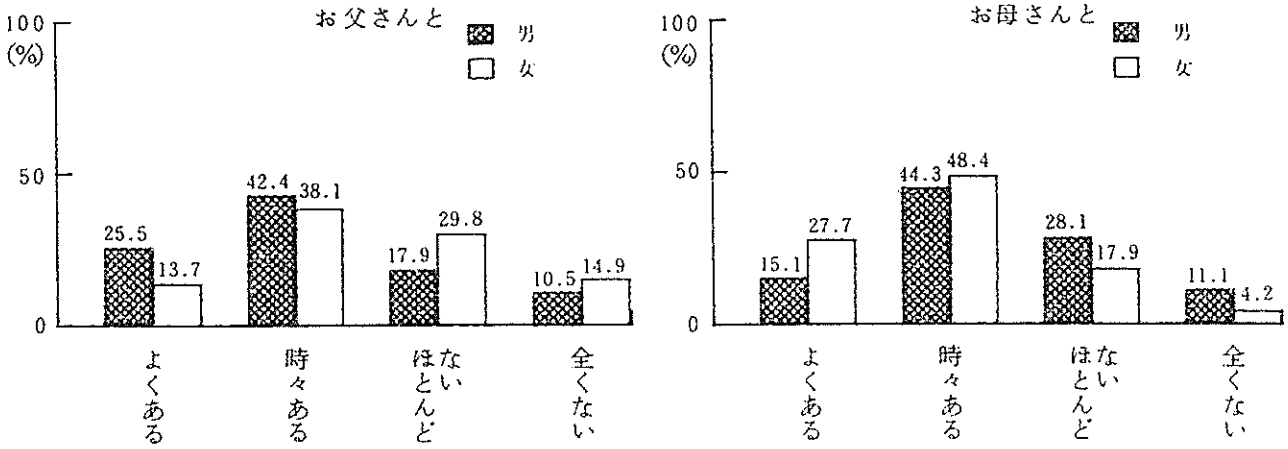
さらに、学校生活に関する話題についてみてみると、父親との対話が「ある」という生徒が男子 48.2 %、女子 43.5 % をそれぞれ数えている。一方、この話題に関して、母親との対話が「ある」という生徒は、男子 67.9 %女子 84.4 %である。学校生活に関するような日常的な話題になると、男女とも圧倒的に母親との対話が密接だと言えよう。

いずれにしても、両親との対話は全体的にみて決して少ないということはない。そして、男子は父親と、女子は母親との対話が多いという傾向である。しかし、男子と母親、女子と父親との対話が少ないというようなことはほぼ認められない。また、学校生活に関するような話題については、男女とも母親との対話が多いようである。

このことは、父母との対話のなかでよく話題にのぼる内容を示した図２－５をみても明らかである。

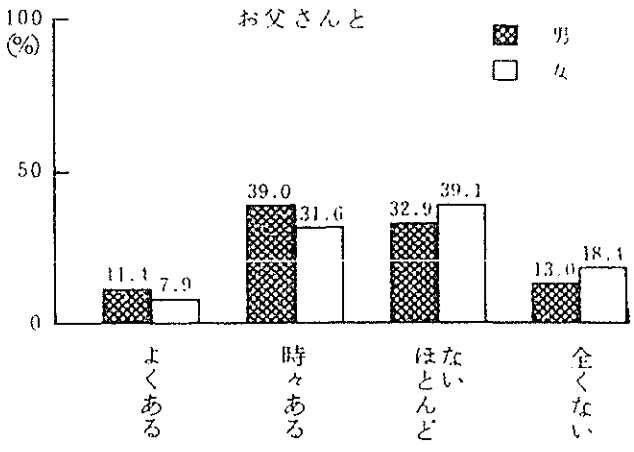
（図２－２）

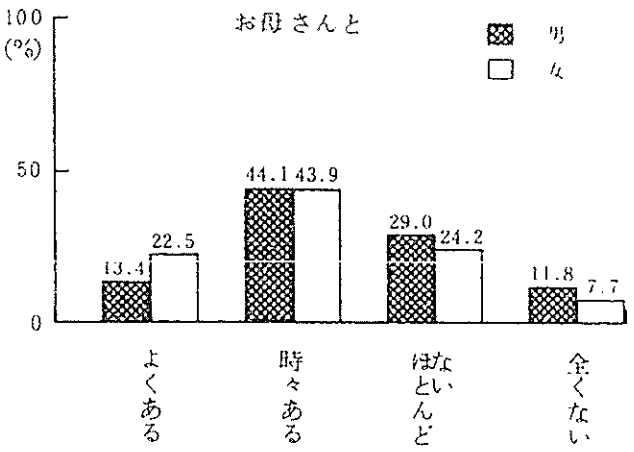
あなたは、お父さんやお母さんとテレビのことやスポーツのことなどについて話すことがありますか。



（図２－３）

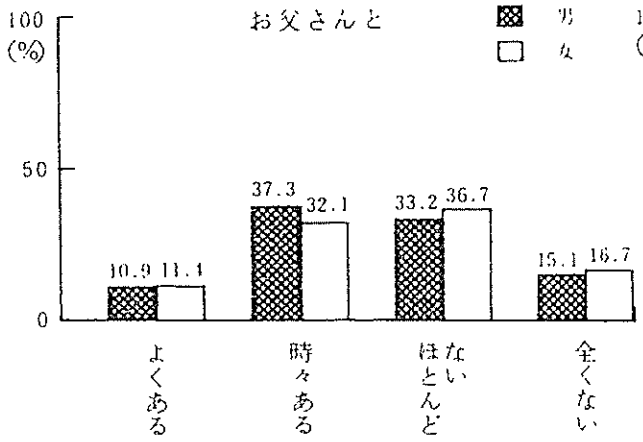
あなたは、お父さんやお母さんと将来や人生のことについて話すことがありますか。（成人してどんな仕事につくか、どんな生き方をするかなど、受験以外のことで）

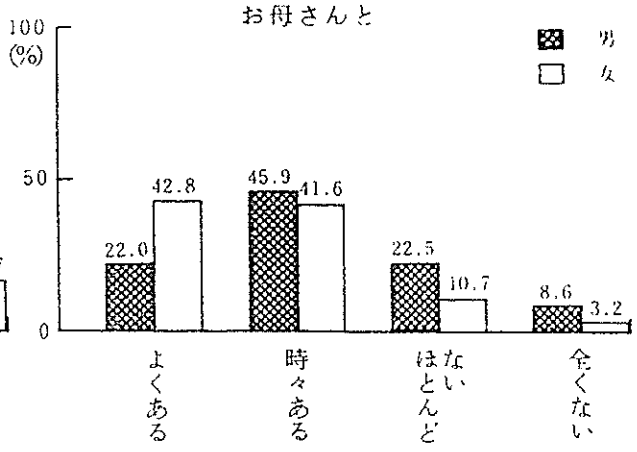




（図２－４）

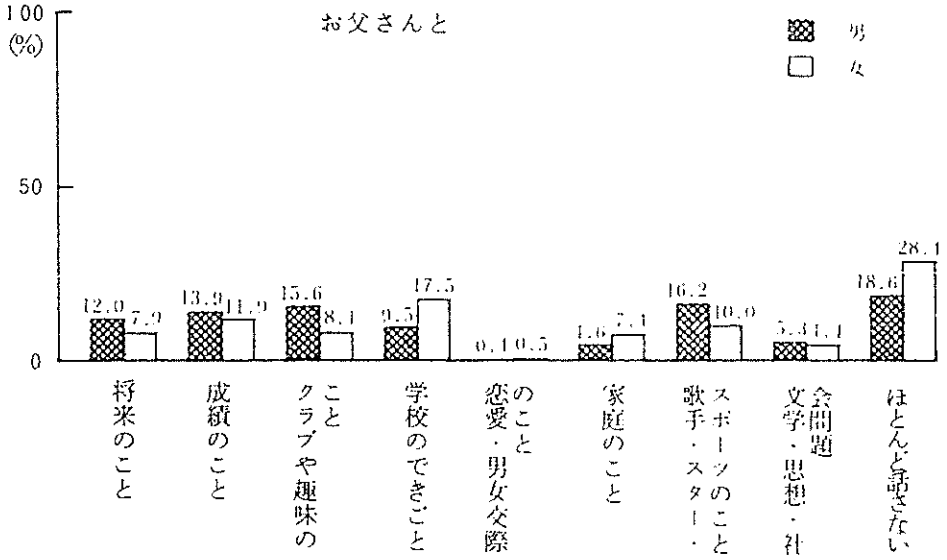
あなたは、お父さんやお母さんと学校生活のこと（例えば、授業のこと、クラブのこと、先生のこと、友だちのこと、学校行事のことなど）について話すことがありますか。

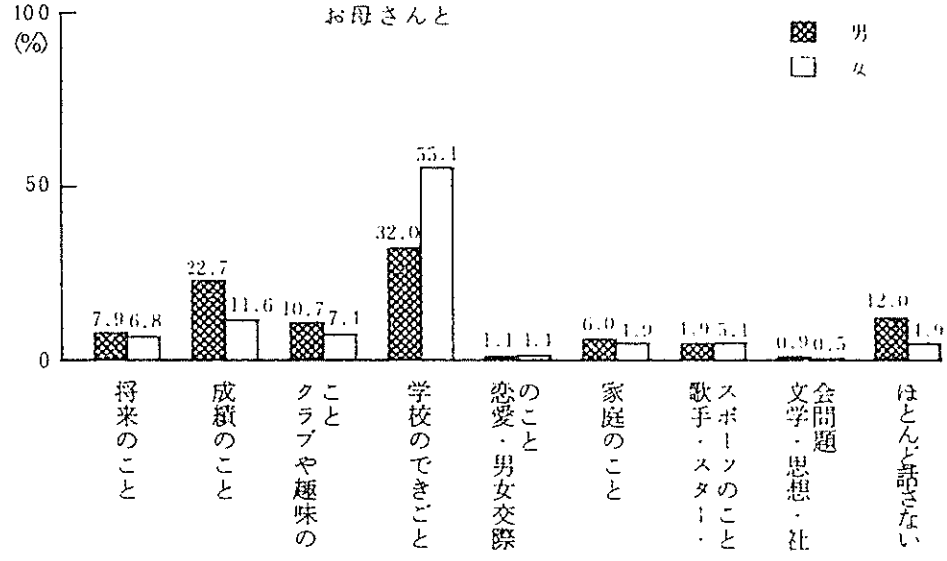




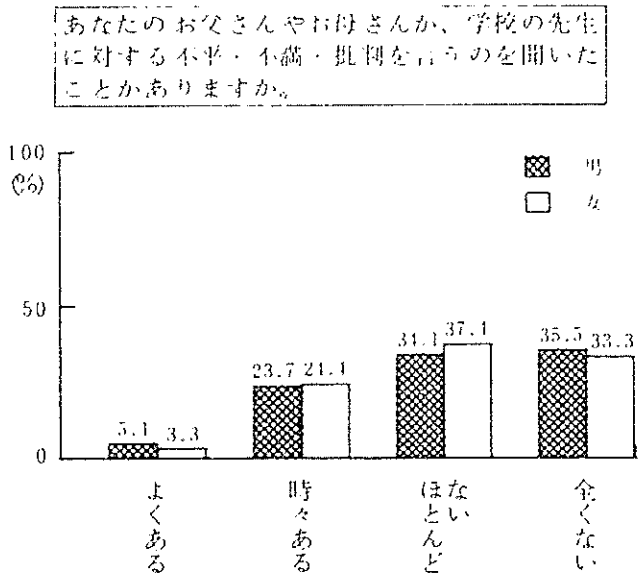
（図２－５）

あなたは、お父さんやお母さんと、おもにどんなことについて話しますか。もっともよく話すことを１つずつあげてください。





（図２－６）



なお、これは、両親との直接的な対話ではないが、家庭のなかで教師への不平、不満、批判を聞いたことがあるかどうかをみておきたい。「よくある」という生徒が男子で5.1％、女子でも3.3％を数えている。「時々ある」という生徒では、男子23.7％、女子では24.4％をも占めている。

いずれにしても、こうした不平、不満、批判を「全く聞いたことがない」生徒は、男女とも35％程度にとどまっており、残りの65％程度の生徒は父母の口から何らかの教師批判を聞いていることになる。

この数をみる限り、子どもの前で安易な教師批判が行われていると考えざるを得ない。このことは重大な問題である。

(2) 父親イメージと母親イメージ

中学生にとって、自分の父親や母親はどんな存在なのだろうか。最初に、両親を信頼しているのかどうかをみてみたい。図２－７は、男女別に、父親・母親を信頼しているかどうか示したものである。

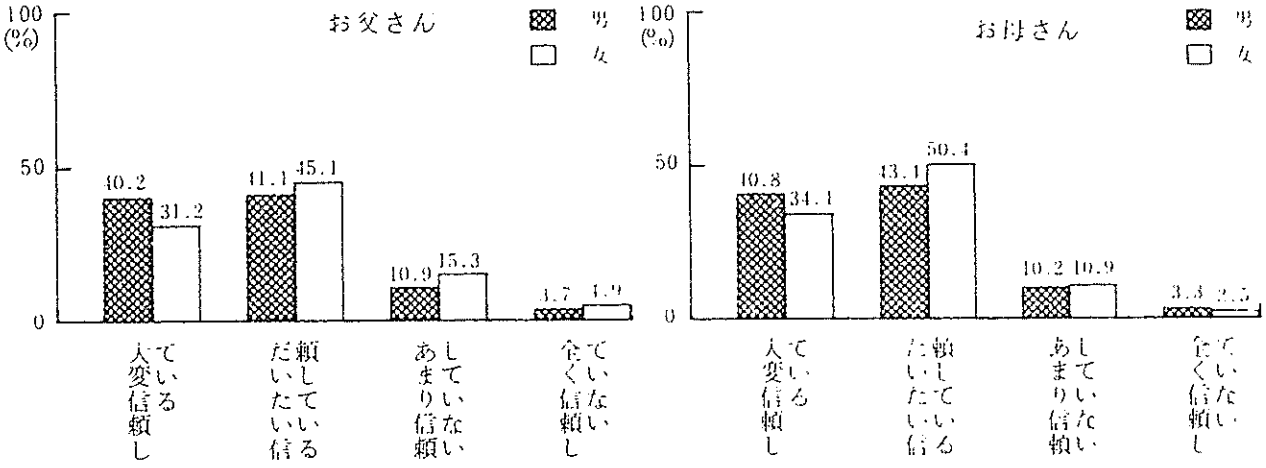
父親を「信頼している」という生徒は、男子81.3％、女子76.3％と、全体の７割以上の生徒が父親に対して信頼感を抱いている。その反面「全く信頼していない」という生徒も、男子3.7％、女子4.9％と、わずかながら認められる。

一方、母親を「信頼している」という生徒は、男子84.2％、女子84.8％と、母親については全体の８割以上の生徒が信頼感を抱いている。また、母親についても「全く信頼していない」という生徒が男子3.3％、女子2.5％認められる。

全体的にみて、父親には全体の７割以上、母親には８割以上の生徒が信頼感を抱いており、その面では問題が少ない。ただ、父親、母親に対して、数こそわずかであるが、「全く信頼していない」という生徒が３％～４％ほど認められるとは中学生に限らず子どもにとって、父親・母親は「男性モデル」、「女性モデル」としての役割は大きく、その意味で子どもから全く信頼されていない父親、母親はやはり問題である。

（図２－７）

あなたは、お父さんやお母さんのことをどう思っていますか。



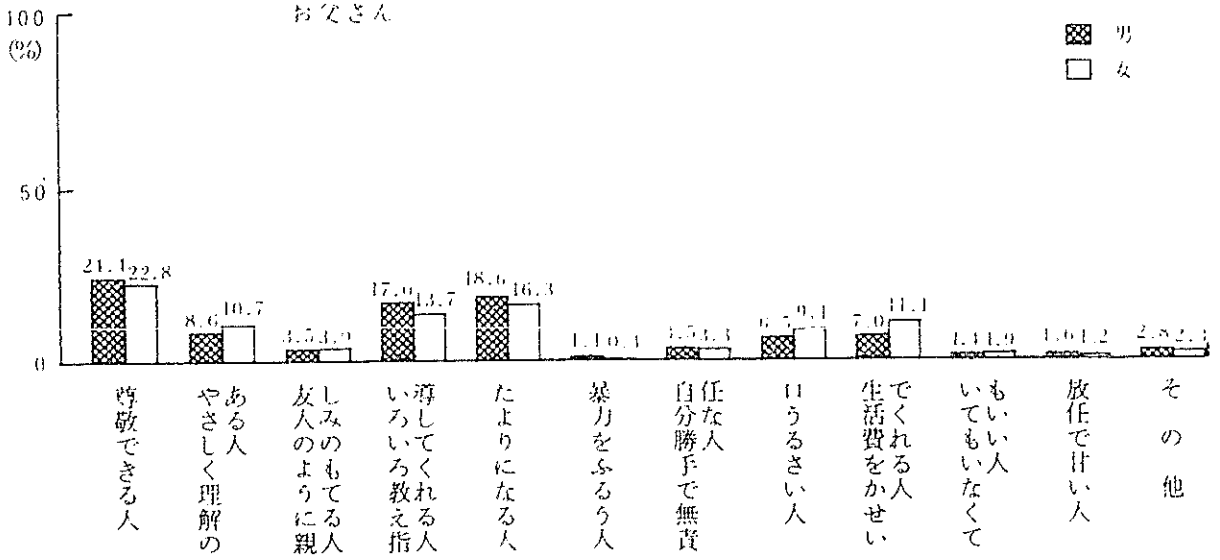
それでは、子どもは父親や母親をどのような存在としてみているのだろうか。これを図２－８に示した結果からみておこう。父親については、男子の場合、「尊敬できる人」という生徒が最も多く、24.4％を数えている。次いで、「頼りになる人」18.6％、「いろいろ教え指導してくれる人」17.0％といった状況に並んでいる。女子の場合でも、やはり「尊敬できる人」という生徒が最も多く22.8％、次いで、「頼りになる人」16.3％、「いろいろ教え指導してくれる人」13.7％といった順序である。

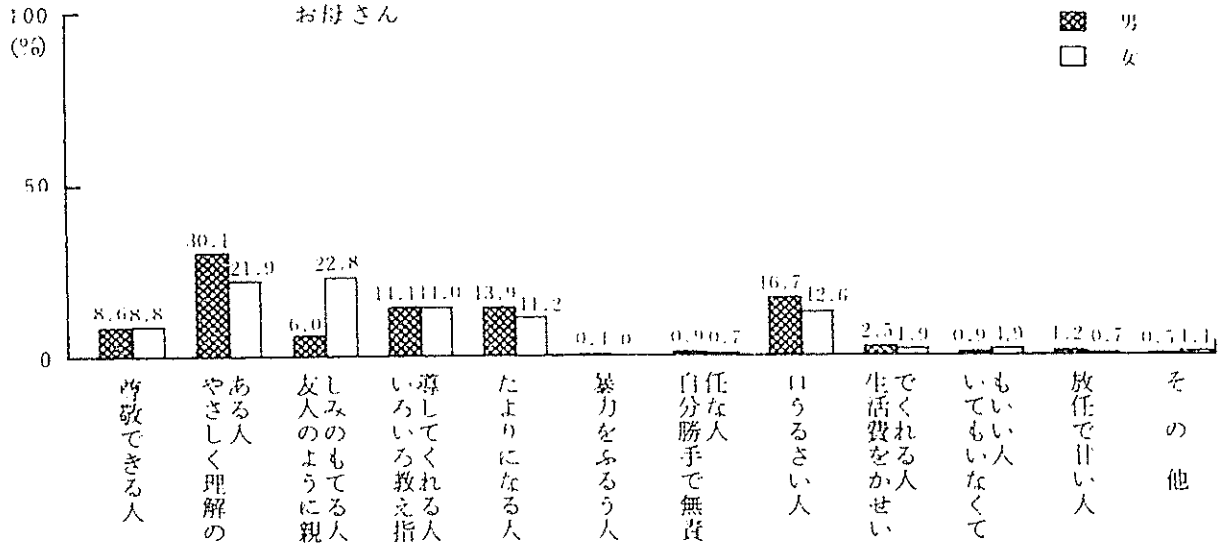
このように、父親に関しては、男女とも、「尊敬できる人」、「頼りになる人」、「教え指導してくれる人」といったプラス・イメージが強い。しかし、その反面、「暴力をふるう人」、「自分勝手で無責任な人」、「生活費をかせいでくれる人」、「いてもいなくてもいい人」といったマイナス・イメージを持つ生徒が、あわせて15％いることも無視できないであろう。

一方、母親についてはどうだろうか。男子の場合では、「やさしく理解ある人」という生徒が最も多く30.1％を占め、次いで、「口うるさい人」16.7％、さらに、「いろいろ教え指導してくれる人」14.1％、「頼りになる人」13.9％といった状況である。女子では、「友人のように親しみのもてる人」22.8％、「やさしく理解のある人」21.9％、「いろいろ教え指導してくれる人」14.0％、そして、「口うるさい人」12.6％、「頼りになる人」11.2％と続いている。このように母親の場合は、やさしい母親イメージが男女とも認められるが、一方で、「口うるさい人」ということばに象徴されるようなイメージのあることも否定できない。

（図２－８）

あなたにとって、お父さん、お母さんはどのような存在ですか。あてはまるものを1つずつえらんでください。





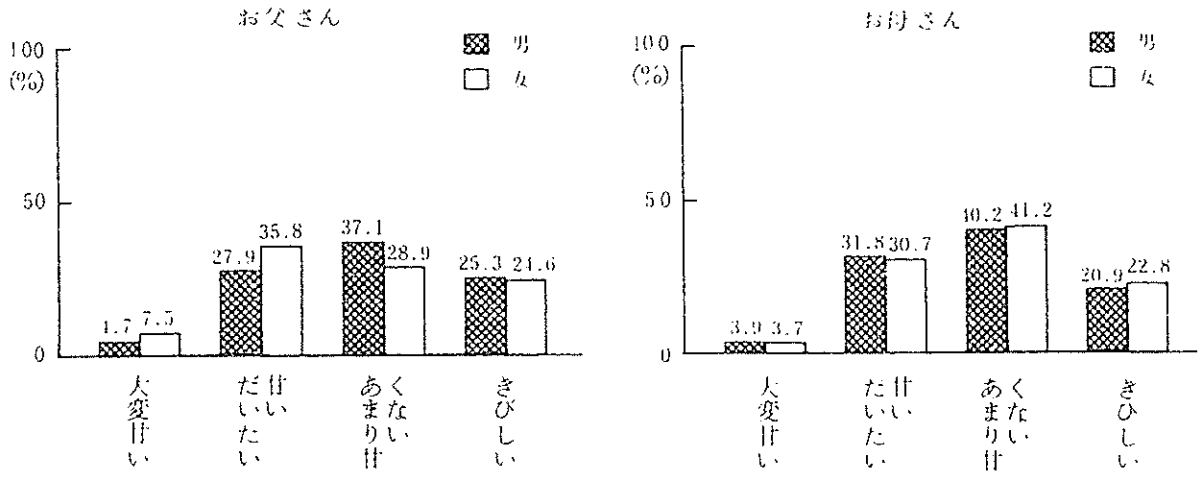
(3) 家庭における養育態度

親は中学生の子どもに対しどのような姿勢をとっているのだろうか。図２－９に示した結果から、これをみてみたい。父親に関しては、「甘い」と感じている生徒は、男子が32.6％、女子では43.3％と、女子の方が父親を「甘い」と感じている割合がやや高い。伝統的な父親イメージは、きびしいという傾向にあったが、現在ではこうしたきびしい父親イメージは、あてはまらなくなっている。

一方、母親に対しては、「甘い」と感じている生徒が、男子35.7％、女子34.4％と　といった状況である。男子では、父親を「甘い」と感じている割合も、母親を「甘い」と感じている割合も同じ程

（図２－９）

全体的にみて、お父さんやお母さんはあなたに対して甘いほうだと思いますか。



度であるが、女子では、母親よりむしろ父親の方が「甘い」という傾向にある。

それでは、親は子どもに対して、どのような内容について、きびしくしつけたり、注意したりしているのだろうか。

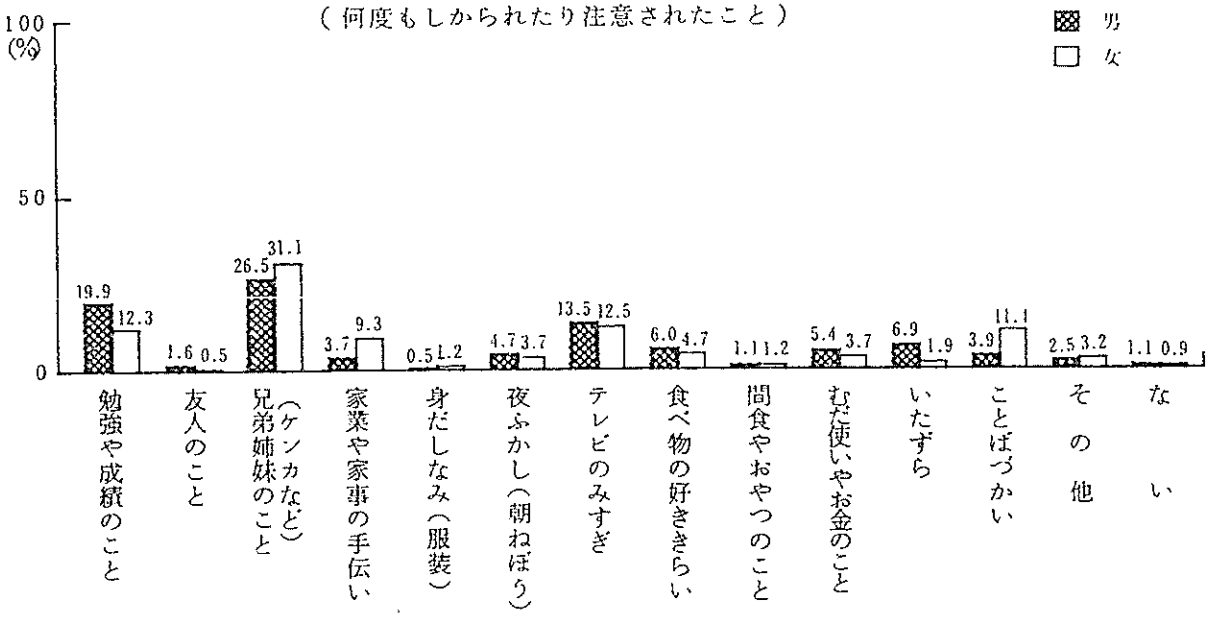
まず、子どもが小学校段階の時、何度も叱られたり、注意されたことが一体どのような内容なのかみてみよう。図２－10に示したように、男子では、「兄弟姉妹（ケンカなど）」のこと26.5％、次いで、「勉強や成績のこと」19.9％、そして、「テレビのみすぎ」10.5％といった順序で並んでいる。女子では、「兄弟姉妹（ケンカなど）のこと」31.1％、「テレビのみすぎ」13.5％、さらに、「勉強や成績のこと」12.3％といった状況である。

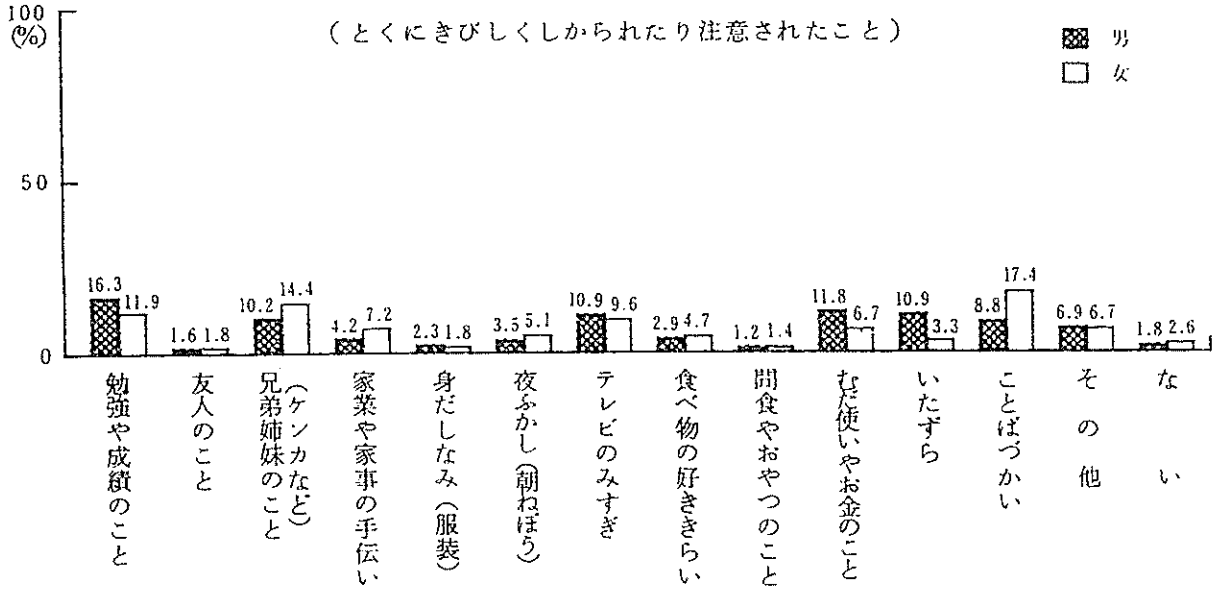
一方、同じく小学校段階で、きびしく叱られたり、注意された内容についてみてみると、男女ともかなり多岐にわたっており、きわ立って高い項目は認められない。一応男女別に割合の高い内容をみてみると、男子では、「勉強や成績のこと」16.3％、「むだづかいやお金のこと」11.8％、「テレビのみすぎ」10.9％といった状況である。女子では、「ことばづかい」17.4％、「兄弟姉妹（ケンカなど）のこと」14.4％、そして、「勉強や成績のこと」11.9％というような状況である。きびしく叱られたり、注意されたりした内容の方が、むしろ男女別の差異が生じているようである。

中学校段階では、これがどうなっているのだろうか。何度も叱られたり、注意された内容をみると男子では、「勉強や成績のこと」がかなり高い割合を占めており、31.8％を数えている。次いで「兄弟姉妹（ケンカなど）のこと」14.2％、「テレビのみすぎ」が13.4％である。女子では、「勉強や成績のこと」23.2％、「兄弟姉妹（ケンカなど）のこと」15.4％、「家業や家事の手伝い」12.6％といった順序である。中学生段階になると、「勉強や成績のこと」で何度も注意されたり、叱られた

（図２－１０）

小学生の頃、親にきびしくしかられたり、注意されたりしたのはどのような場合ですか。それぞれ１つずつえらんでください。





りしている実態が明らかである。

一方、中学生段階で、きびしく叱られたり、注意されている内容をみてみると、男子では「勉強や成績のこと」20.0％、「テレビのみすぎ」11.6％といった状況であり、女子になると、「勉強や成績のこと」20.4％に続いて、「ことばづかい」が14.7％を占めている。

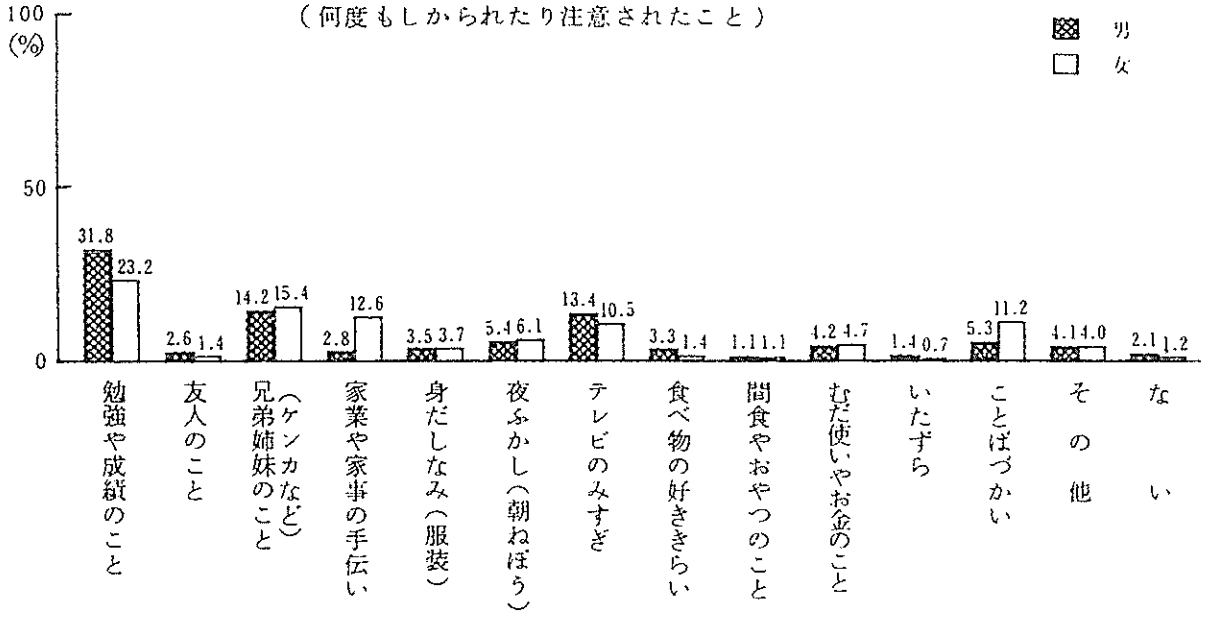
いずれにしても、中学生段階になると、男子も女子も、「勉強や成績のこと」が最もきびしく注意されたり叱られたりする内容であり、かつ何度もたび重なっているようである。結局のところ、中学

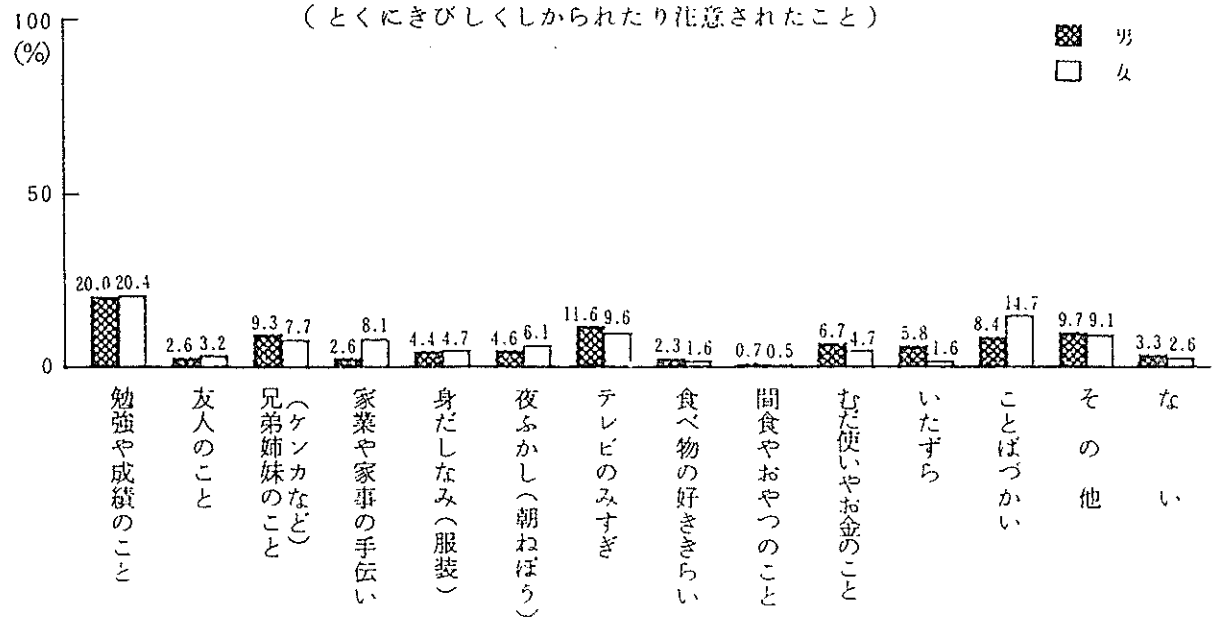
生を持つ親は、その他の内容についても注意したり、叱ったりしてはいると思われるが、それ以上に勉強や成績に関する内容を最も重視していることが明らかである。

なお、家庭において両親からどの程度性教育を受けているのかを、図2－12からみておこう。「よくある」という生徒は、男子で1.6％、女子で4.9％と全く少数である。「時々ある」という生徒は、男子10.2％、女子27.4％を数えている。女子の方が男子に比べ性教育を受けている割合は高いが、それにしてもそれは半数にとても満たない程度である。

（図2－11）

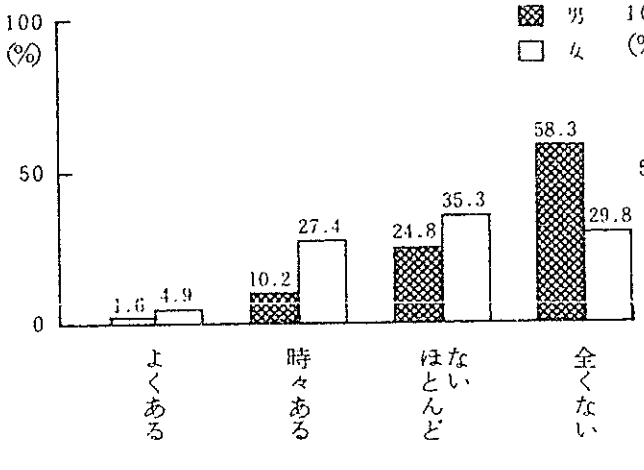
中学生になって、親にきびしくしかられたり、注意されたりするのはどのような場合ですか。それぞれ1つずつえらんでください。





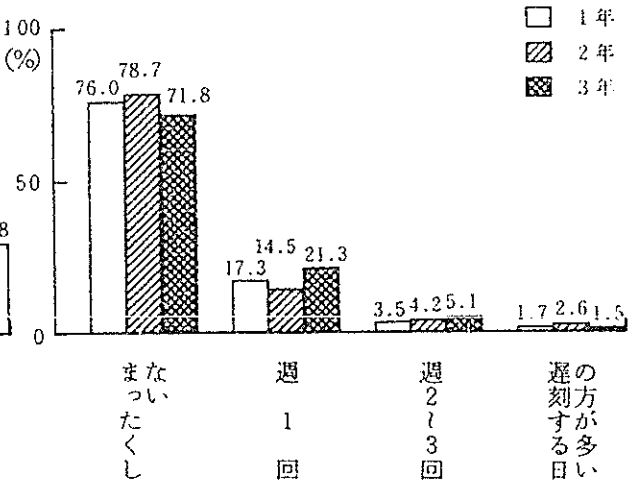
（図２－１２）

あなたのお父さんやお母さんは、あなたに性のこと（性教育）について教えたり、助言してくれたりしますか。



（図２－１３）

あなたは、遅刻をしますか。



(4)　基本的生活習慣

家庭生活の中における、中学生の生活習慣について若干ふれてみたい。まず、遅刻の有無についてみると、図２－13に示したように、全体の７割以上の生徒が遅刻を全くしないという。しかし、週１回程度遅刻する生徒が、１年生では17.3％、２年生14.5％、そして、３年生になると21.3％と決して少なくない割合である。しかも、「遅刻する日の方が多い」という生徒もわずかではあるが認められる。特に、遅刻する日の方が多いという生徒は、健康上の理由がなくて遅刻するのだとすれば問題はかなり大きい。

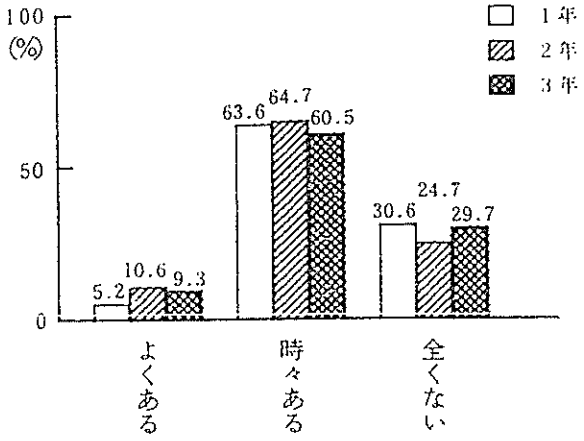
では、家庭での食事に対して、それに文句を言ったり、好き嫌いによって残すことがある生徒はどの程度いるのだろうか。食事の習慣については、健全な発育の上からも極めて重要な問題である。特に発育ざかりにある中学生世代においては、その意味は極めて大きい。ところが、文句を言ったり、食事を残したりすることが「全くない」という生徒は、ほぼ全体の３割程度しかみられない。そして、６割程度の生徒は「時々ある」としており、さらに、１割程度の生徒にいたっては「よくある」としている。

すでにみたように、中学生に対する親のしつけは、勉強や成績に集中している傾向がみられる。しかし、こうした食事の習慣に関するしつけもそれ以上に重要であることを十分認識する必要がある。

さらに、家の手伝いについては、これをどの程度しているのだろうか。最初に、小学校段階にさかのぼってみると、「していた」という生徒が男子73.5％、女子75.8％と、男女差はほとんどなく、しかも全体の７割以上の生徒が家の手伝いをしていたようである。

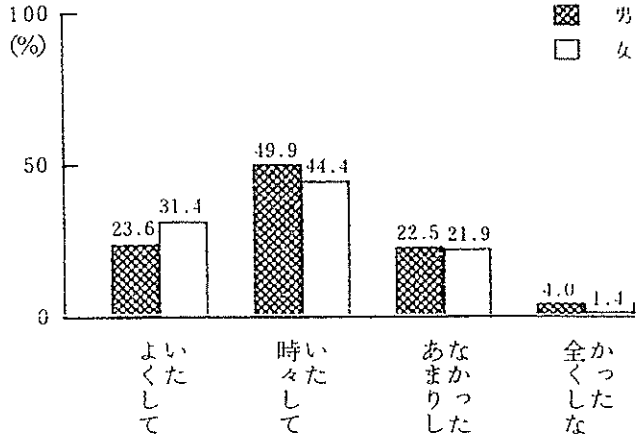
（図２－14）

家の食事の時、あなたは食事に文句を言ったり、好き嫌いによって残したりすることがありますか。



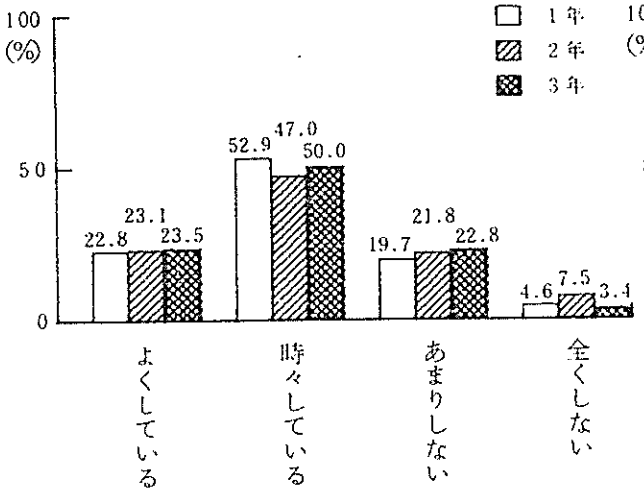
（図２－15）

小学校の頃、あなたは、お父さんやお母さん（家）の手伝いをしていましたか。



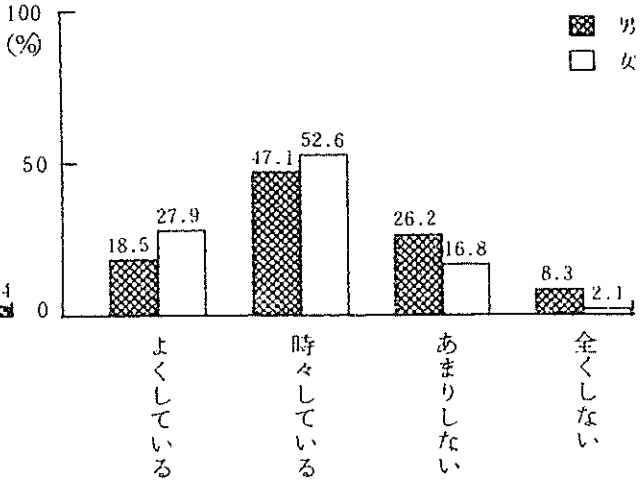
（図２－16）

中学生になって、あなたは、お父さんやお母さん（家）の手伝いをしていますか。



（図２－17）

中学生になって、あなたは、お父さんやお母さん（家）の手伝いをしていますか。



これが中学生段階になるとどう変化するのか、図２－16をみてみよう。男子では「手伝いをする」という生徒が 65.6 %、女子になると 80.5 %を数えるようになる。小学生段階に比べて、男子では家の手伝いをする割合が低下し、女子は逆に増加している。こうした男女間の違いは、おそらく親の男の子と女の子に対するしつけの差異によるものであろう。

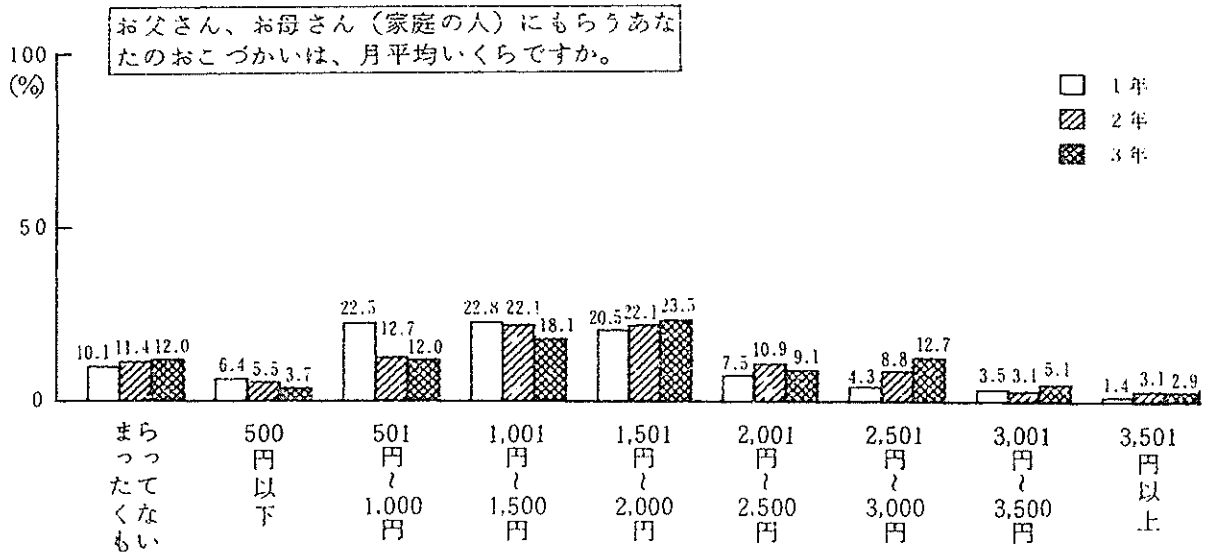
なお、中学生段階における家の手伝いの有無については学年差は全く認められない。このことは、家の手伝いと受験とは関係なく、家の手伝いをさせる家庭がある一方、これを全くさせない家庭もあることも明らかである。ただ、この家の手伝いについて、子どもはしていると思っているのに対し、親はさせていないといったように、認識のずれがあることもみのがせないことだろう。

(5) こづかいとアルバイト

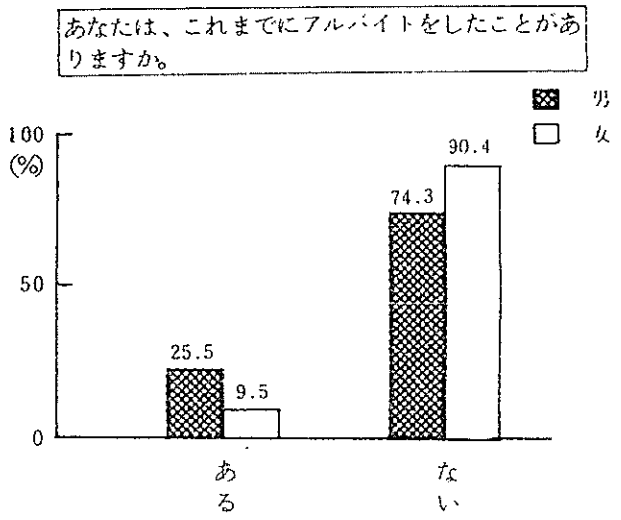
中学生がどの程度こづかいをもらっているのかみておこう。図２－18 示したように、月額のこづかいは、ほぼ「５０１～2,０００円」のあいだに集中している。１年生では、「５０１～1,０００円」が22.5％、「1,００１～1,５００円」22.8％、「1,５０１～2,０００円」20.5％であるのに対し、３年生になると、「５０１～1,０００円」が12.0％、「1,００１～1,５００円」18.1％、そして、「1,５０１～2,０００円」が23.5％と、やはり学年の上昇にともなってその額も増加傾向にある。

次に、アルバイト経験の有無についてみてみよう。これは、学年進行にともなってアルバイト経験

（図２－18）



（図２－19）



率が増加することが予想されるため、男女別の結果を図２－19に示しておいた。アルバイト経験は、圧倒的に男子の方が多く、男子25.5％に対して、女子はわずか9.5％にとどまっている。

3　中学生の日常生活と関心

(1)　勉強時間と学習塾・家庭教師

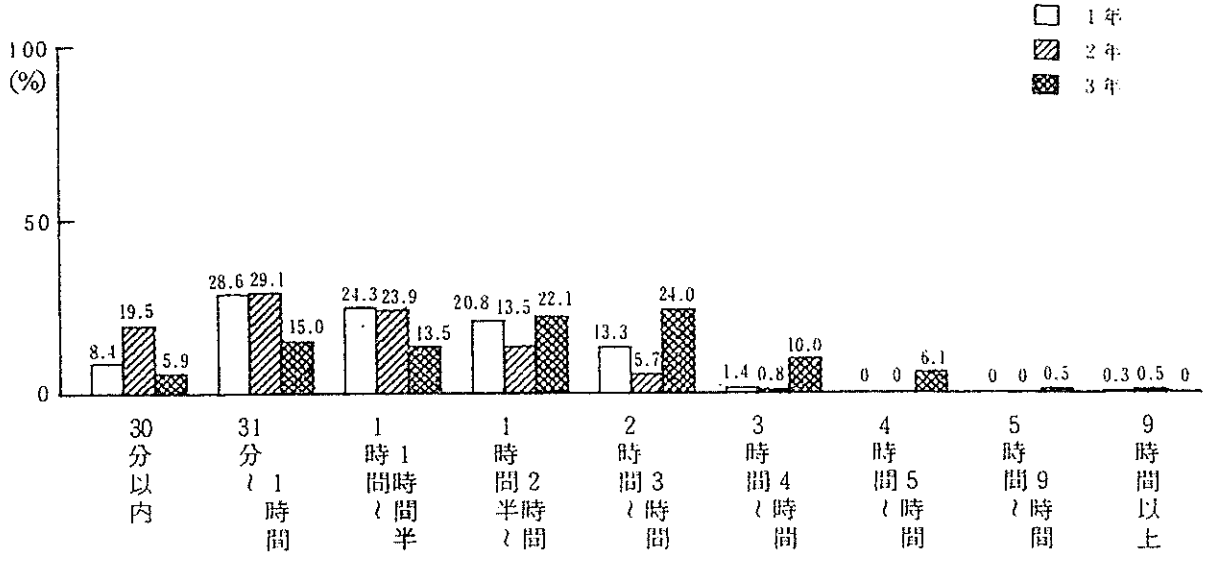
中学生が、ふだん家庭でどの位の時間勉強しているのかを示したものが、図３－１である。１年生２年生段階では、ほぼ３時間以内に集中している。１年生でみてみると「 31分～１時間」が28.6％で最も多く、以下「１時間～１時間30分」24.3％、「１時間31分～２時間」20.8％、「２時間～３時間」13.3％といった具合に並んでいる。

ところが、３年生になると、「２時間～３時間」が最も多く24.0％を数えている。それに続いて、「１時間30分～２時間」22.1％である。そして、３年生では「３時間～４時間」が10.0％、「４時間～５時間」も6.1％を数えている。

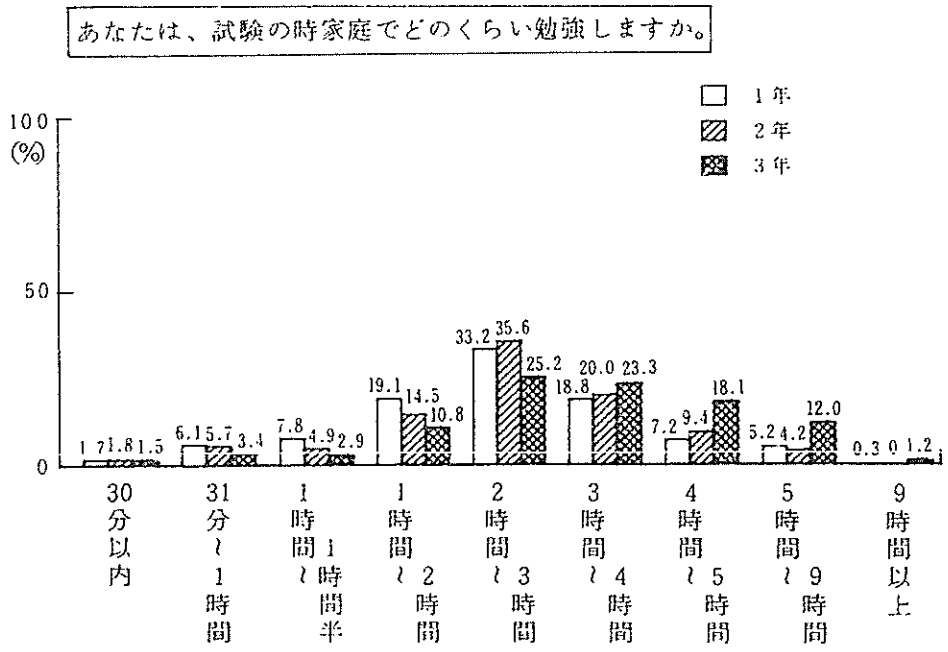
では一体、試験の時にどの位の時間勉強しているのだろうか。図３－２に示したように、どの学年についても、日常的な勉強時間よりかなり増加傾向にある。各学年とも最も多い時間は、「２時間～３時間」で、１年生33.2％、２年生35.6％、３年生では25.2％を数えている。３年生については、「３時間～４時間」が23.3％、「４時間～５時間」18.1％、さらに「５時間～９時間」という生徒が

（図３－１）

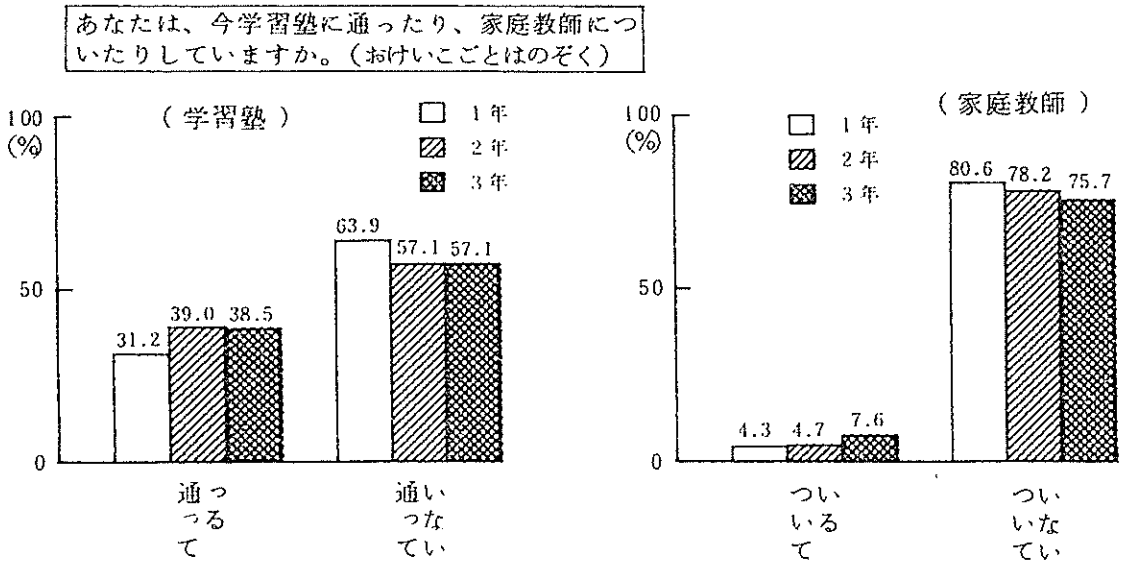
あなたは、ふだん家庭でどのくらい勉強しますか。



（図３－２）



（図３－３）



12.0%にも及んでいる。いずれにしても、かなり勉強時間を大幅にとっていることはまちがいない。

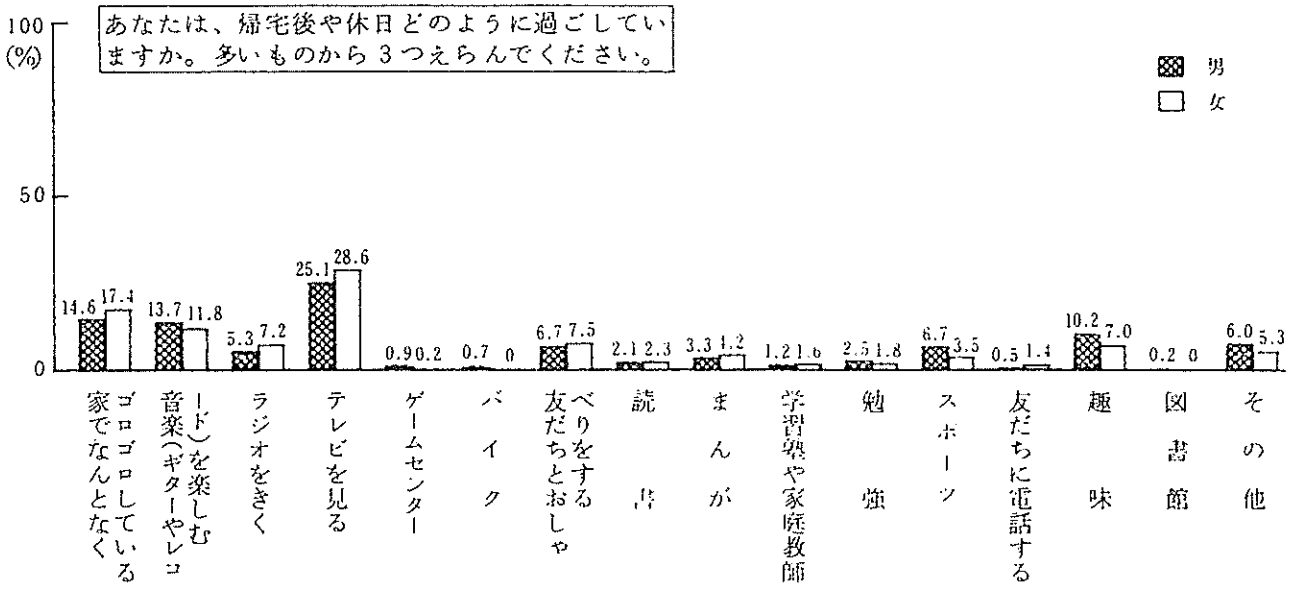
ところで、どの位の割合の生徒が学習塾に通ったり、家庭教師についたりしているのだろうか。この結果は、図３－３に示しておいた。全体的にみて、学習塾に通っている生徒は、ほぼ３割～４割家庭教師についている生徒は４％～５％程度である。そして、学習塾、家庭教師とも、３年生の方が１年生、２年生に比べて割合が高くなっている。こうした結果は、ある意味で当然であろう。しかしそうは言っても、１年生の割合は３年生のそれに比べて極端に低いというわけではない。つまり、す

でに１年生の段階から、受験を真近にひかえた３年生とほとんど変わりないほどの、通塾率をもち、家庭教師についているのである。

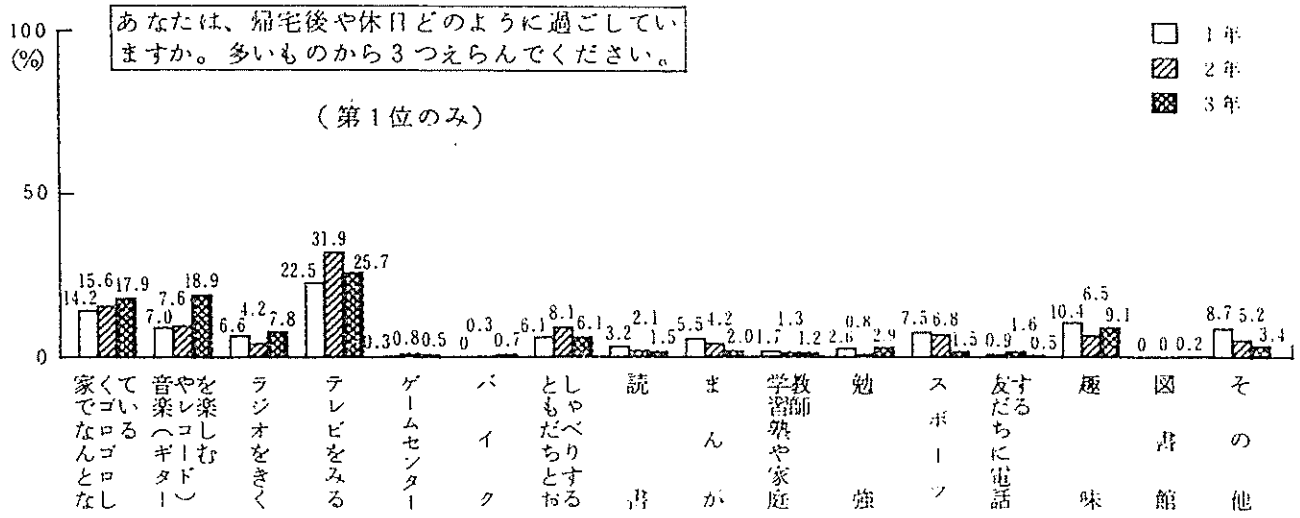
(2) 帰宅後や休日の生活

学校から帰宅した後や、休日に、生徒がどんな過ごし方をしているのかみてみよう。最もよくしている内容を男女別に示したものが図３－４である。最も多い内容が、「テレビをみる」というもので、男子25.1％、女子28.6％を数えている。 次いで、「家でなんとなくゴロゴロしている」生徒、これは男子14.6％、女子17.4％といった状況である。 さらに、「音楽（ギターやレコード）を楽しむ」という内容が続いており、男子13.7％、女子11.8％をそれぞれ数えている。 男女ともこれら三つの内容だけで全体の半数以上を占めている。いずれにしても、中学生の帰宅後や休日の過ごし方は、それほど活動的ではないようである。

（図３－４）



（図３－５）



一方、これについて学年別に示したものが、図３－５である。それほど極端な学年差は認められない。ただ、３年生になると他の学年に比べて「家でなんとなくゴロゴロしている」、「音楽（ギター、レコード）を楽しむ」といった内容が増加している。

(3) テレビとラジオの視聴

すでにみたように、休日や学校から帰宅した後、テレビをみている中学生がかなり多い。一般に最近の中学生は、ラジオをききながら勉強するという、いわゆる「ながら勉強」がほとんどだと言われている。そこで、中学生は、１日どの位テレビをみているのか明らかにしておきたい。

図３－６は、学年別に１日のテレビ視聴時間を示したものである。各学年とも、最も多いのは、テレビを１日「２時間」ほどみるというものである。１年生では、これが17.9％、２年生17.9％、３年生21.8％といった状況である。逆に、「全くテレビをみていない」という生徒は、１年生1.7％、２年生0.5％、そして３年生が1.2％と全くわずかである。このことは、テレビがいかに子ども達の生活のなかに浸透しているかを示す結果であろう。

そして、１日にテレビを「３時間～４時間」程度もみるという生徒もかなり多く、学校から帰った後、ずっとテレビの前にクギづけといった生徒の存在を示している。

それでは、中学生は一体どのような番組を好んでみているのだろうか。これを性別に示したものが

（図３－６）

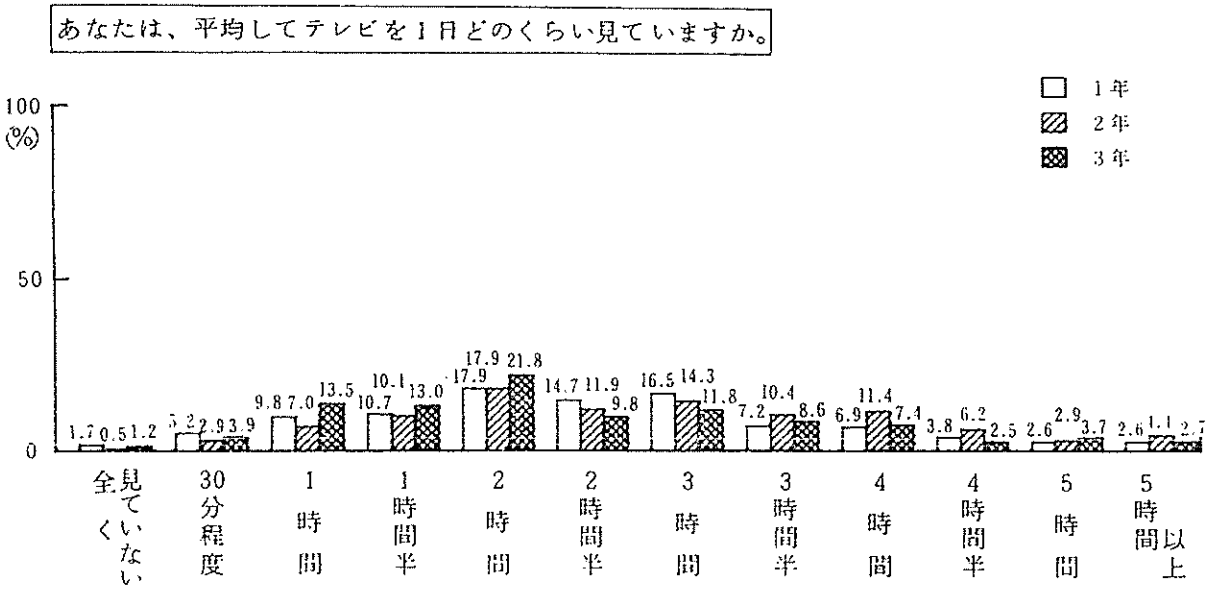
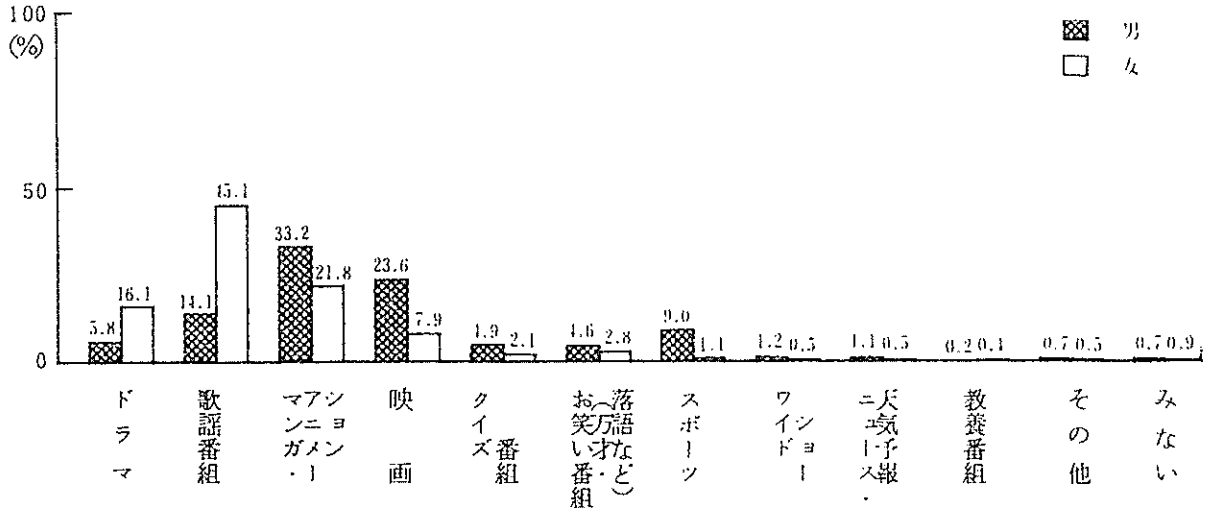


図３－７である。男子では、最も割合の高い番組が「マンガ・アニメーション」で33.2％、次いで、「映画」23.6％、さらに、「歌謡番組」14.1％、「スポーツ」9.0％といった状況で続いている。

（図３－７）

あなたは、どんなテレビ番組をよくみますか。

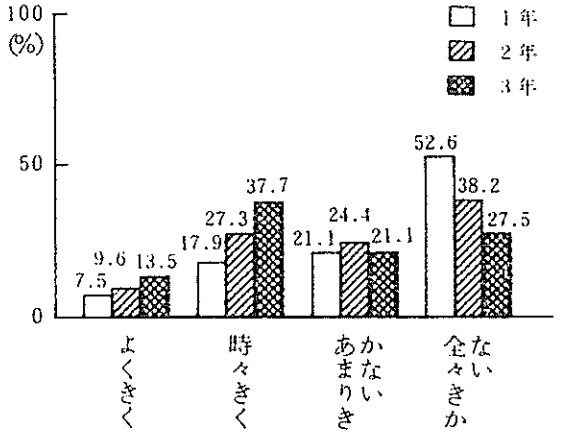


女子では、「歌謡番組」の割合が最も高く45.1％を数えている。次いで、「マンガ・アニメーション」21.8％、「ドラマ」16.1％さらに「映画」7.9％といった状況に並んでいる。

一方、「ニュース、天気予報、教養番組」といった内容については、男女ともほとんどみていないようである。

（図３－８）

あなたは、ラジオの深夜放送をききますか。



次に、ラジオをきいている割合をみてみよう。ここでは主としてラジオの深夜放送をきいている割合について示しておいた。図３－８に示したように、ここでは学年差がかなり明確に生じている。１年生段階では「よくきく」7.5％、「時々きく」17.9％、それほどラジオの深夜放送をきいている割合は高くない。ところが、３年生になると、「よくきく」13.5％、「時々きく」37.7％と、全体の半数以上の生徒がラジオの深夜放送をきいている。つまり、中学生世代でも、学年進行にともなって、ラジオの深夜放送をきく割合が増加しているのである。

このことは、すでに述べたような「ながら勉強」をしている生徒がいかに多いかを示すものである。言うまでもなく、３年生が１日の勉強時間は最も長い。そして、勉強時間が長くなればなるほどラジオの深夜放送をきいている割合が増加するという、常識的に考えれば「奇妙」な現象がそこにあるの

である。

(4) 中学生の関心

中学世代の関心領域についてみてみよう。ここでは、異性に対する関心、性に対する関心、そして、流行、ファッション、音楽といったものにどのような考え方を持っているのかみてみたい。

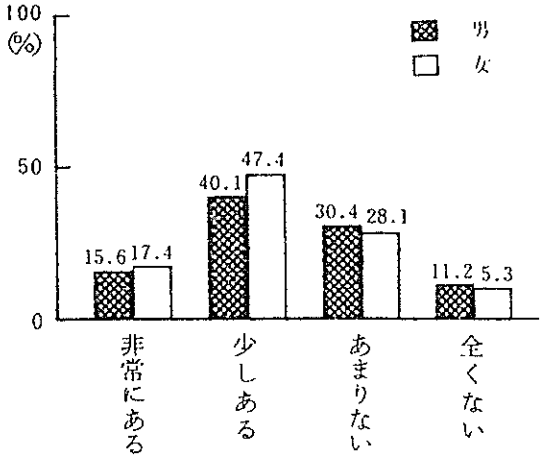
まず、異性への関心について性別に示した図３－９をみると、男女とも最も高いものが「少しある」という回答である。これについて「非常にある」という生徒は、男子15.6％、女子17.4％とやや女子の方にその割合が高い。いずれにしても、異性に対する関心については、男子より女子の方がわずかではあるが関心が強いようである。

これについて学年別の差異をみてみると、図３－10に示したように、やはり３年生が最も関心が強い。異性への関心については、年齢の上昇とともに高くなっていく傾向が明らかである。

それでは、性に関してはどうだろうか。性に「関心がある」という生徒は、男子48.6％、女子52.2％と男女とも半数程度の生徒が性に関心を持っていることになる。ただ、中学生世代という年齢段階発達段階を考えると、性に関心を持つこと自体決して不自然なことではない。その意味で言うならばむしろ男子14.9％、女子8.8％を数えている「性に全く関心がない」という生徒の方が問題なのかもしれない。性に対する関心についても、異性に対する関心同様、学年進行とともに増加している。このようにみてくると、異性や性に対する関心に関する限り、中学生世代として一般化して述べることにはやはり問題があるようである。つまり、中学生と一言で言ってみても、やはりそこにはかなりの学年差、年齢差があり、その点を十分考慮することが必要だろう。

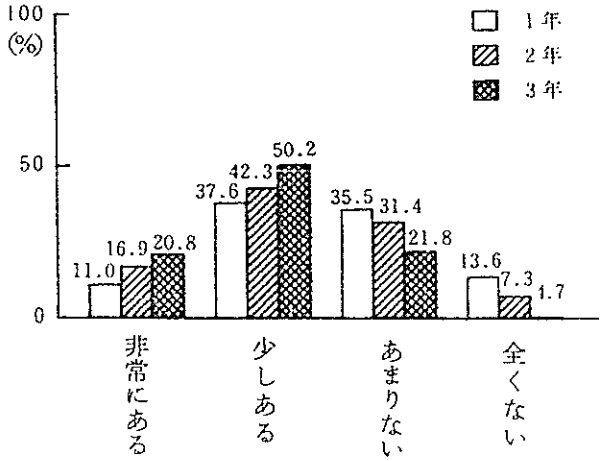
（図３－９）

あなたは、「異性」に関心がありますか。

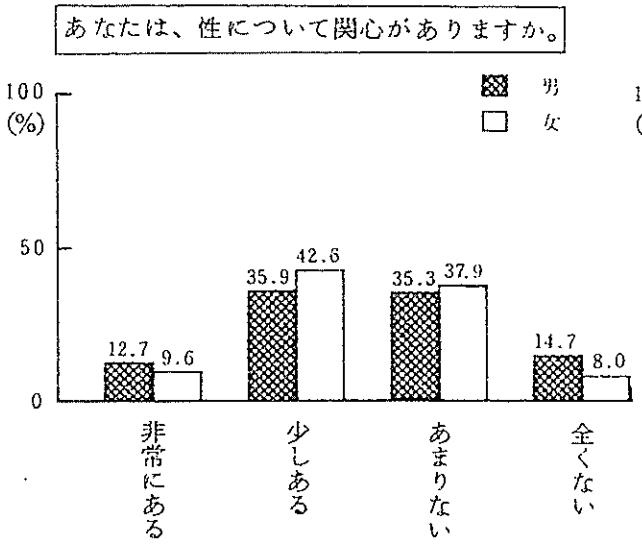


（図３－10）

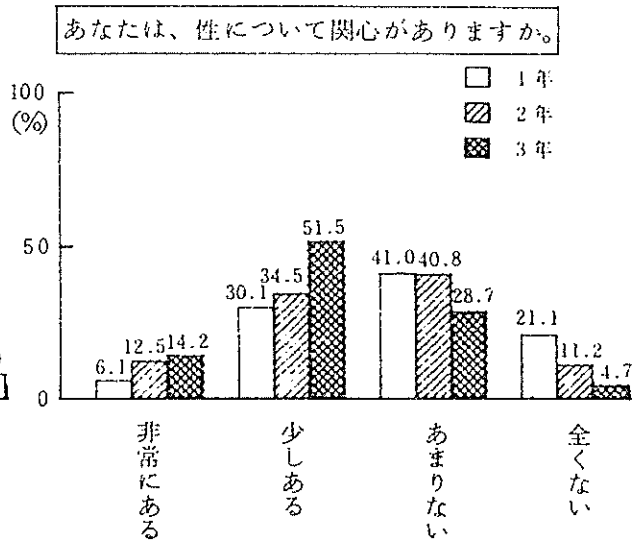
あなたは、「異性」に関心がありますか。



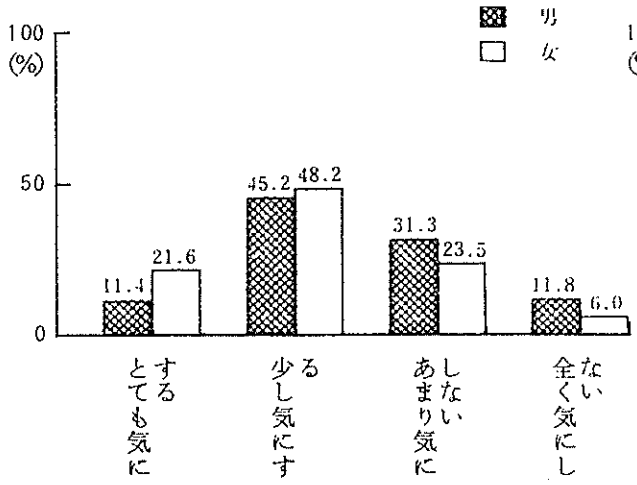
（図３－11）



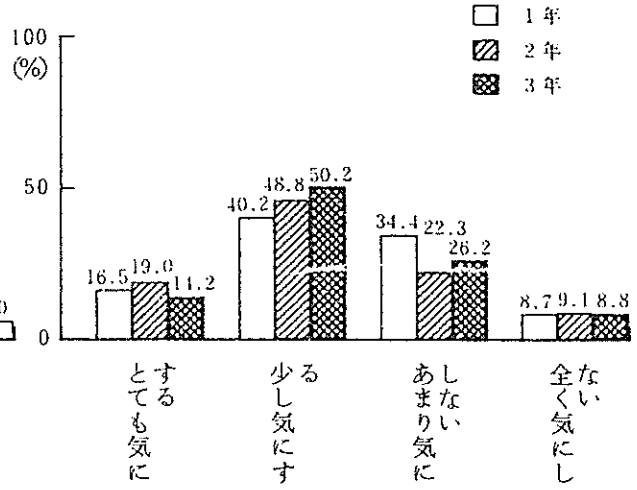
（図３－12）



（図３－13）



（図３－14）

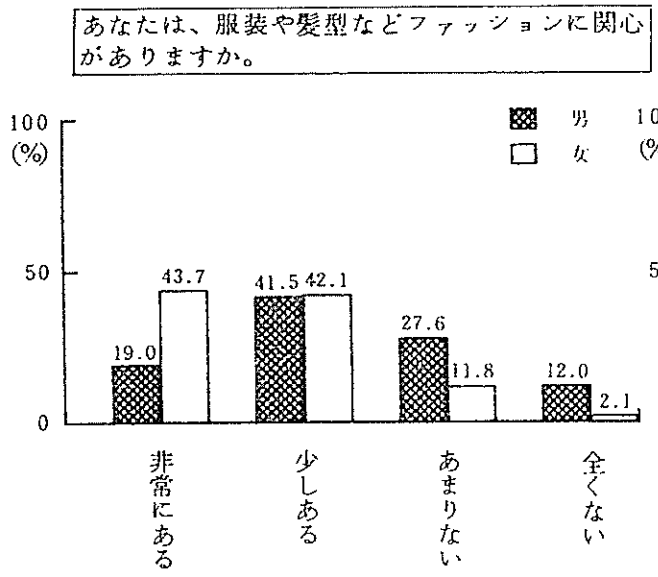


次に、中学生がどの程度「流行」を気にしているのかをみてみよう。これについて男女別に示したものが、図３－13である。流行を「気にする」という生徒は、男子56.6％、女子69.8％といずれも全体の半数以上を数えている。これについて男女間の差異は、男子より女子の方がより「流行」を気にする割合が高いようである。なお、これに関する学年差は、図３－14に示したようにそれほど明確に認められない。

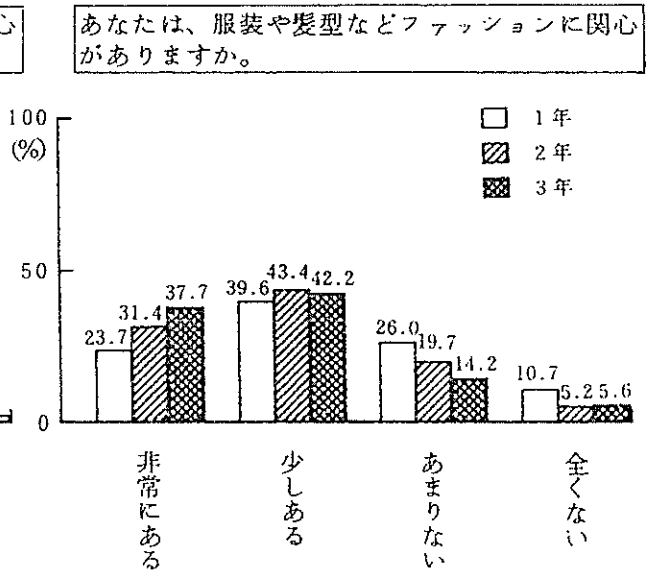
さらに、服装や髪形といったファッションには、どの程度関心を持っているのだろうか。これを男女別に示した図3－15をみると、男女差が明らかである。これに「非常に強い関心を持っている」生徒は、男子が19.0％であるのに対して、女子は43.7％と半数近くを数えている。そして、「あまり関心がない」という生徒は、男子27.6％に対し、女子は11.8％である。さらに、「全く関心がない」という生徒についても、男子が12.0％を数えているが、女子はわずか2.1％といった状況である。こうしたファッションに対する関心について学年別にみてみると、それほど極端な差異は認められないが、それでもやはり学年の高い方が関心を持つ生徒の割合が高い。

最後に、中学生がどんな音楽を好んできいているのかをみてみよう。図3－17に示した男女別にみてみると、男子では、「歌謡曲」という生徒が最も多く35.7％を数えている。次いで、「ニューミュージック」17.6％、「マンガ・アニメーション主題歌」14.1％、「シャンソン・カンツォーネ」7.6％といった状況に並んでいる。女子では、やはり「歌謡曲」が最も多く58.8％、次いで、「ニューミュージック」16.7％を数えており、それ以外はそれほど多くの割合を占めていない。男女とも最

（図3－15）

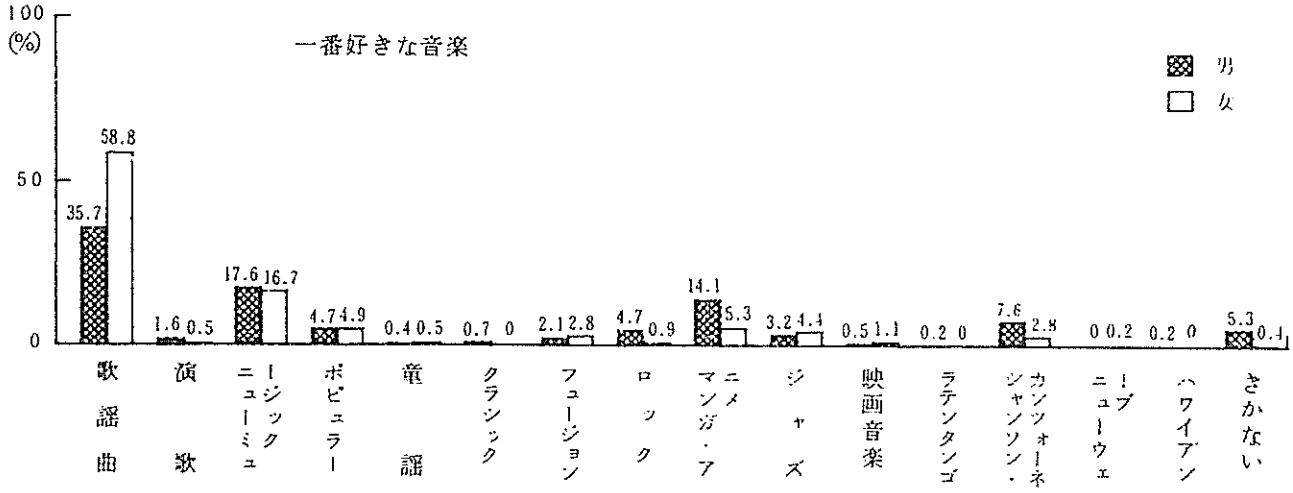


（図3－16）



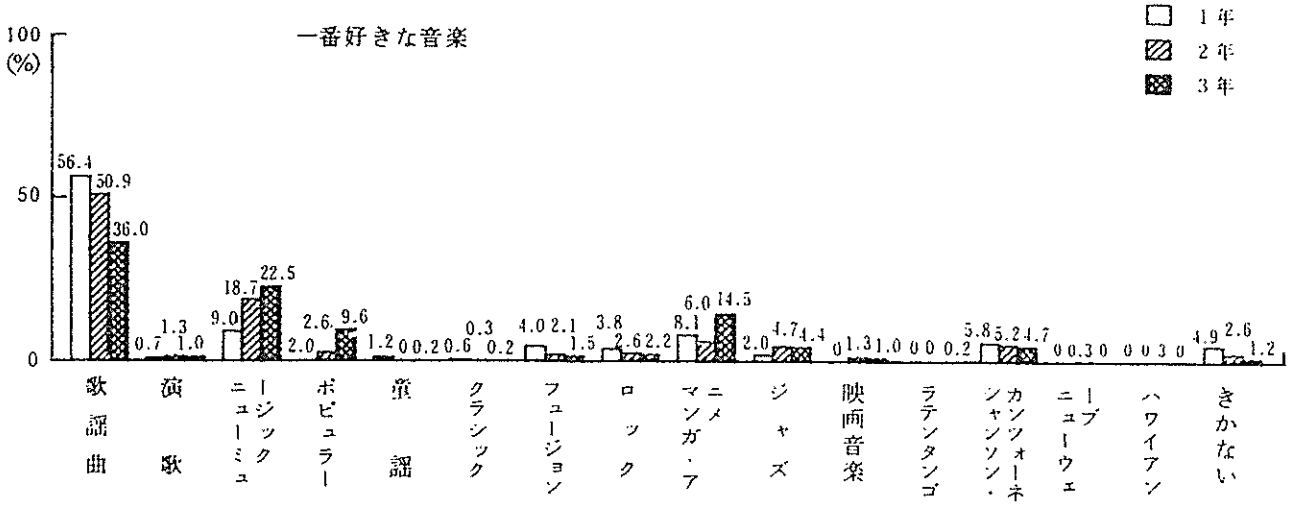
（図３－１７）

あなたは、どんな音楽が好きですか。



（図３－１８）

あなたは、どんな音楽が好きですか。



も人気のある音楽が「歌謡曲」であることはまちがいないが、全般的な男女間の差異は、女子より男子の方が人気のある音楽がより拡散している点であろう。

これを学年別にみると、学年進行による差異がかなり明確に出ている。学年が進むにつれて「歌謡曲」をきくという生徒の割合が減少し、かわって「ニューミュージック」、「ポピュラー音楽」をきくという生徒が増加している。

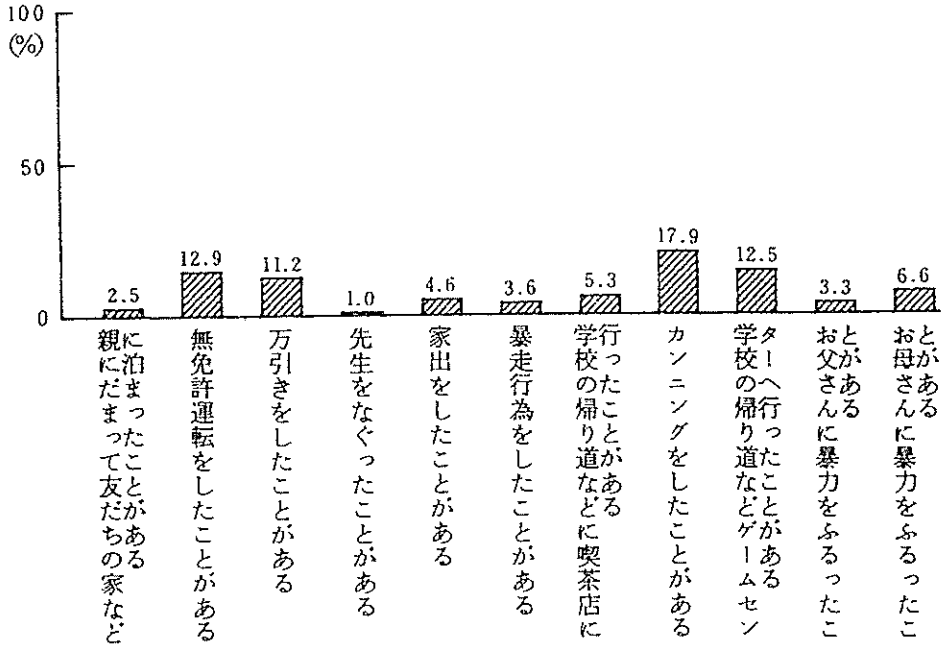
4　中学生の非行・問題行動

(1)　非行・問題行動の発生率

最近、中学生の非行・問題行動が各地で頻発しており、これについては早急に解決を急がねばならない重大な課題である。

（図４－１）

非行・問題行動の発生率（中学生全体）



最初に、中学生全体の非行・問題行動発生率をみてみよう。「無断外泊」は2.5％、「無免許運転」12.9％、「万引き」11.2％、「教師に対する暴力」1.0％、「家出」4.6％、「暴走行為」3.6％、といった状況である。以下、前記の非行・問題行動と比較してそれほど重大ではないが、「学校の帰り道に喫茶店に行ったことがある」5.3％、「カンニング」17.9％、「学校の帰り道にゲームセンターに行ったことがある」12.5％といった発生率である。

また、かなり重大な問題だと思われる「家庭内暴力」については、「父親に暴力をふるった」3.3％、「母親に暴力をふるった」6.6％といった状況である。

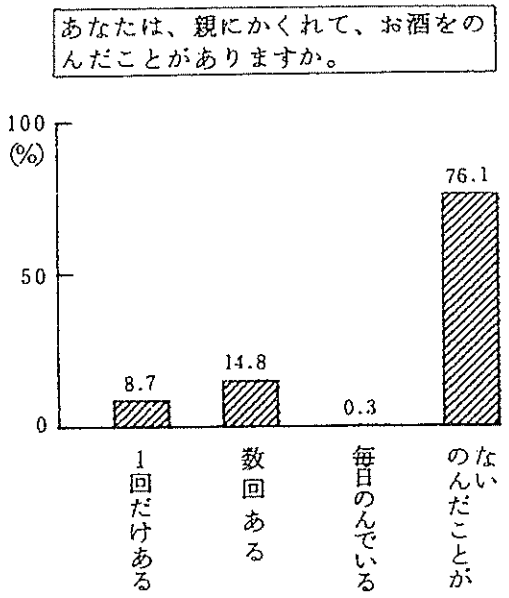
さらに、親にかくれて酒を飲んだことがあるという問題行動では、「毎日飲んでいる」という生徒は0.3％とさすがにわずかではあるが、「数回ある」という生徒になると14.8％をも数えている。喫煙についても、「時々ある」という生徒が9.8％をも占めている。

一方、これは現実に暴力をふるったということではないが、一種の暴力願望とでも言うべき「暴力

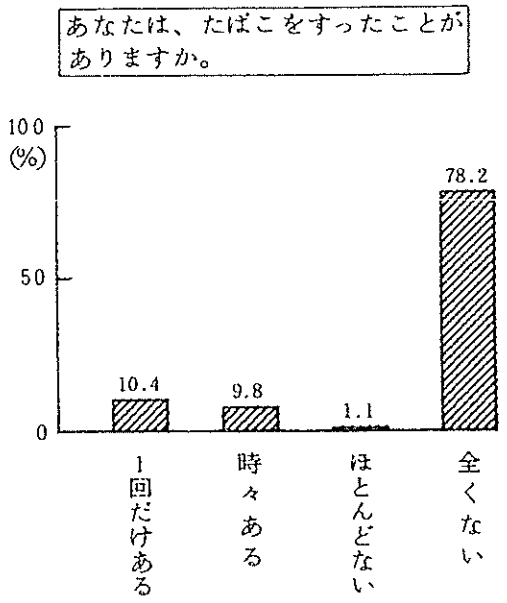
をふるいたいと思う」という意識については、父親に対して19.9％の生徒が「ふるいたい」と思うとしており、母親に対しても18.8％の生徒がそうした意識を持っている。

こうした発生率をみると、いずれもその割合が高いことにおどろかされる。例えば、「万引き」について言うならば、この行為がいかなる理由があるにせよ許されるわけはない。しかし、現実には、全体の1割を超える生徒がこれを経験しているのである。また、教師や両親に対する暴力についても

（図４－２）



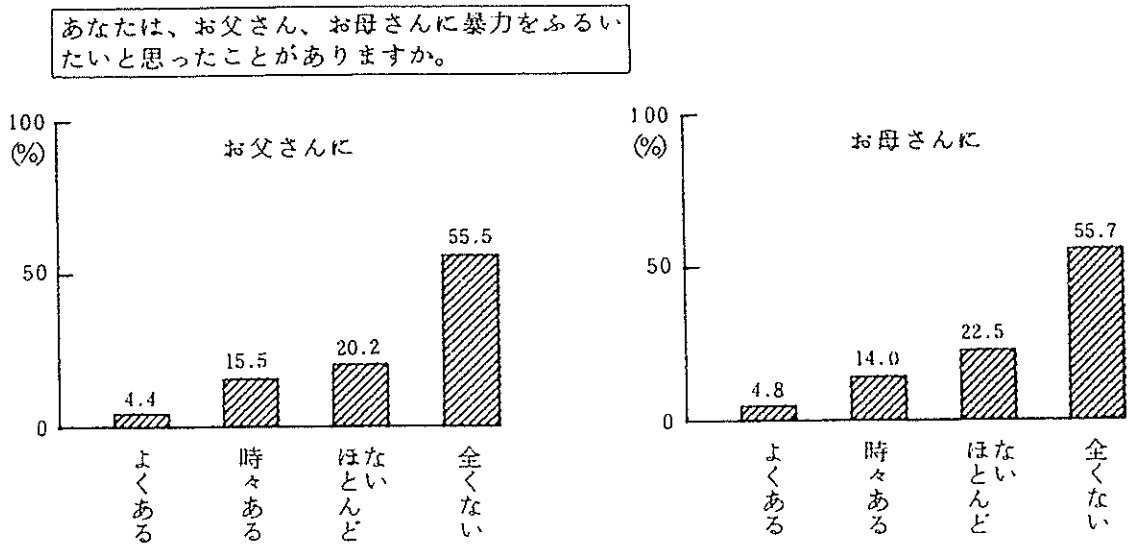
（図４－３）



同様である。教師に対する暴力にしても、両親に対する暴力にしても、ある意味で異常としか言いようのない行動であるが、数パーセントの生徒が経験している。

以上のような結果をみても、特に非行・問題行動に関する問題状況がかなり深刻であることは、もはや言うまでもない。

（図４－４）



(2) 男女別の非行・問題行動

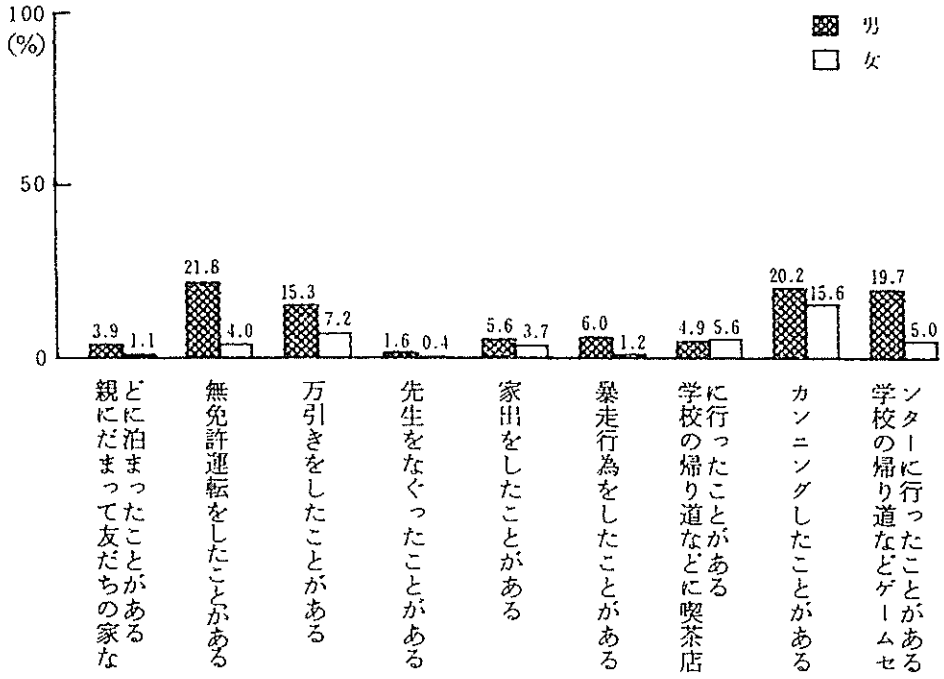
すでにあげたいくつかの非行・問題行動について、男女別の発生率をみてみよう。これを示したものが図4－5から図4－8である。これをみると明らかなように、それぞれの内容についての男女別の発生率にかなり差異が認められる。例えば、「無免許運転」である。これに関する男子の発生率は21.8％も数えているが、女子についてはわずか4.0％である。

そこで、それぞれの内容について男女別発生率をみてみると、次のような特徴が明らかである。まず、全体的な傾向に関する限り、女子より男子の方が非行・問題行動の発生率が高い。特に、「無免許運転」、「暴走行為」といった自動車・バイクに関するものでは、男子の方がはるかに発生率が高い。ところが、教師に対する暴力はともかく、両親に対する暴力、あるいは暴力願望については、男子よりむしろ女子の方が発生率がわずかではあるが高いという特徴を持っている。

つまり、このことは、非行・問題行動の現実の発生率、そしてそれが潜在している割合について、必ずしも男女とも同様でなく、むしろその内容によって男女別の差異が生じていることを示している。

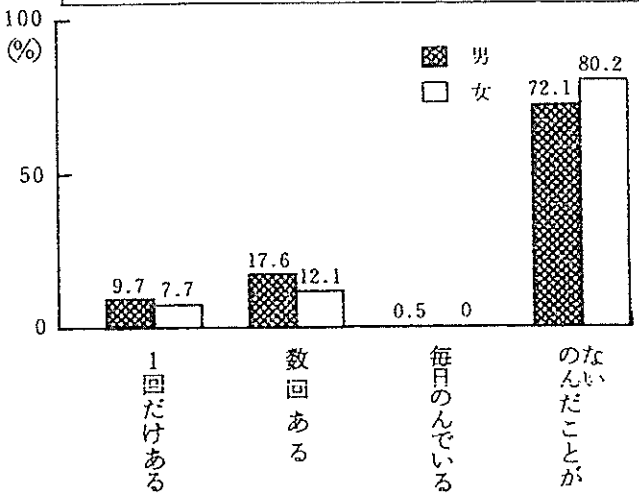
（図4－5）

男女別にみた非行・問題行動の発生率



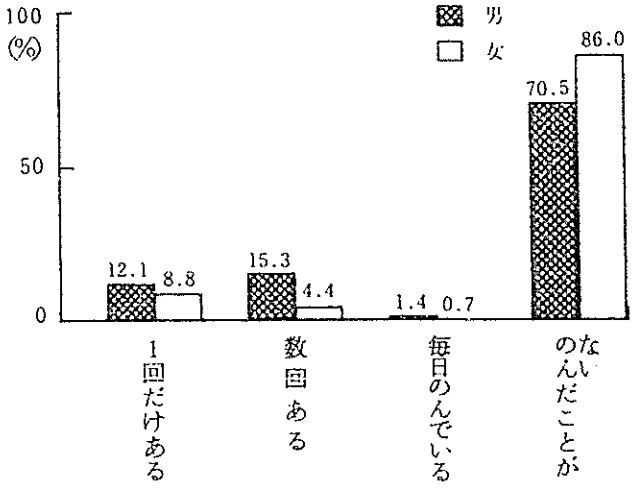
（図４－６）

あなたは、親にかくれて、お酒をのんだことがありますか。



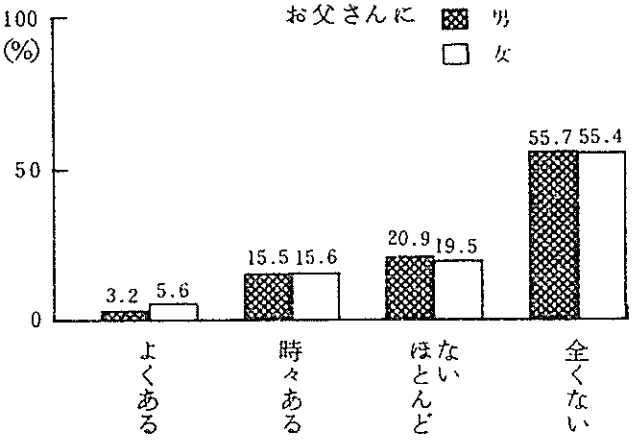
（図４－７）

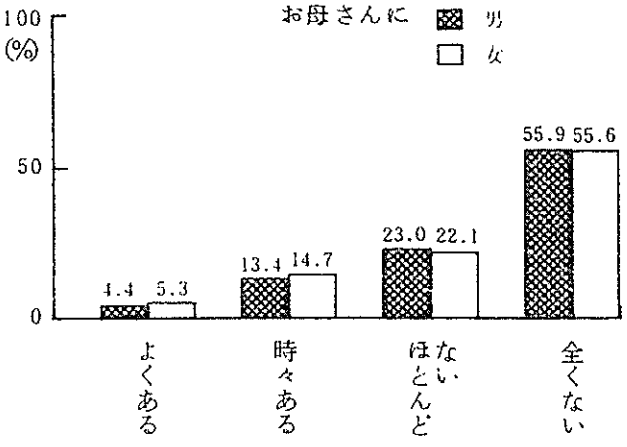
あなたは、たばこをすったことがありますか。



（図４－８）

あなたは、お父さん、お母さんに暴力をふるいたいと思ったことがありますか。





(3) 学業成績と非行・問題行動

これまでみてきたような非行・問題行動は、主としてどんな学業成績をもつ生徒から発生しているのだろうか。数学、英語、国語、保健体育といった各教科の学業成績と非行・問題行動の発生率との関係を示したものが、表５－１である。まず、全体的な傾向として、学業成績の下位のグループ（「非常にわるい」）から過大に非行・問題行動が発生していることが明らかである。特に、数学、英語、国語については、表にあげたいくつかの非行・問題行動の発生率が、成績下位グループで最も高い割合を数えている。

ただ、そうは言っても、成績上位グループ（「非常によい」）から非行・問題行動が発生していないというわけではない。例えば、「万引き」についてみてみよう。数学の成績上位グループ（「非常

によい」）でも10.3％を数えている。英語の成績上位グループでは6.3％、国語8.9％ と決して少数ではない。

こうした傾向を総合すると、結局次のようなことが言えよう。たしかに、非行・問題行動の発生率は、成績下位グループでかなり高い。しかし、そうした発生率が、成績の上昇とともに徐々に低下していくといったようなことはない。非行・問題行動の内容によっては、成績上位グループ（「非常によい」）の発生率が、成績中位グループ（「中間」）を上まわっているのもある。

つまり、学業成績と非行・問題行動との関係については、学業成績ランクの最底辺にかなり明確な断層が認められるのである。そして、成績中の下グループ（「やや悪い」）から上位では、ほぼ同じ

表５－ｉ　学業成績と非行・問題行動の発生率

（単位：％）

各教科の成績 ＼ 非行・問題行動		親にだまって友だちの家などに泊まったことがある	無免許運転をしたことがある	万引きをしたことがある	先生をなぐったことがある	家出をしたことがある	暴走行為をしたことがある	学校の帰り道などに喫茶店に行ったことがある	カンニングをしたことがある	学校の帰り道などにゲームセンターに行ったことがある	お父さんに暴力をふるったことがある	お母さんに暴力をふるったことがある
数学	非常によい	0.0	9.0	10.3	0.0	6.4	5.1	1.3	19.2	14.1	2.6	7.7
	ややよい	1.5	12.3	13.1	0.7	3.7	3.0	5.2	16.0	13.8	4.1	7.5
	中間	1.9	9.5	5.4	0.3	2.2	2.4	3.8	14.9	10.6	1.9	4.9
	ややわるい	2.5	14.1	12.0	1.4	4.0	2.9	5.1	17.4	9.8	2.2	6.2
	非常にわるい	6.4	22.0	21.3	2.8	13.5	7.8	11.3	29.8	18.4	7.8	9.9
英語	非常によい	3.9	7.8	6.3	0.0	3.9	5.5	3.9	14.1	10.9	2.3	7.8
	ややよい	0.3	8.1	11.2	0.0	3.1	1.0	2.4	14.9	10.5	2.4	7.1
	中間	2.1	11.1	7.8	0.9	3.3	2.7	4.5	16.3	9.3	2.7	6.6
	ややわるい	3.2	13.8	10.1	1.4	4.1	1.8	6.5	16.1	11.5	3.7	4.6
	非常にわるい	4.5	26.5	23.9	3.2	11.6	11.0	11.0	31.6	24.5	5.8	7.7
国語	非常によい	4.4	8.9	8.9	0.0	6.7	4.4	4.4	6.7	11.1	4.4	11.1
	ややよい	1.4	11.6	11.6	0.3	3.1	1.7	4.4	14.3	9.6	1.0	3.8
	中間	2.5	10.4	9.2	0.6	3.3	2.7	4.4	18.0	12.5	3.8	8.1
	ややわるい	1.7	14.2	11.3	0.8	5.0	5.4	6.3	18.4	12.1	3.3	4.6
	非常にわるい	6.8	29.7	23.0	6.8	16.2	8.1	10.8	36.5	25.7	8.1	12.2
保健体育	非常によい	2.8	22.0	19.3	2.8	8.3	6.4	8.3	26.6	15.6	3.7	8.3
	ややよい	1.1	11.2	8.0	0.7	4.7	1.4	5.1	19.6	14.1	1.8	6.5
	中間	2.4	11.7	9.5	0.7	2.9	3.1	4.6	15.9	10.6	3.1	5.7
	ややわるい	1.8	10.1	12.9	0.0	3.7	4.1	2.8	15.7	10.6	4.1	6.5
	非常にわるい	7.6	19.7	16.7	4.5	13.6	9.1	12.1	21.2	18.2	7.6	10.6

程度の非行・問題行動発生率を持っている。その意味では、「成績のよい生徒は、非行・問題行動をおこさない」といったことばはもはやあてはまらない。

いずれにしても、現代の中学生の非行・問題行動は、学業成績に関して下位グループはもちろん、上位のグループの生徒にも浸透しているのである。

第二部

福岡県における父親・母親の養育態度・行動の実態

1　子どもの基本的生活習慣に対する親の養育態度・行動の実態

(1)　日常生活における親の子どもに対する世話

ア　起床、ふとんの後始末、夜食の用意についての世話

本県では昭和55年度、昭和56年度の２カ年をかけて「小学生をもつ父親・母親の養育態度・行動の実態」（その１、その２）についての報告書を刊行したが、そこで明らかになったことは、小学生段階において子どもたちは食事や着脱衣、睡眠等々に関する基本的生活習慣を確立していず、自分で自分のことが処理できる子どもは少数であり、ほとんどの場合親がこれに手を貸しているという実態があるということである。言うまでもなく基本的生活習慣の確立は社会生活をおくるうえでの基本的な問題であると同時に、子ども自身の人格の発達にとっても極めて重要な意味をもっている。今回は中学生をもつ親の養育態度・行動の実態の調査研究を通して、中学段階にある子どもたちの状況を把握するとともに、養育にかかわる親の姿勢や考え方を明らかにしようとするものである。始めに小学校段階であまりできていなかった基本的生活習慣の確立は中学校段階に移行してどのように変化したであろうか。前記報告書でも述べた通り、小学生段階になれば、少なくとも基本的生活習慣に関する限り能力的には十分自分自身でできるはずなのである。ところが、これがあまりできていないという実態があった。多くの場合親が子どもの日常生活にあれこれと手を貸していたのである。つまり、基本的生活習慣に関して親の関与のしすぎがあることが明らかになったのである。今回の中学生の両親に対する調査の結果も、程度の差こそあれ、中学生の日常生活に関する親の世話のしすぎという傾向が認められた。

親の子どもに対する世話については、学年による世話のしかたに相違はないが、ここでは親が子どもを起こしているか、親が子どものふとんのあとしまつをしているか、テストのときなどいっしょに起きていたり、夜食を作ってやることがあるかという３種類の質問を用意したが、親の態度は子どもの学年によってはほとんど違わないことが明らかになった。父親の場合、子どもを起こしてやった人は学年別に15％から18％の間であり、母親の場合は図１－１のように、これが60％から65％の間にまたがっている。学年別による差異は極めて小さいが父親16.7％と母親の62.9％の間の差異は極めて大きいことがわかる。同様にふとんのあとしまつに関しても、夜食の準備に関しても、子どもの世話をしている父親の数字は極めて低いが、母親の場合は、ふとんのあとしまつで22.7％の母親が、夜食の準備では30.1％の母親が世話をしているというデータが得られている。もちろん、このことは母親だけが過保護で父親はそうではないということを意味するものではない。実態のうえで父親は具体的な世話をしていないけれども、同じ屋根の下で暮らしている以上、母親によるわが子の世話を承認あるいは奨励していることは十分予想される。それにしても両親を合わせると１年生で76％、３年生で82％の親が中学生のわが子を起こしているという実態は、受験勉強がきびしいことを考慮に入れたとしても基本的生活習慣の確立という観点からみて驚くべき数字

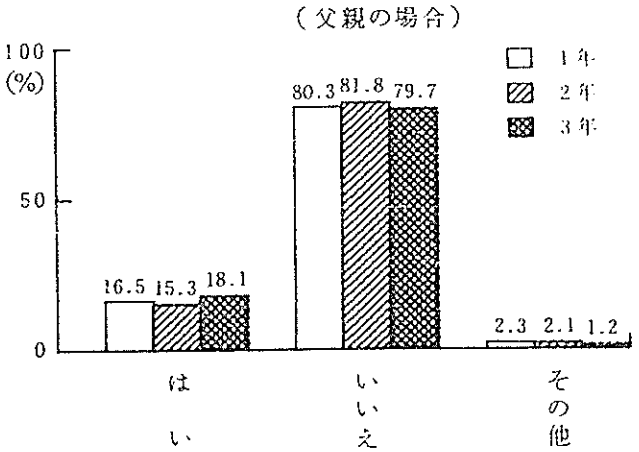
であるといえよう。

図1－2、図1－3は、いっしょに起きていて、夜食を作ってやる両親の実態及び子どもの起きたあとのあとしまつをしている両親の実態をあらわしたものである。両親をあわせると4割弱の子どもたちが、夜食のめんどうをみてもらいながら試験勉強をしている様子がうかがえる。また、約4分の1の子どもたちが親にふとんやベッドのあとしまつをしてもらっている。

夜食の世話については、子どもの学年別及び性別による差異はほとんど認められない。起きたあとのあとしまつの場合、女の子よりも男の子の方が親に世話してもらっている率が高い。

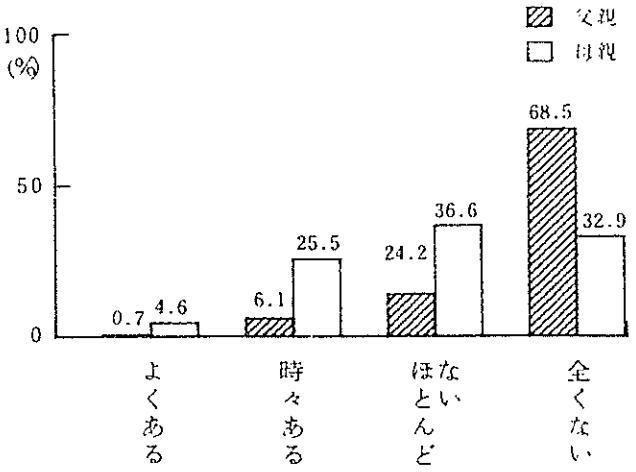
（図1－1）

あなたは、今朝お子さんを起こしてやりましたか。



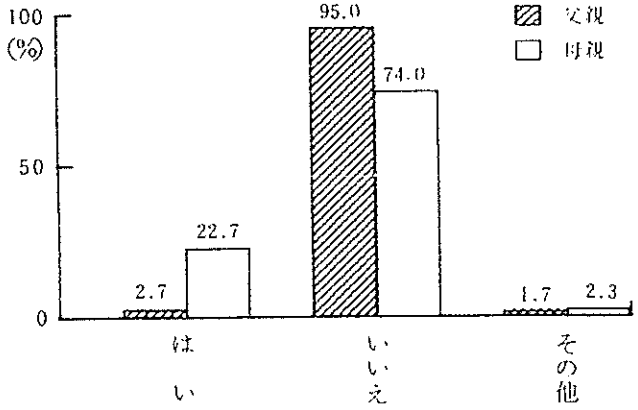
（図1－2）

あなたは、お子さんのテストのときなど一緒に起きていて夜食をつくってやったりすることがありますか。



（図1－3）

あなたは、今朝お子さんのふとんをたたんだり、押入れにあげたり（ベッドの場合はあとしまつ）してやりましたか



イ まとめ

朝起こすとか、ふとんのあとしまつをしたり、テストのときに起きていて夜食を作ってやるということは、いわば親の子どもに対する世話のあり方を示す具体例であり、象徴的な現象である。こうした日常の細々としたことを中学生の両親がしてやっているということは、他の分野においても同様の態度や方針で親が臨んでいることを意味していよう。約8割の親が中学生の子を、朝起こさなければならないということは、他の点での世話も似たような姿勢で行われることにならざるを得ない。特に母親による世話はきわだっている。子どもの独立期に到って子どもが乳離れしないとか、母親が乳離れしないとかいう傾向は、子どもに対するこうした過保護的な傾向の蓄積にあるだろうことが容易に推測される。また、そうした母親による過剰な世話を暗黙のうちに承認している父親の態度にも留意する必要があろう。子どもは、いずれ親の保護の手を離れて、自分の人生を自分の力で生きていく日を迎えるのであるが、親の保護が過ぎれば自立の力が備わらないことは当然の帰結だからである。

(2) ことばづかい、みだしなみ、わがままなど、子どもの行動に対する受容と対応

ア ことばづかいに対する対応

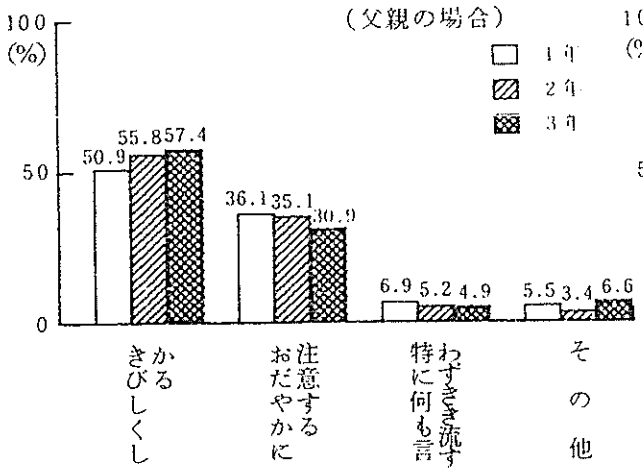
子どもが親に対して、けじめをわきまえない乱暴な言葉を使った場合、学年別、性別にかかわらず、また父親、母親の別なく51%から60%が「きびしく叱る」という対応をしている。半分以上の人々がことばづかいについて親子のけじめを極めて重視していることがうかがえる。さらに、子どもの乱暴なことばづかいに対して「おだやかに注意する」という人が学年別、性別、父親、母親の別なく30%台存在する。しかしながら、「特になにもせず聞き流す」という人々になると、量的な差は小さいが、平均的に父親が母親の3倍強であり、ことばづかいに対して放任、無頓着な父親が6%近くいることがうかがえる。図1－4、図1－5は学年別にみた場合の子どもの乱暴なことばづかいに対する両親の反応を図示したものである。

子どものことばづかいについては、類似の設問をもう一つ用意して親や目上の人に対することばづかいの指導がどの程度行われているかを、あわせて調査している。ここから両親によるていねい語、「敬語の指導の実態がうかがえる。ことばづかいの指導については、母親の方が父親よりはるかに熱心である。また両親と子どもの学年が低いほど、ことばづかい等にも気を使う傾向がある。母親は男の子より女の子のことばづかいについてややきびしい。全体的にみれば、子どものていねい語、敬語の指導を意識的に行っている親は約80%ある。しかしながら、そうした言葉の指導にほとんど、あるいは全く注意を払っていない父親が約20%、母親が8%ほど存在する。図1－6、図1－7は子どもの学年別にみた日常生活における、ていねい語や敬語の両親による指導の実態を図示したものである。

しかしながら、子どもがひわいなことを言ったりした場合の対応は、両親に礼を欠いた場合と比べるとややおだやかである。平均的にみると、きびしく対応する父親が30%強、母親が30%弱である。この場合も特になにも言わずに聞き流す比率は父親の方が母親よりも多い。

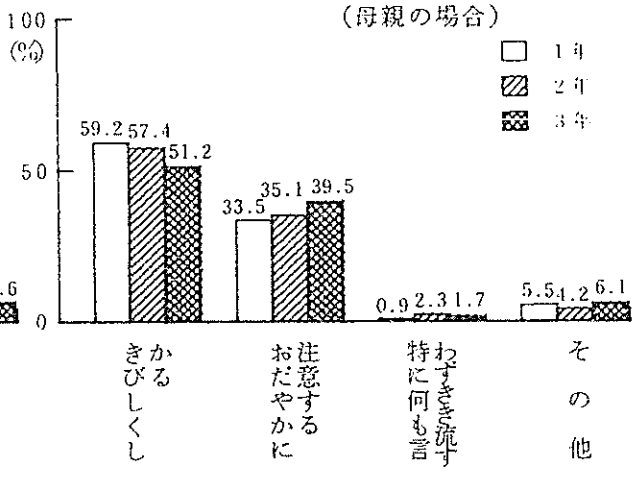
（図１－４）

あなたは、お子さんのあなたに対する言葉づかいが乱暴であったような場合、どのような対応をしていますか。



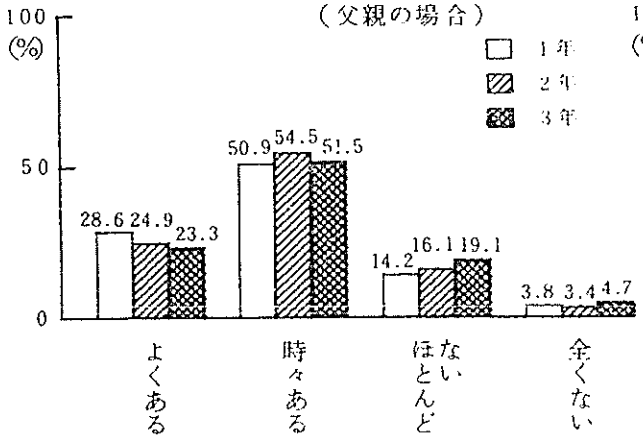
（図１－５）

あなたは、お子さんのあなたに対する言葉づかいが乱暴であったような場合、どのような対応をしていますか。



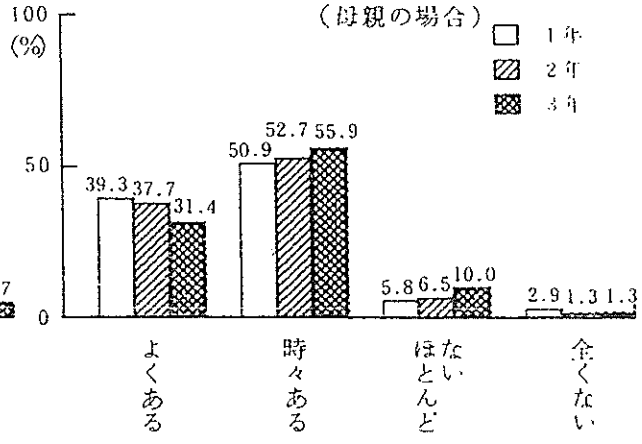
（図１－６）

あなたは、お子さんがあなたや目上の人に対して友だちに言うのと同じような乱暴な言い方をした場合正しい言い方を教えてやることがありますか。



（図１－７）

あなたは、お子さんがあなたや目上の人に対して友だちに言うのと同じような乱暴な言い方をした場合正しい言い方を教えてやることがありますか。



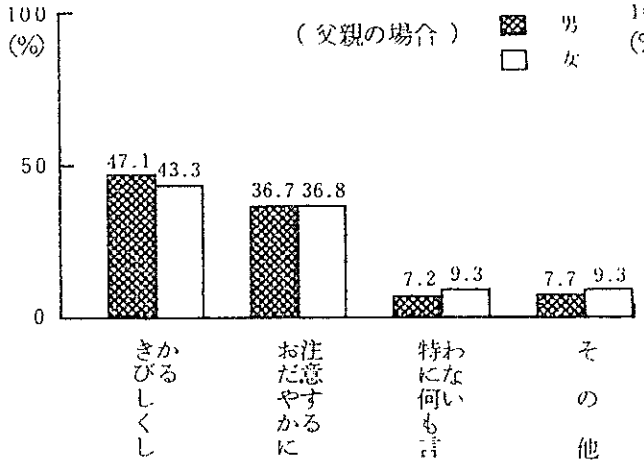
イ　子どものみだしなみに対する対応

子どもの服装や髪型などが中学生らしくないと判断された場合、親はどのように対応しているかを調べてみると、「きびしく叱る」「おだやかに注意する」両親は、あわせると80%以上いる。この数字は学年別にみても男女別にみても変わらず、極めて多くの親が子どもたちの、みだしなみに留意していることがうかがえる。また、みだしなみについて極めて自由な、あるいは放任的な態度をとっている両親が約1割ほど存在する。中でも、特に父親の放任的態度は数字のうえではるかに母親を上回っている。

さらに、学年別にみても、男女別にみても子どものみだしなみに留意する親の態度はほぼ同じで、統計上の差異は認められなかった。ちなみに図1－8、図1－9は、子どものみだしなみに対する父親と母親の対応の仕方を図示したものである。

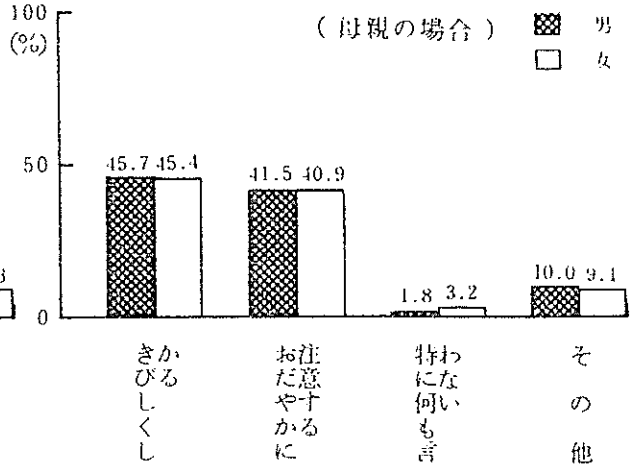
（図1－8）

あなたは、お子さんの服装や髪型などが中学生らしくない場合、どのように対応していますか。



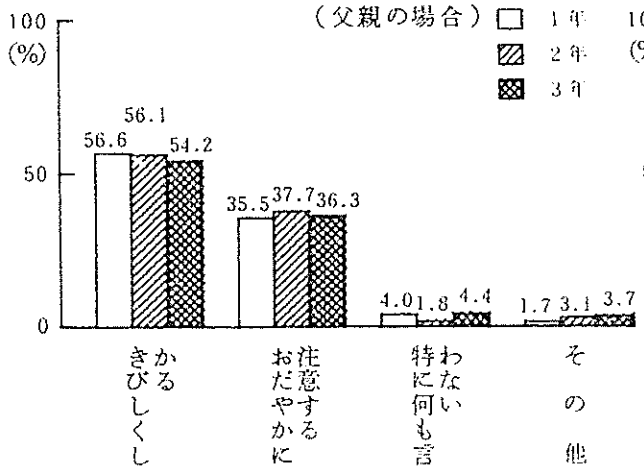
（図1－9）

あなたは、お子さんの服装や髪型などが中学生らしくない場合、どのように対応していますか。



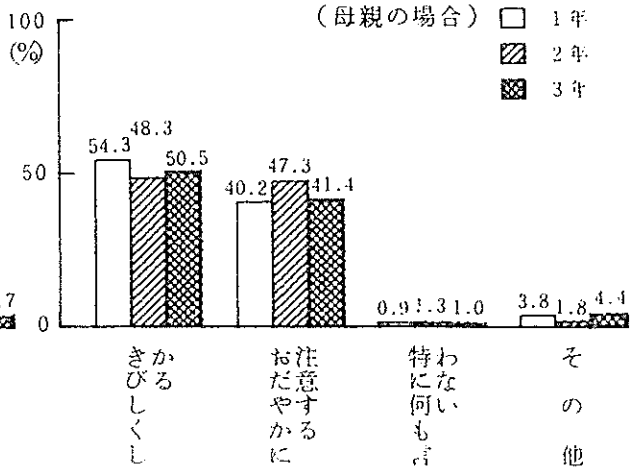
（図1－10）

あなたは、お子さんが他の人のことを考えず自分勝手なことを言ったり、行ったりした場合、どのように対応していますか。



（図1－11）

あなたは、お子さんが他の人のことを考えず自分勝手なことを言ったり、行ったりした場合、どのように対応していますか。



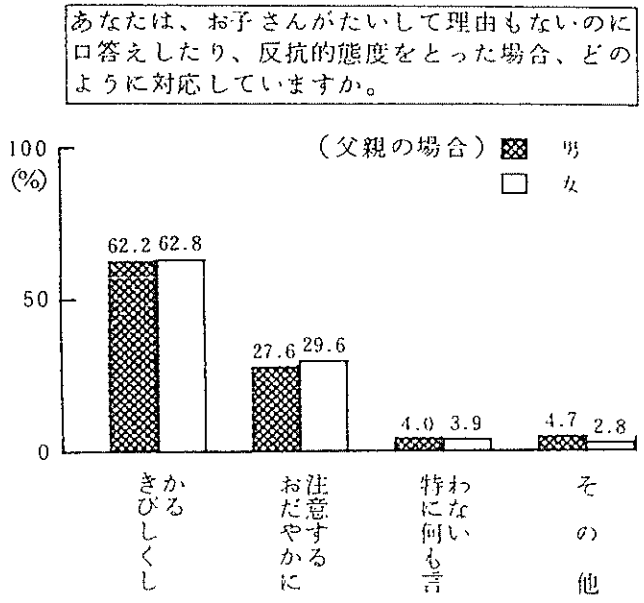
ウ　子どもの自分勝手な行動に対する対応

子どもが他の人のことを考えず、自分勝手なことを言ったり、行ったりした場合、大部分の両親の対応のあり方は極めて健全であると思われる。図１－10、図１－11は学年別にみた両親の対応のあり方を示したものである。子どもの自分勝手な行動に対してきびしく対処する親の率は、平均的にみて過半数を超えている。きびしく対処する親と、おだやかに注意する親をあわせれば９割を超えている。この場合の放任的な対応は、ことばづかいや、みだしなみの悪さに対する対応の場合と比べてもはるかに少なく、子どもの自分勝手な行動は許さないという通念や常識が生きていることを示しているといえよう。自分勝手なふるまいに対するきびしさは、子どもの性別によっても基本的に変わらない。このことについての放任的態度は極めて少ないけれども、それら少数の放任的な親の中では、ここでも父親の方が母親よりはるかに放任的傾向が強いことがわかる。

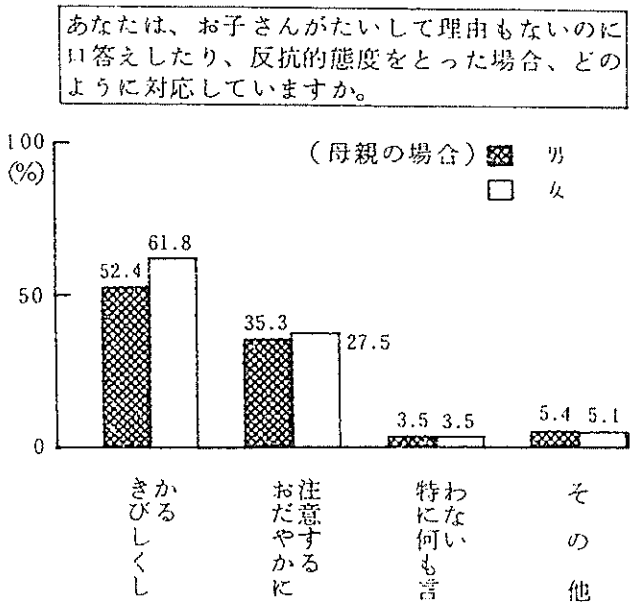
エ　子どもの反抗的態度に対する対応

子どもの口答えや反抗的態度に対する親の対応も総じてきびしく、自分勝手な行動に対する対応と同様の傾向を示している。特に「きびしく叱る」親の率が両親ともに最も高いことが注目される。父親の場合は平均で60%を超えており、母親の場合も60%に近い。これに「おだやかに注意する」親をあわせると約９割の親が子どもの反抗的態度に即刻対応していることがうかがえる。しかし留意すべきことは、父親の場合は学年別、男女別にみても子どもの反抗的態度に対する対応が変わらないのに対して、母親の場合は男の子に対して甘く、同時に子どもが上学年になるほどきびしい対応が減少する傾向がある。図１－12、図１－13、図１－14は男女別にみた子どもの反抗的態度に対する両親の対応と、学年別にみた母親の対応を図示したものである。

（図１－12）

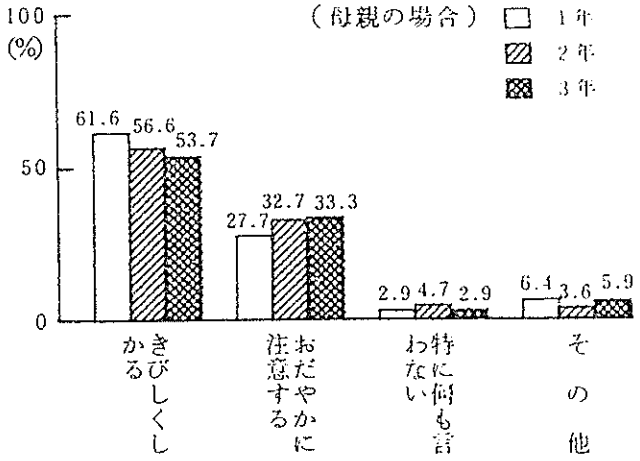


（図１－13）



（図１－１４）

あなたは、お子さんがたいして理由もないのに口答えしたり、反抗的態度をとった場合、どのように対応していますか



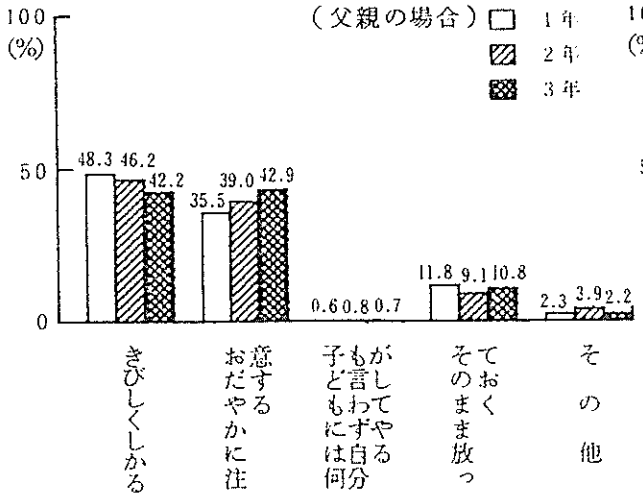
また、子どもの反抗的態度に対する親の無視、あるいは放任的態度は平均して３％弱であるが、この場合、父親と母親の違いがあまり顕著でない。数字は極めて小さなものであるが、子どもの反抗的態度の前に何もなしえない、あるいは、何もする気のない両親が存在することは留意しておく必要があると思われる。

オ　あとしまつのだらしなさに対する対応

子どもが、自分が使ったもののあとしまつをきちんどしなかった場合、約45％の親がきびしく叱り、約35％の親がおだやかに注意している。総じて父親の方が母親よりも対応がきびしい。また、ここでも母親は男の子にやや甘い。「子どもには何も言わず自分がしてやる」という親が２～３％存在するが、その大部分は母親である。またこの場合注目すべきことは、あとしまつができていなくても叱りもせず、注意も与えず「そのまま放っておく」という父親が10.5％、母親が16.6％と、かなりの数にのぼっていることである。このような対応の仕方をどう評価するかは意見のわかれるところであろう。図１－15、図１－16は、子どものあとしまつのだらしなさに対する両親の対応を、子どもの学年別にあらわしたものである。

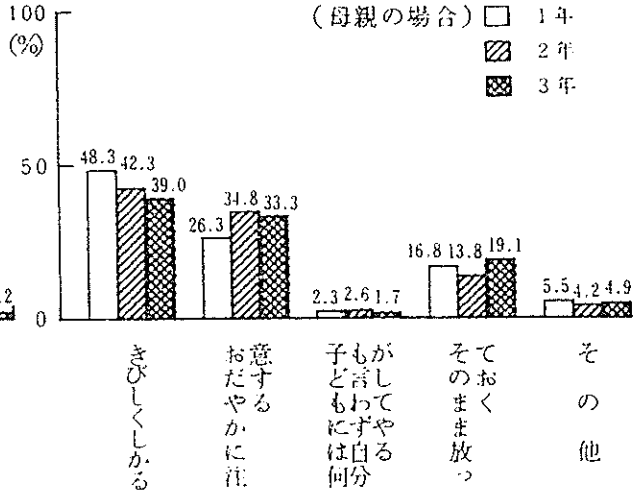
（図１－１５）

あなたは、お子さんが自分が使ったものの後始末をしなかった場合、どのように対応していますか。



（図１－１６）

あなたは、お子さんが自分が使ったものの後始末をしなかった場合、どのように対応していますか。

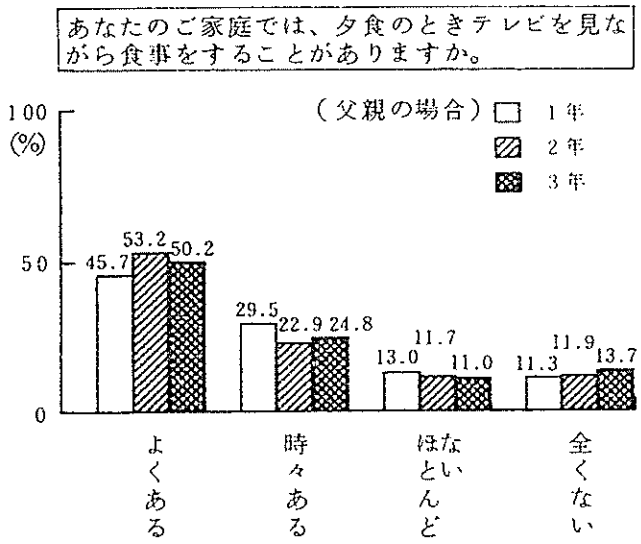


カ　テレビをみながらの食事についての対応

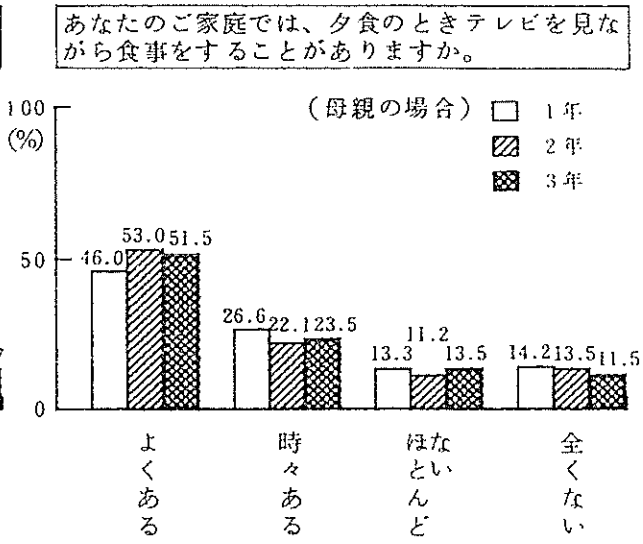
夕食のときテレビをみながら食事をする家庭は予想外に多いことがわかった。約半数の家庭がよくそうしているし、「時々そうしている」家庭を含めると70%を優に超える。テレビ視聴と夕食が同時に進行するというのが一般的な傾向となりつつあることが調査結果からうかがえる。放送関係者のいわゆる「ながら視聴」が生活の中に定着したと理解すべきであろう。

図1－17、図1－18は子どもの学年別にみた両親の「テレビをみながら夕食」についての態度を図示したものである。

（図1－17）



（図1－18）



キ　まとめ

以上みてきた通り、子どものことばづかいやみだしなみ、わがまま、反抗的態度に対する親の関心は総じて高く、その対応の仕方も予想以上にきびしいものである。しかしながら、どの項目についても少数ではあるが一定数の親が無関心、無対応に代表される放任的態度を有していることが判明した。また、この放任的態度は母親よりも父親に多くみられる傾向がある。さらに、いくつかの項目で極めてわずかではあるが、子どもの学年が高くなるにつれて親が子どもにかかわる度合いが減少する傾向がみられる。母親の場合にのみ男の子に対する態度が、女の子に対する態度よりも甘いことがわかった。

2　子どものこづかい、手伝い、性教育に対する親の養育態度・行動の実態

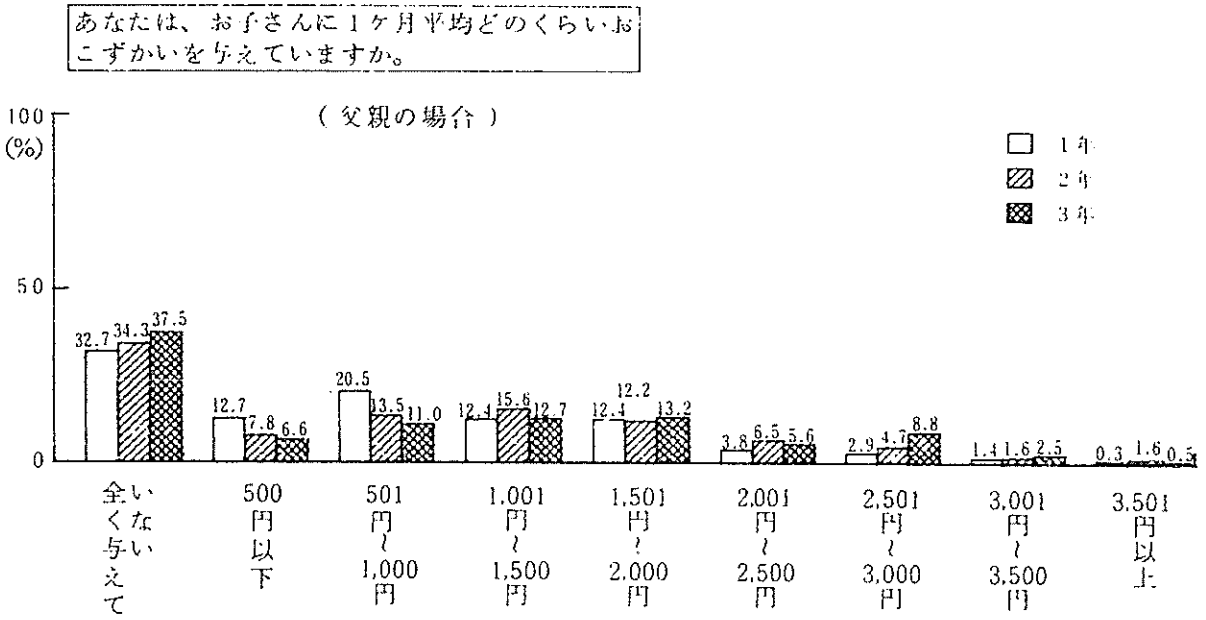
(1)　こづかいの実態

親は中学生の子に１カ月平均どれくらいのおこづかいを与えているだろうか。図２－１、図２－２は子どもの学年別にみた、両親の子どもに対するおこづかいの与え方の実態である。本調査においては、子どものこづかいを父親が与えているのか、母親が与えているのか、あるいは両方が共に与えているのかの別は不明であるが、この図から、だいたいの傾向がよみとれる。

子どもたちのこづかいは、500円から2,000円ぐらいの幅に集中していることがうかがえる。両親が別々に与えていないと想定すれば予想されたところである。しかしながら、身のまわりの品や学用品等を全て買い与えたうえでのこづかいだとすれば、2,000円以上というのは中学生としては、極めて大きな額であるといえよう。父親と母親とを別々に調査しているので、正確な実態を示す数字が確保できないが、13％～20％くらいの子どもたちが月々2,000円以上こづかいをもらっていることが推測される。

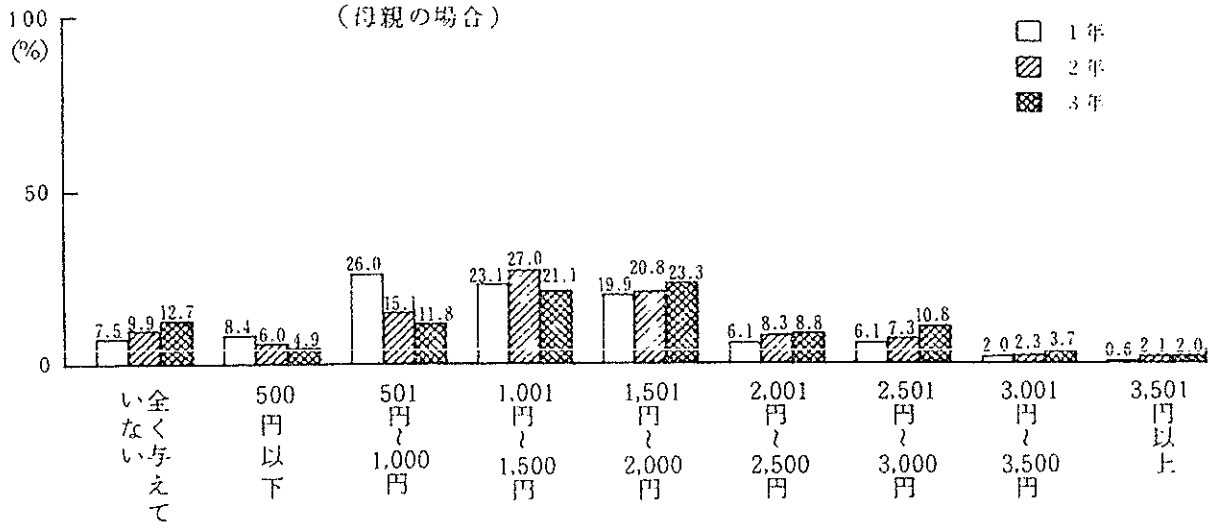
こづかいについての第二の設問は、月々のこづかいの他に臨時のお金を要求した場合の、親の対応の実態を調査したものである。図２－３、図２－４は子どもの臨時的なおこづかいの要求に対する両親の対応の仕方をあらわしたものである。両親とも、こうした要求に対しては極めて寛大である傾向がうかがえる。このような臨時的な要求を受け入れない傾向にある親は、平均約20%であるが、総じて父親がきびしく、母親が寛大である。

（図２－１）



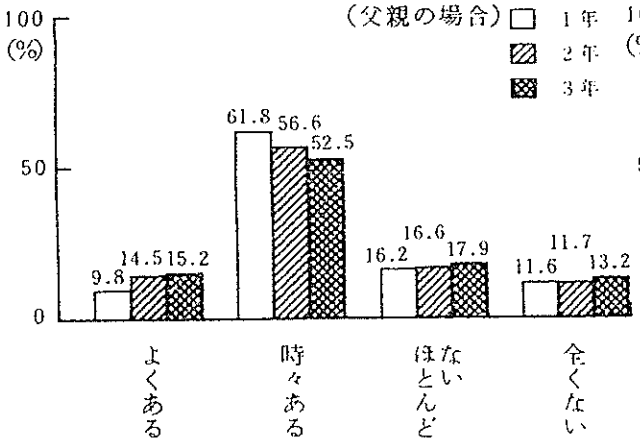
（図２－２）

あなたは、お子さんに１ケ月平均どのくらいおこずかいを与えていますか。



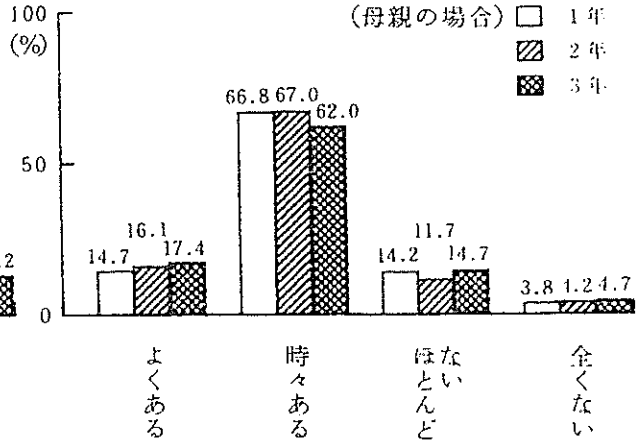
（図２－３）

あなたは、お子さんが月々のおこづかいの他に何かの理由（友だちと遊びに行くためとか何か欲しい物を買うため）で、お金を要求した場合きいてやることがありますか。



（図２－４）

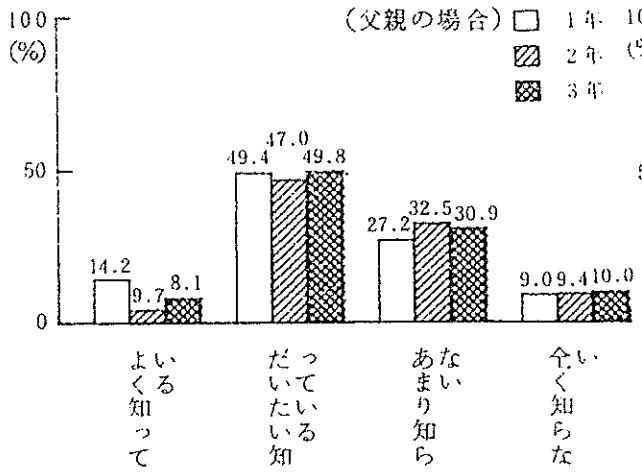
あなたは、お子さんが月々のおこづかいの他に何かの理由（友だちと遊びに行くためとか何か欲しい物を買うため）で、お金を要求した場合きいてやることがありますか。



子どものこづかいについての第三の設問は、子どものこづかいの使い方について両親がどの程度留意し、かつ知識をもっているかを調べるものであった。両親をあわせると、ほとんどの親が子どものこづかいのつかいみちを知っていることがわかった。もちろん家にいる機会が相対的に少ない父親の場合は、母親に比べて知らないとする率がはるかに高いが、それでも60%近くの父親が子どものこづかいに関心を払い、そのつかいみちについて、だいたいの知識をもっていることがわかった。父子家庭の存在を無視すれば、子どものこづかいのつかいみちについて「あまり知らない」、あるいは「全く知らない」という家庭は５%強と考えてさしつかえないであろう。図２－５、図２－６は学年別にみた、子どものこづかいのつかいみちについての両親の知識の有無を図示したものである。

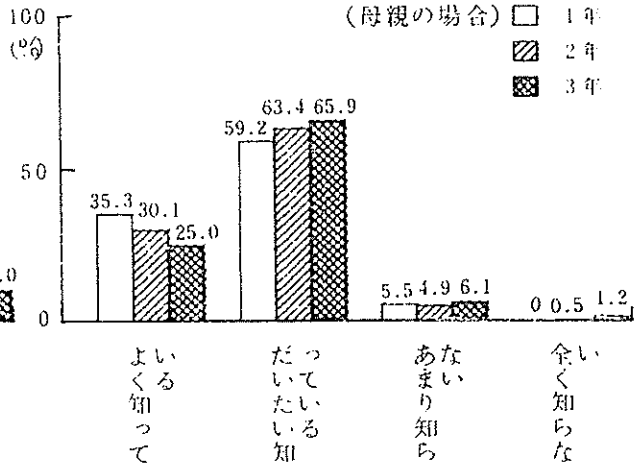
（図２－５）

あなたは、お子さんがおこづかいをどのように使っているか知っていますか。



（図２－６）

あなたは、お子さんがおこづかいをどのように使っているか知っていますか。

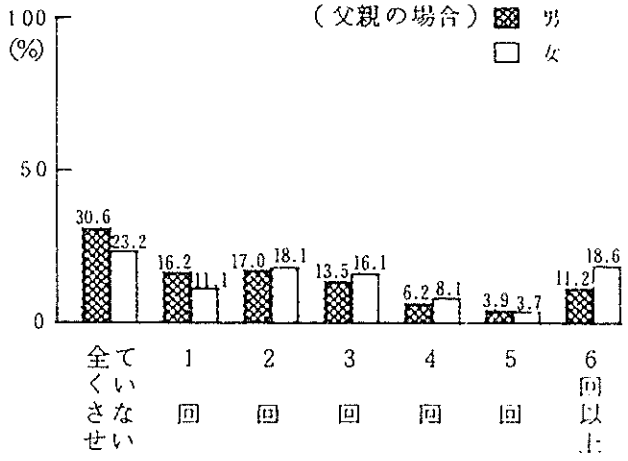


(2) 手伝いの実態

中学生といえば身体的発達の点で、すでに一人前であり、知識・技術及び日常の基本的生活習慣等においても、小学生段階の子どもに比べて飛躍的に向上する時期である。こうした中学生に両親は、どの程度家庭の一員としての役割分担を課しているだろうか。本調査では一週間という時期を設定して、その間に風呂をそうじしたり、洗濯をしたり、ゴミを焼いたり、夕食を作ったり、日常生活ではごくごくあたり前の役割や作業を、子どもに手伝わせたかどうか、その回数を尋ねた。上記のような作業を子どもに全く課していない父親が４分の１強存在する。同様に何も全くさせていない親を含めれば父親で約40％、母親で約25％の数字になる。両親あわせて25～40％の親が子どもに手伝いを

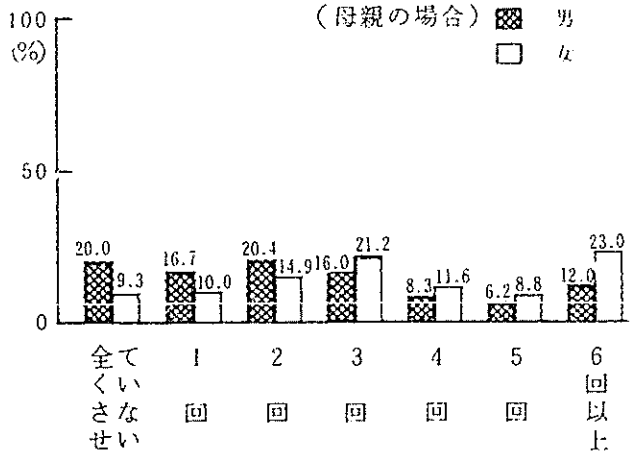
（図２－７）

あなたは、この１週間に比較的体を動かす手伝い（風呂を掃除したり、洗たくをしたり、ゴミを焼いたり、部屋を掃除したり、夕食をつくったり）をお子さんに何回くらいさせましたか



（図２－８）

あなたは、この１週間に比較的体を動かす手伝い（風呂を掃除したり、洗たくをしたり、ゴミを焼いたり、部屋を掃除したり、夕食をつくったり）をお子さんに何回くらいさせましたか



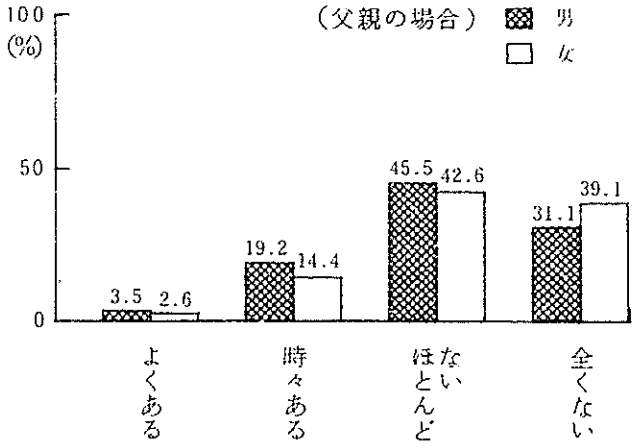
させるという点での役割分担や家庭生活への参加の指導をしていないのである。他方、５回以上の手伝いをさせている場合、すなわち、ほぼ毎日定例的に家庭生活における何らかの役割を課している両親は、父親で20％弱、母親で25％弱である。このように子どもの手伝いに対する両親の対応は、一方の４分の１強が何もさせず、他方の４分の１弱が子どもの役割分担を重視し、その両極の間に多少の手伝いをさせているという残りの半分の親が分散している。父親の場合も、母親の場合も、女の子に男の子よりも、より多くの手伝いをさせている。子どもの男女別による手伝いの有無の差は、ほとんど毎日定例的に手伝っているのは女の子が多く、全く手伝っていない子どもたちは男の子が多い。図２－７、図２－８は子どもの性別による両親の手伝わせ方の実態を図示したものである。

(3) 性教育の実態

子どもの性教育については約半数近くの親が、この種の話題を回避したり、無視したりする傾向が存在する。しかしながら、母親は父親に比べればはるかに努力していることがうかがえる。父親の場合、子どもに性についての指導や話をすることが「ほとんどない」「全くない」をあわせれば、ほぼ80％に近い。すなわち、大部分の父親は意図的にであるかどうかは別にして性教育の場面から逃げだしているといっても過言ではない。これに対して母親は、その過半数が特に中学１、２年の時期に何らかの形で、性についての指導を試みている。しかし、それでも半数弱は、「ほとんど」、あるいは「全く」性教育から逃げだしているのである。多くの親が中学生に対する性の指導で、とまどっていることがはっきりとうかがえる。子どもの性別によって親の指導のあり方が違うかどうかをみてみると、性教育を試みている親にあっては、当然のことながら父親が男の子に対して、母親が女の子に対

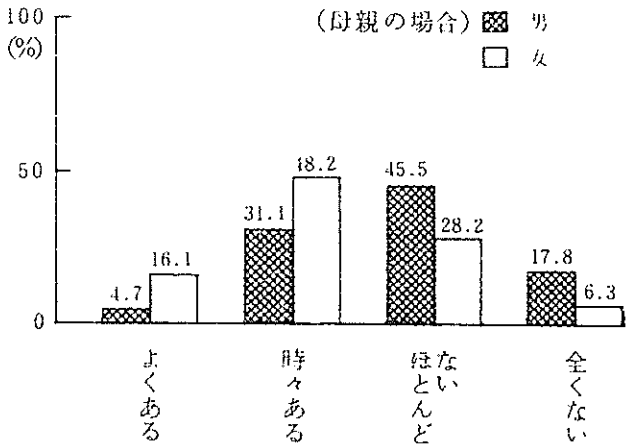
（図２－９）

あなたは、お子さんに性のことについて教えたり指導したり、話したりすることがありますか。



（図２－10）

あなたは、お子さんに性のことについて教えたり指導したり、話したりすることがありますか。



してより多く指導にあたっている。同性同士という関係が多少の影響をもっていることがうかがえる。父親よりは母親の方が性教育のかかわりが深く、しかも母親は男の子よりは女の子に対して、より熱心に指導を行う傾向が強いことを考慮すれば、男の子に対する性についての指導は極めて手薄であるということがいえよう。図２－９、図２－10は両親の性教育へのかかわりを子どもの男女別にあらわしたものである。

(4)　まとめ

総じて子どものこづかいの要求に対する親の対応は寛大である。しかし大部分の親は、ただやみくもにこづかいを与えているのではなく、子どもがそれを何に使ったかという、つかいみちについては多くの親が「知っている」と答えている。ただし両親共に、子どもにこづかいを与えながらも、そのつかいみちを「よく知らない」としている親が一定数存在することは、こづかいの額が決して少なくないだけに生活指導上の不安をまぬがれない。

子どもの手伝いについては、すでに多くの調査が明らかにしたことと重複するが、現在の中学生の手伝いは極めて少ないことが本県の場合でも明らかになった。また、男子に比べて、女子の方を定例的にてつだわせている傾向が強いことは、親の側の伝統的な性役割分業観がいまだに根強いことを示している。

中学生の時期は心身の発達が著しいと同時に極めて不安定であり、性に関する指導は親にとっても心配かつ頭の痛い課題である。また、現代社会における性的な情報の氾濫が多くの点で、子どもをも親をも、きわめて難しい状況に追い込んでしまう傾向にあることは、性非行の増加や尖鋭化によって

明らかであろう。にもかかわらず半数近くの親が中学生に対する性の指導でとまどったり、逃げ出したりしていることが調査結果から判明した。性教育については意図的・計画的にこれを実施すべきであるという考え方と、子どもが自然に学ぶのにまかせろという両極の意見が存在し、見解のわかれるところである。思春期の子どもたちに対する性についての教育的オリエンテーションが極めて不十分であり、逆に性的な欲求や衝動を刺激する性情報が子どもの日常にあふれているという現実をどうするかは、現在直ちに、親や指導者の解答を要求している。

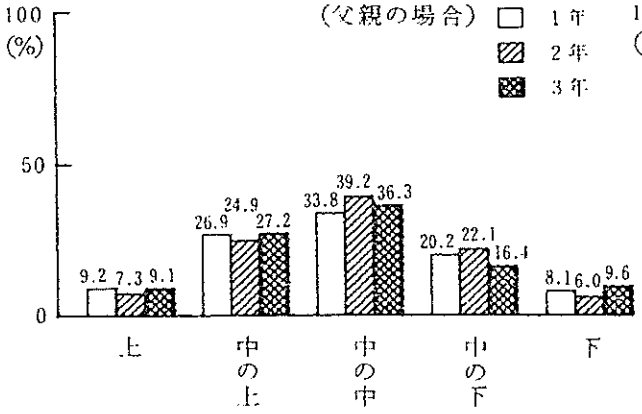
3　子どもの成績についての親の考え方

(1)　子どもの成績

子どもの成績についての両親の理解と把握は次のグラフに示されるよう、ほぼ正規分布に近いもので、親の態度が極めて冷静、かつ客観的であることを示しているといえよう。このことは、世にいう親ばかとか、親のひいき目というのがはいりえぬくらいに中学校の成績が客観化され数字化されているということであるかもしれない。図３－１、図３－２は両親の子どもの成績に対する認識を学年別にあらわしたものである。

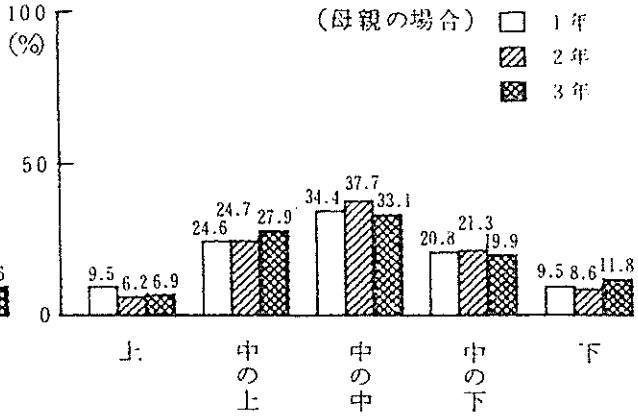
（図３－１）

あなたは、お子さんの学校の成績がどのくらいと思いますか。



（図３－２）

あなたは、お子さんの学校の成績がどのくらいと思いますか。



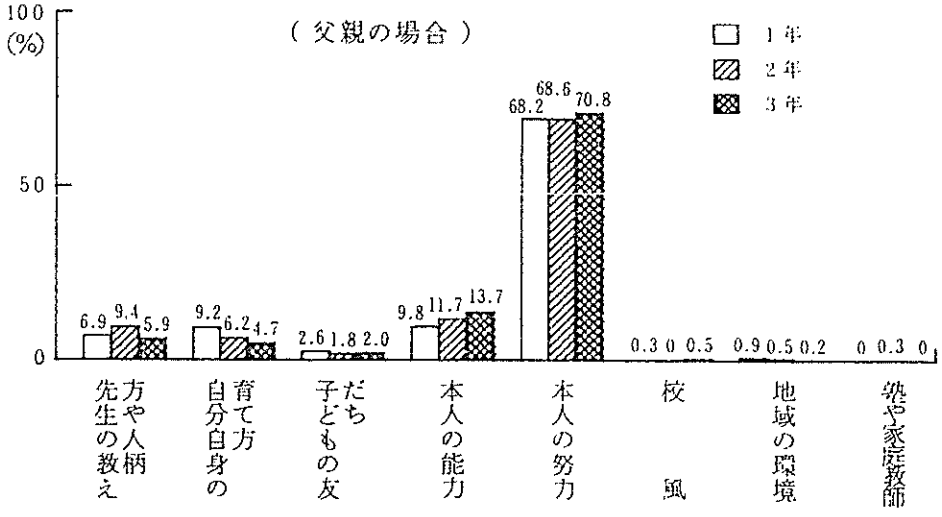
(2)　子どもの成績に影響する要因

子どもの成績に最も影響する要因は「本人の努力である」と親は考えている。このいわば努力主義とでも名づくべき考え方は、父親の場合も母親の場合も他の要因に比べて圧倒的に高い。努力の如何が成績を決定するという考え方は両親の平均が７割を超えている。第二にあげられた「本人の能力」が10%強、第三位の「先生の教え方や人柄」が８%前後であることと比べても、いかに努力主義の傾向が強いかが明らかであろう。〝できないのはおまえのやり方が足りないからだ〟と叱られている子

どもの姿が目にみえるようであるが、「自助」努力に力点を置く両親の考え方は社会的、文化的な観点からみた場合、正常かつ好ましい傾向であるとして異論がないであろう。図３－３、図３－４は、子どもの成績に対する影響要因についての親の考え方を子どもの学年別にあらわしたものである。

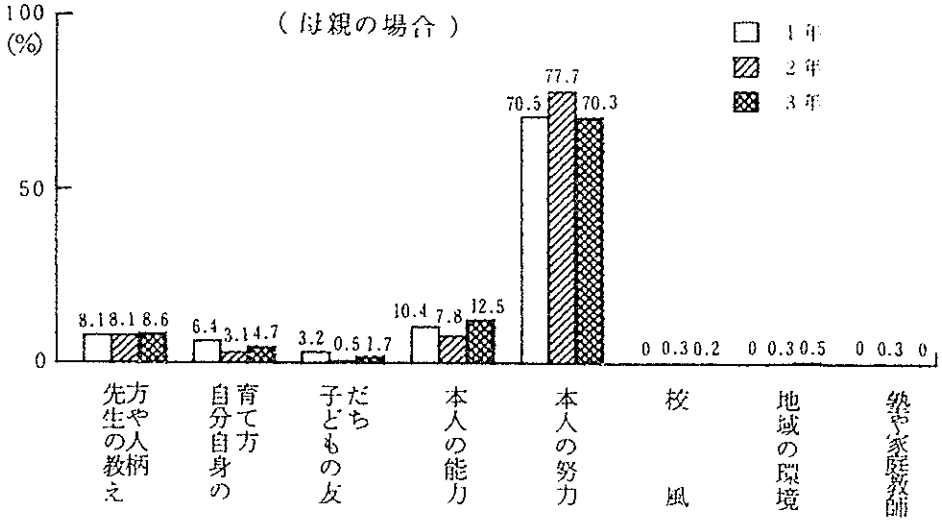
（図３－３）

あなたは、お子さんの成績に最も影響するのは次のどれだと思いますか。１つ選んでください。



（図３－４）

あなたは、お子さんの成績に最も影響するのは次のどれだと思いますか。１つ選んでください。



4　親と子の交流とその内容

(1)　日常における親子の対話

日常生活における子どもと両親の会話や交流についての複数の設問を設定して、その実態を調査した結果は総じて親と子の関係は密接であるということができる。まず、子どもとテレビや映画のこと、あるいはスポーツのことなどについて話しますかという問いに対する両親の回答は図４－１、図４－２の通りである。母親に比べて父親の方が子どもとの会話が少ない傾向がみられるが、全般的に親と子はよく話をしているといっていいだろう。

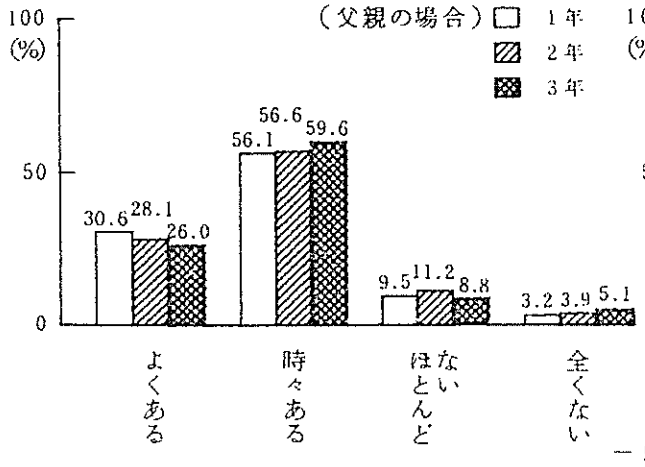
しかしながら、親子の交流についての子どもの側からの評価は必ずしも親の見方とは一致していない。親はいくつかの分野で親子の関係が密接であるような回答を寄せているが、子どもの側からの評価は低い。たとえば、将来や人生のことについての親子の対話や交流がどのくらいあるかという質問に対して子どもは親のほぼ半分しか交流があることを認めていないのである。

また、クラブ活動や学校行事、先生や友だちのことなどについて子どもと話すことがありますかという問いに対しても非常に多くの親が「よく」、あるいは「ときどき」話をしていることがわかる。「ほとんど」あるいは「全く」この種の話をしないのは、あいかわらず父親に多く、20%をこえている。しかし、母親の方はそれをカバーするような形で子どもとよく対話をしている。ただし３年生になると１割近くの子どもたちが母親ともほとんど学校の話をしなくなることは心配である。図４－３、図４－４は学校のことをめぐって両親が子どもとどの程度話をしているかを子どもの学年別にあらわしたものである。

次の問いは前の二つの問いに比べれば内容がいささか重い。親と子は子どもの将来や人生について日常話をしているのであろうか。調査結果はこのような真剣かつ重い話題についても家庭内で多くの親子が話し合っていることを示している。この場合もやはり父と子の対話は、母と子の対話に比べて少ない。また進学期や就職期を迎えることもあって、３年生との対話がふえる傾向があるのは自然であろう。この場合も子どもと「ほとんど」「全く」対話のない父親は20%をこえている。子どもの将

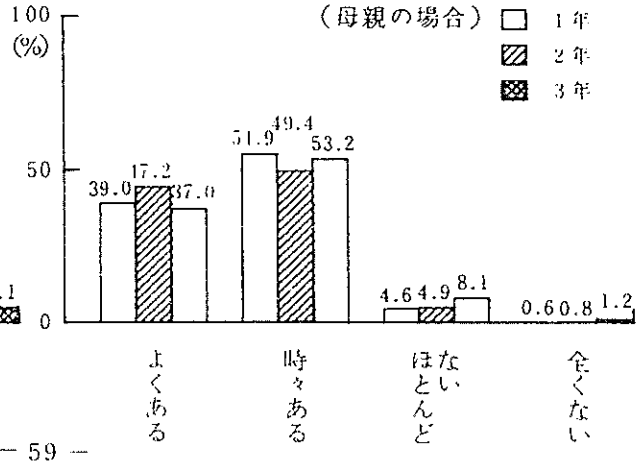
（図４－１）

あなたは、お子さんとテレビのことや映画のことやスポーツのことなどについて話すことがありますか



（図４－２）

あなたは、お子さんとテレビのことや映画のことやスポーツのことなどについて話すことがありますか。



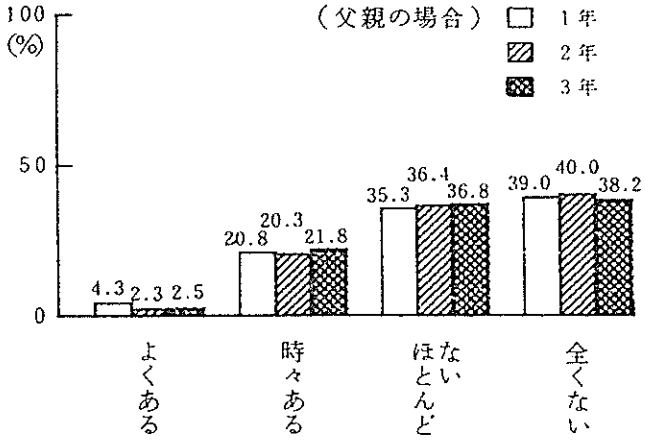
(3) 子どもの成績と報酬

子どもの成績に最も影響する要因は子ども自身の努力であると考える傾向が強い本県の両親は、子どもの成績が上がった場合、ほしいものを買ってあげたり、おこづかいをあげたりするなど何らかの報酬を与えるようなことがあるであろうか。図３－５、図３－６は子どもの成績と報酬についての親の態度を子どもの学年別にあらわしたものである。

総じて父親の方が甘いというか、気前のいい傾向がでている。しかしながら、大部分の両親は子どもの成績があがっても特別に報酬を与えるというような対応はしていない。もちろん両親の平均で20％前後の親が成績があがったことに対して報酬を与えていることは、問題を含んでいることも疑いない。報酬の与え方には励ましのごほうびという意味から金銭等で子どもの努力を買うというような考え方まで含まれているからである。また、父親の甘さや気前のよさは日頃子どもに接していないという不安や、うしろめたさの裏返しの感情が反映しているとも推測できる。

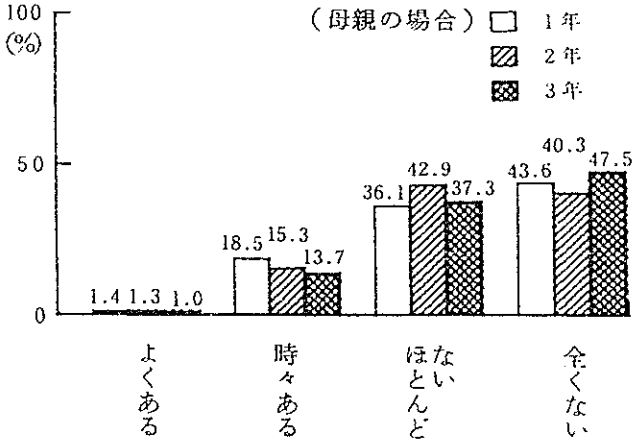
（図３－５）

あなたは、お子さんの成績があがった場合、日頃欲しがっている物を買ってやったり、おこづかいをあげたりすることがありますか。



（図３－６）

あなたは、お子さんの成績があがった場合、日頃欲しがっている物を買ってやったり、おこづかいをあげたりすることがありますか。



(4) まとめ

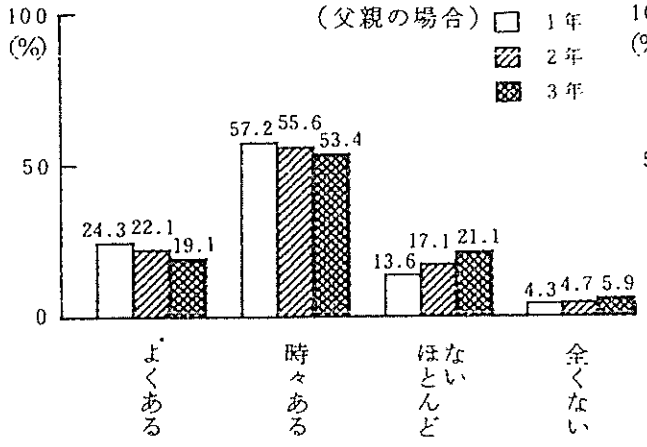
子どもの成績についての親の理解は、極めて冷静かつ客観的である。また、成績に最も影響する要因は本人の努力如何であるとする考え方が群を抜いて多いのは、「自助」努力を重視する考え方が多数を占めることを示しており、健全かつ歓迎すべき傾向である。しかしながら20％前後の親が成績の向上に対して報酬を与えるなど、金銭等で子どもの努力を評価するという傾向を示しており、子ども時代の物事に対する内発性や自主性を育てるという観点から必ずしも問題なしとしないところである。

ごほうびも、その与え方でその精神が生きたり死んだりすることは明らかであり、親としての心づかいが必要である。

来を決定する極めて大事な時期に父親の助言や励ましが得られないとすれば、これは明らかに子どもの不幸であるといって過言ではあるまい。また、母親の場合でも平均10%ぐらいの人々が「ほとんど」あるいは「全く」子どもと、この種の会話を交わしていないのである。図4－5は将来や人生について親と子の話し合いがどの程度行われているのかを示したものである。

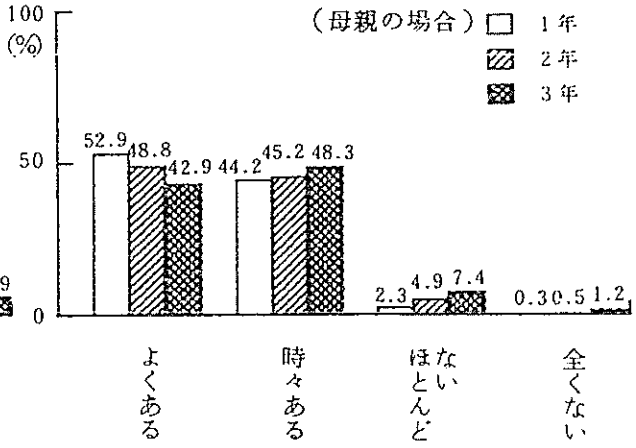
（図4－3）

あなたは、お子さんと、学校生活のこと（例えば授業のこと、クラブのこと、先生のこと、友だちのこと、学校行事のことなど）について話すことがありますか。



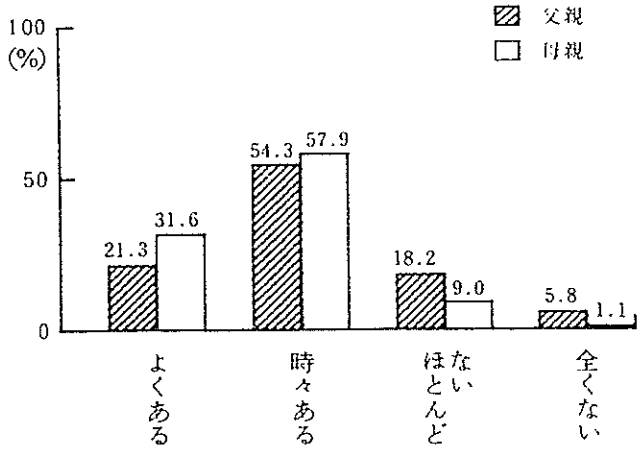
（図4－4）

あなたは、お子さんと、学校生活のこと（例えば授業のこと、クラブのこと、先生のこと、友だちのこと、学校行事のことなど）について話すことがありますか。



（図4－5）

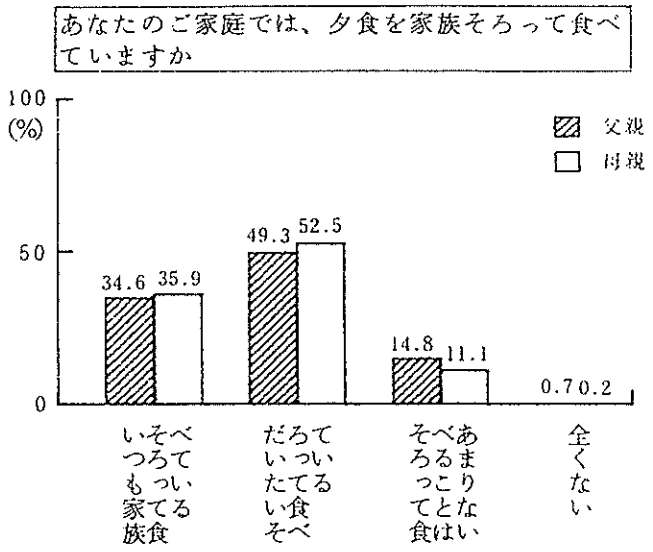
あなたは、お子さんと、お子さんの将来や人生について話すことがありますか。（成人してどんな仕事につくか、どんな生き方をするかなど受験以外のことで）



(2) 家族そろっての夕食

家族そろって夕食を食べているかどうかの設問は、前で述べてきたような親子の対話の基本的な条件をみるうえで、極めて大切であるが、同時に仕事やその他の事情によって必ずしも親子そろって夕食を食べられる条件にない人々もいるので、安易に分析はしがたい。しかしながら、父親、母親の別に尋ねているので、親が子どもといっしょに食事をしているかどうかについての、だいたいの傾向についてはつかむことができる。両親の反応は図4－6の通りである。

（図4－6）



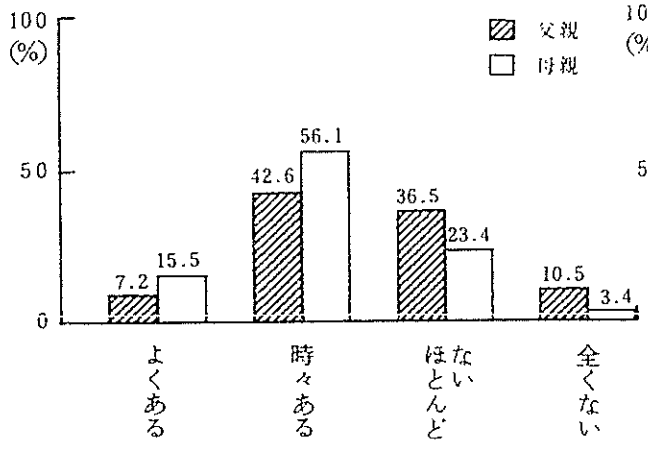
(3) 親子の交流

親子の交流の深さを二つの設問で尋ねてみた。第一には、子どもを信頼して日々の生活のことなどについてその意見を聞いたり、相談したりすることがあるかというものである。両親とも意外にといっていいほど多くの人々が子どもに意見を言わせていることがわかった。子どもの学年別や性別は、あまり関係していないようである。このことは子どもへの信頼をあらわすと同時に、一人前に近づきつつある子どもの存在を評価して認めてやるということに関係すると思われるが、守備範囲の違いによるものか母親の方が、父親よりも、よりひんぱんに子どもの意見を求めている。図4－7は両親の子どもに対する意見の聴取や相談のもちかけの実態をあらわしたものである。

次に親が子どもの交友関係をどの程度知っているかを調査した結果では、母親は極めてよく知っており、父親の4割強はあまり知らないか、全く知らないのである。この問題についても学年別及び子どもの性別による差異は、ほとんど認められない。子どもの交友関係についての両親の知識を示すのが図4－8である。

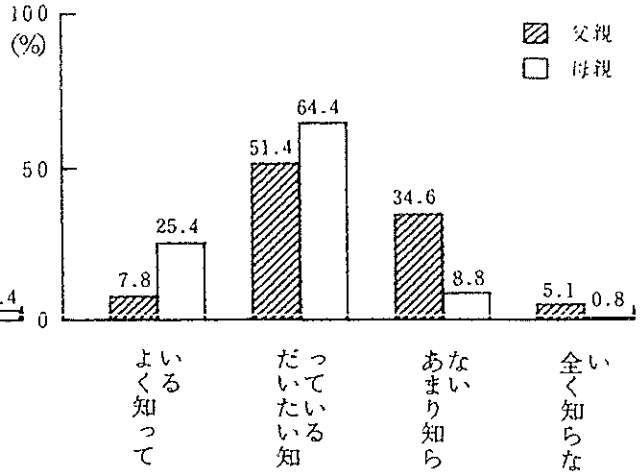
（図４－７）

あなたは、お子さんに何か家庭のこと（お子さん自身のことを除く）で意見を聞いたり、相談したりすることがありますか。



（図４－８）

あなたは、お子さんの交友関係について知っていますか。



(4)　まとめ

以上みてきた通り、親子の対話や交流はおよそ緊密かつ健全であると思われる。しかしながら常に1割内外の問題状況をかかえた親や子が存在することも疑いないようである。特に父親と子どもの接触が希薄になる傾向が強く、母親がそのすきまを埋められない場合、子どもは必然的に保護者との対話や交流を失うことになる。従って中学生段階の自分の将来や進路を考え始める子どもたちの指導をほとんど母親だけにまかせているという多くの父親の存在は、極めて問題であるといえよう。社会や職業に関する事、自分の生き方に関する事を考え始める年齢の子どもたちにとって、父親の助言や指導は極めて重要であり、また母親の指導だけでは不十分になる恐れがあるからである。

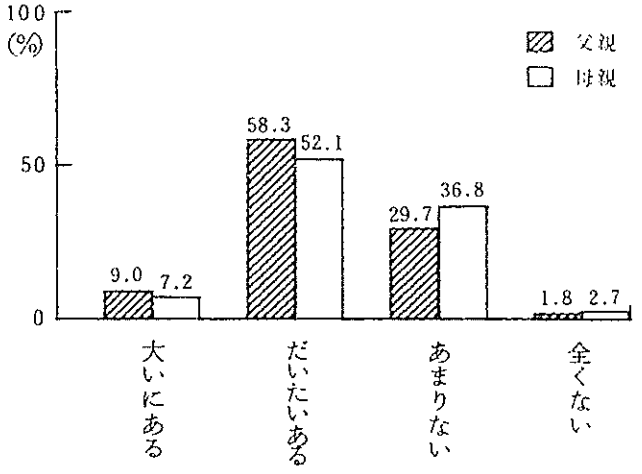
5　子どもについての親の評価や実感

(1)　自主性や忍耐力についての評価

あなたの子どもは自主性がありますかという問いに対して、約6割の親が子どもの自主性を認めている。子どもの自主性については父親の方が母親よりも評価が甘い。一方自分の子は「あまり」、あるいは「全く」自主性がないとしている親が3割をこえているのは大問題である。しかも、この子どもたちは中学生である。また性別による差異は、わずかながら女の子の自主性が高いことがうかがわれるが、学年別の差異は認められない。従って1年生から3年生までながめて、ほぼ3割が自主性がないということは、中学校の現状がいかにすさまじいものであるかを想像させる。両親の子どもの自主性についての評価は図5－1の通りである。

（図５－１）

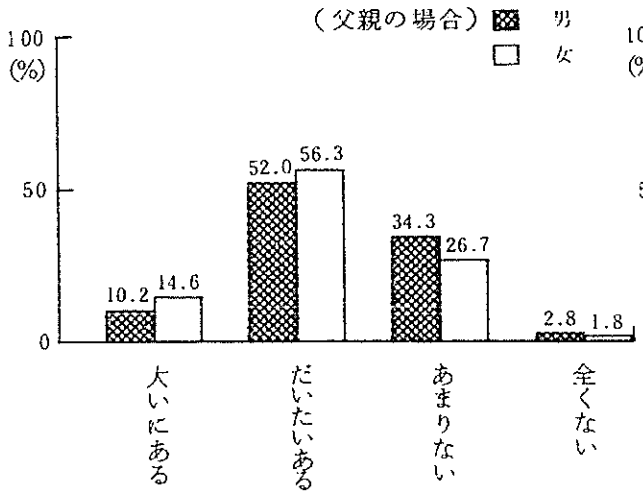
あなたは、お子さんは自主性があると思いますか



次に子どもの忍耐力についての両親の評価をみると、自主性の場合とほぼ同様に３割強の親が「あまりない」及び「全くない」と回答している。この場合も父親の評価は母親に比べて甘い。ここでも女の子に対する両親の評価は男の子に対するものよりは若干高く、学年別による差異はみられなかった。図５－２、図５－３は子どもの忍耐力についての両親の評価を子どもの性別によってあらわしたものである。

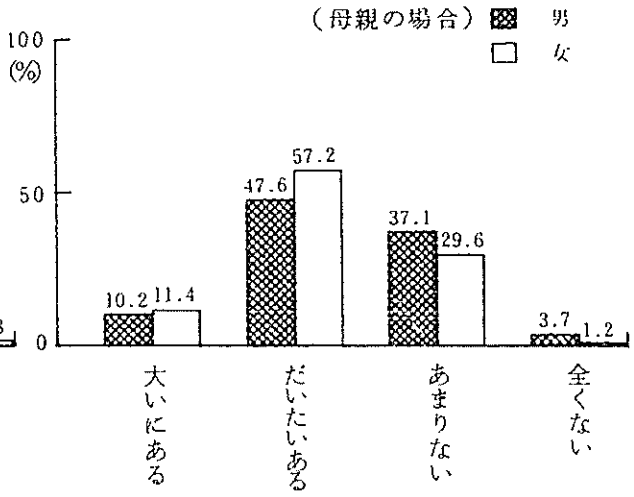
（図５－２）

あなたは、お子さんは忍耐力（我慢強さ）があると思いますか。



（図５－３）

あなたは、お子さんは忍耐力（我慢強さ）があると思いますか。



(2) 子どもに対する腹立ちや気づかい

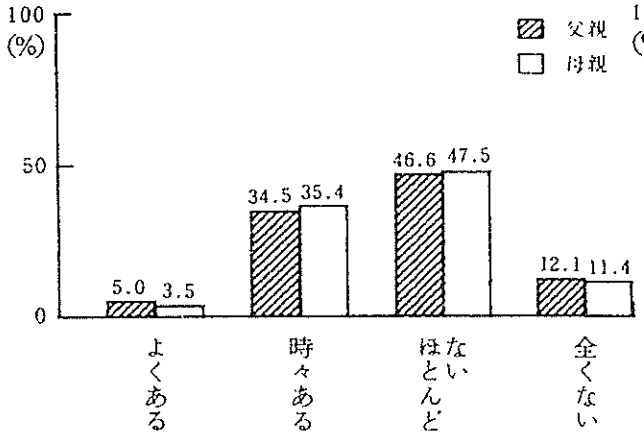
親は子どもの気持ちをどの程度理解しているであろうか。子どもが見えないとか、子どもの気持ちがわからないとかいうことは教育界でよく言われることがらであるが、親の場合にも約4割の人々が子どもの気持ちがわからなくなって、とまどうことが「よくある」あるいは「ときどきある」と答えている。もちろん中学生の時期は、からだも心も最も急激に変わる思春期であり、一方で親が子どもの変化についていけないという状況があり、他方で子どもが自主、独立を求めて親に反抗したり、自らの心を閉ざしてしまうというようなことが重なっていることが想像される。子どもの学年が進むにつれて親のとまどいが、わずかずつではあるが、ふえているのは、思春期のますます複雑な問題に当面しつつある親子の混迷を象徴している。この場合、子どもの男女別による差異はほとんど認められなかった。また父親と母親との差もほとんどみられない。図5－4は親が子どもの気持ちがわからなくなる時が、どれくらいあるかをあらわしたものである。

さてこのような親の子どもに対するとまどいや不安は、親子関係の摩擦やそごをどれくらい引き起こしているであろうか。次の設問では、親が子どもに対して腹を立て、なぐりたいと思うようなことがあるかどうかを尋ねているが、その回答は次のようなものであった。

図からわかるように父親と母親の差異はほとんど存在しない。過半数の親が子どもに腹を立てて、「よく」あるいは「時々」なぐりたいという思いを経験している。子どもの未熟さや、親としての期待や、はがゆさの情を思うとき、親の腹立ちは理解できないことではないが、上記の数字については評価のわかれるところであろう。またこの場合、子どもの学年別及び性別による差異は特に認められない。

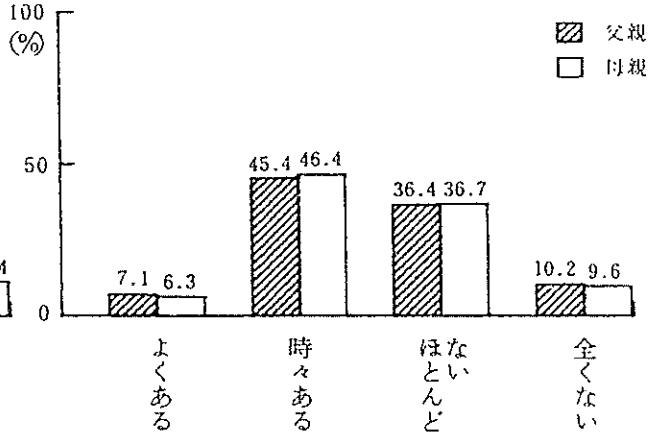
（図5－4）

あなたは、お子さんが何を考えているのか、その気持がわからずとまどうことがありますか。

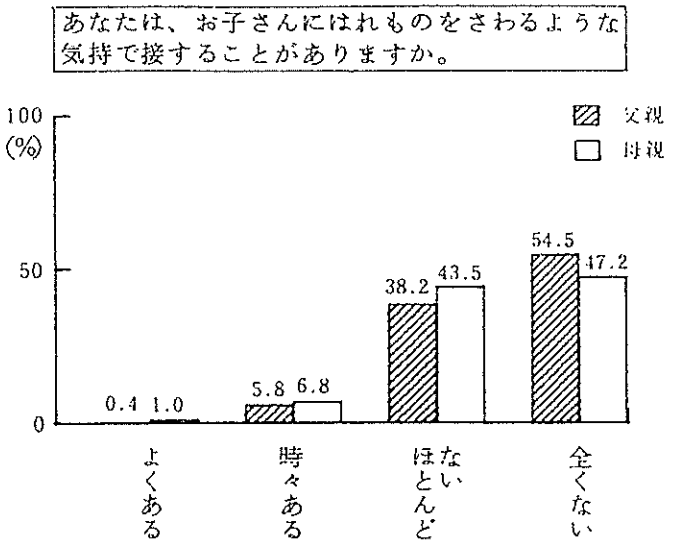


（図5－5）

あなたは、お子さんに対して腹が立ちなぐりたいと思うことがありますか。



（図５－６）



ところで第三の設問は、親の腹立ちとは反対に叱りたくても叱れないというような、子どもへの気がねや、ためらいの有無について尋ねている。子どもに対して、はれものにさかるような気持ちで接している親はどれくらいいるのだろうか。図５－６が親の子どもに対する気がねや不安をあらわしているが、大多数の親がそうした感情をもってはいない。

このことは父親の場合も母親の場合も平均してみるとほぼ同様である。子どもの学年別、性別による相違も認められない。要するに大多数の親は、子どもに対して一定の自信を持って接していると考えている。しかしながら６～７％の親が、はらはらしながら子どもに接しているというのは、家庭教育のうえで極めて重要である。これらの子どもたちには親がけじめをつけることができず、親を通して社会規範が伝達されていないことが予測されるからである。

(3)　まとめ

親の眼からみても、現代っ子の自主性や忍耐力が低いということは本県の調査でも判明した。一般にいわれる無気力、無関心の傾向は全体を支配するに至っていることがうかがえる。また、親の子どもに対する理解が及ばない場合も極めて多く、結果として腹を立てた親が子どもをなぐりたいと思うような場合も過半数をこえている。親の苦労をみる機会がなくなったとか、親子が苦労を共にするという場面が不足しているとか指摘されていることは、一方では親が子どもを理解できず、親子の意識のずれや考え方のギャップにいら立つという現象を引き起こすと同時に、他方では子どもの側からも同様な結果が生じていることは想像に難くない。また、自主性や忍耐力が不足しがちであるという傾

向も最終的には家庭での養育に何らかの手落ちがあったと考えるのが妥当であろう。

自主性を育てえず、また、忍耐力を育てえなかった根本原因は日常生活の中で子どもたちに、その種の力を養うような場と機会が決定的に不足していたことを意味している。

6　子どもについての悩み

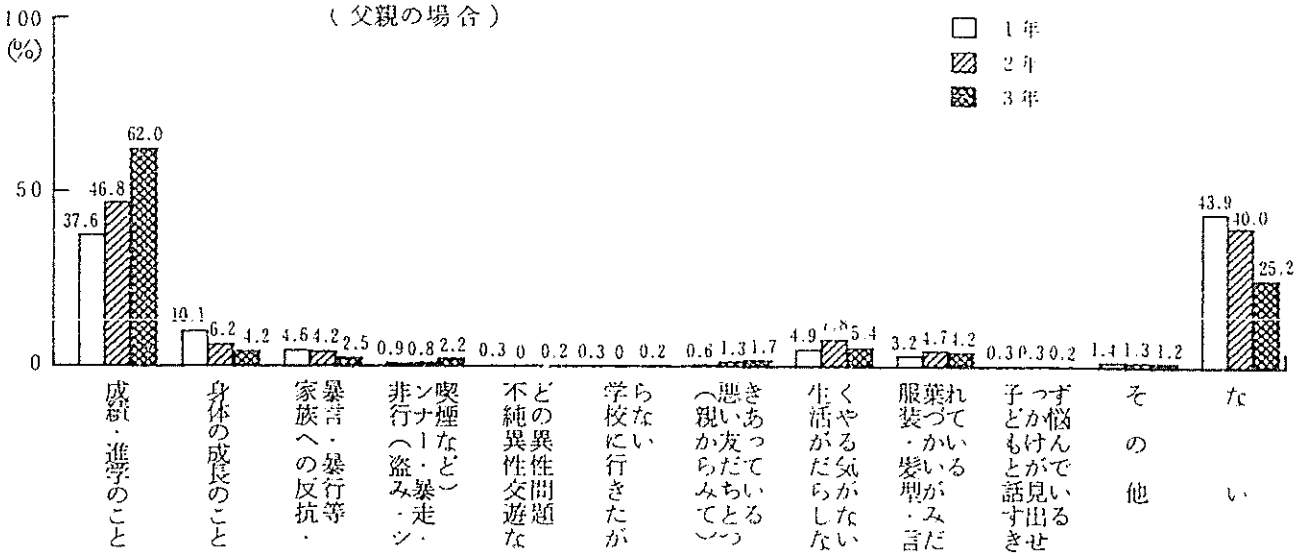
現在、中学生の子どもを持つ親は多くの悩みをかかえている。本県の場合、それを子どもの学年別にみると図6－1のように分散している。

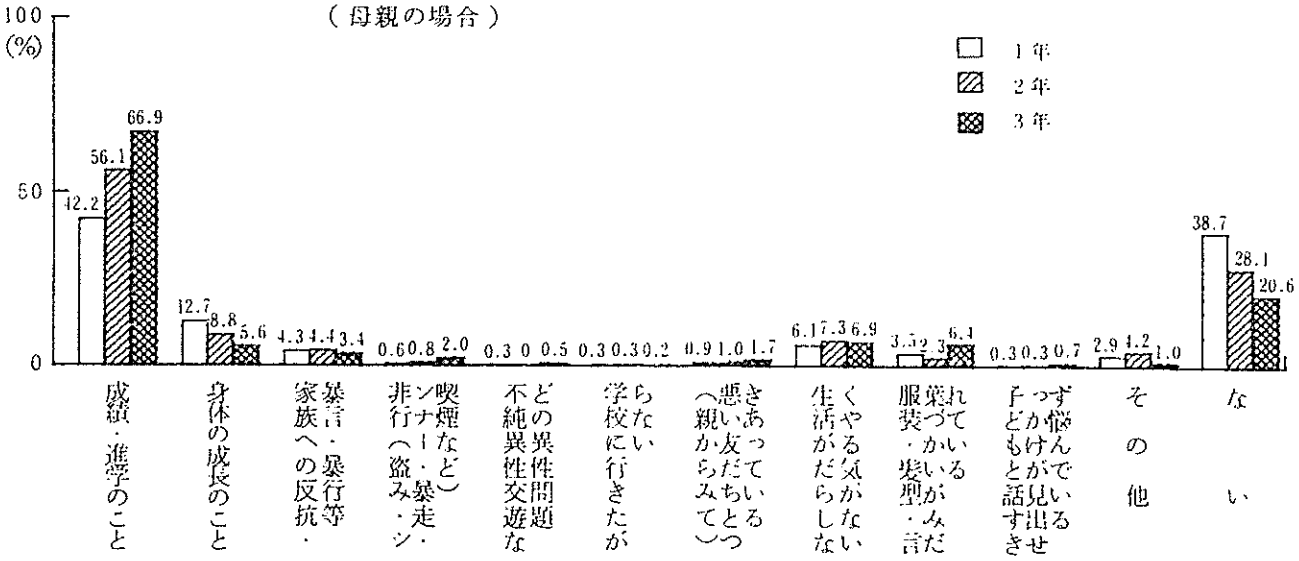
親の悩みの第一位は、やはり成績や進学のことであったが、同時に、困っていることや悩みごとが、「ない」と答えた人も多いことが注目される。現在社会的に問題となっている子どもの逸脱行動については、家族への反抗、暴言、暴行などがあること、また服装、髪型、ことばづかいのみだれが指摘されている。親自身が自分の子どもに対して、数的にはごく少数であるが、盗み、シンナー、暴走、不純異性交遊などは困ったことだと指摘しているのは重大である。

見方を変えれば、そうした子どもたちを前にして、悩むのみで、ほとんどなすすべのない親の姿がはうふつしてくる。そうした親の存在こそが一方では大きな問題である。また一方、子どもたちの行動にはきがなく、やる気そのものが問題であるとしている親が6％強存在している。子どもたちの生活意欲の低下に対しては、すでに三無主義とか四無主義とかいう社会的な呼び名も与えられているが、親の眼からみても、このことは危険信号と考えられていることがわかる。

（図６－１）

あなたは、現在お子さんについて困っていること悩んでいることがありますか。あるとすればその内容は何ですか。次のうちあてはまるものすべてを○でかこんでください。（はいと答えた割合）





子どもについての心配事には父親も母親も同様に心を痛めている。先に紹介したデータにおいて、父親と子どもとの交流が、母親と子どもとの交流に比べて、いくつかの点で少ないことが示されていたが、おそらくそれは父親の仕事上の理由によるものであろう。父と子の交流の中味はやや薄いとしても、父の子に対する心配りは母親とほとんど変わりないのである。

子どもについての心配事は、子どもの学年によって明らかに違いのあるものと、そうでないものとにわかれる。成績や進学のことは、学年が進むにつれ親の悩みの種となる傾向が強い。逆に、子どもの身体的成長についての心配事は思春期という時期を反映していることもあってか、1年生が最も高く、3年生が最も低い。中学へ入って、からだの急激な変化に心の成長がついていくだろうかというような思いで、子どもを見守っている親が想像できる。

また、子どもの交遊関係が学年が進むにつれて定着し、「親からみて悪い友だちとつきあっている」というような心配事も、学年が進むにつれてふえる傾向を示している。一方、子どもについての悩みは「ない」と答えた親の率は子どもの学年が進むにつれて、はっきりと減少する傾向を示している。すなわち、子どもの学年が高くなるにつれて、親の悩みの種が全体的にふえていく傾向にあることが明らかである。

1年生の時、子どもについての心配事が「ない」と答えた父親は約44%いたが、3年生になるとこれが25%に激減する。母親の場合も同様に35%から21%に減少している。その他の悩み事については子どもの学年別による相違は認められない。

子どもの性別による親の悩みは、父親と母親とでは、わずかではあるが相違がみられる。このことはおそらく親の子どもに対する期待感が、子どもの性別によって若干異なっていることを意味していると思われる。母親の場合は、男の子も女の子もほぼ平等にみていると思われるが、父親の場合、成績や進学のことについては、男の子についての悩みが女の子についての悩みよりも高い。また、子どものやる気についても父親の男の子評価は、女の子に対する評価よりもはるかにきびしい。逆に、家族への反抗や暴言等については、両親とも女の子に対する評価が男の子に対するものよりもきびしいが、なかでも父親の場合は、母親に比べて男の子に点数が甘く、女の子にきびしい傾向を示している。

これは両親の子どもに対する性役割期待の違いが反映していると思われる。さらに母親の場合は、子どもについての悩みは「ない」と答えた人の率が全く同数であるのに対し、父親の場合は、女の子に対して高く、男の子に対して低い。要するに父親は男の子について、より多く悩んでいるのである。このことは、父親の息子をみる眼がきびしく、息子に対する期待が大きいということを反映してはいないだろうか。

現在、我が国においては、国際婦人年等を契機として男女平等を理念的にも、実際的にも押し進めるべく国内行動計画を定めて強力に推進しているが、本調査にあらわれた多くの親の実感は、いまだに伝統的な性役割分業観に近く、この問題の難しさを示している。

7　親の生活実態と養育意識

(1)　生活の規則性

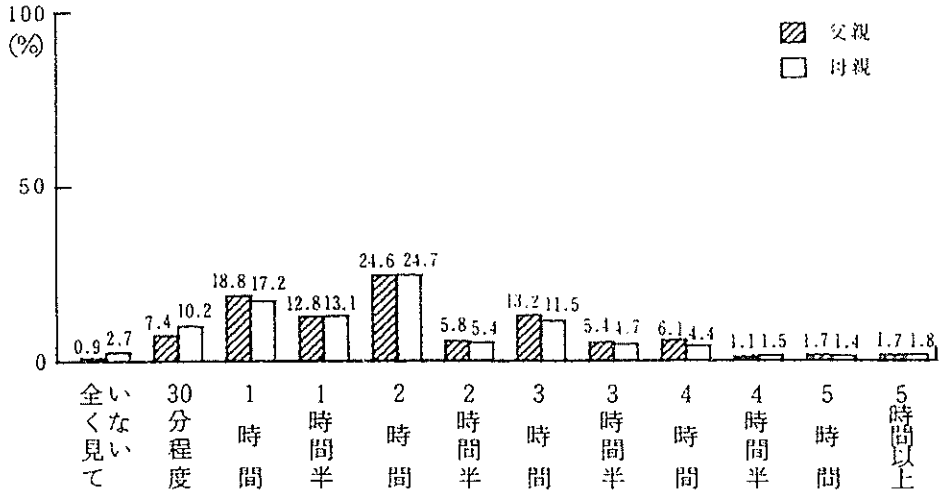
これまで子どもの生活習慣や子どもに対する親の評価をみてきたが、親自身の生活態度はどうだろうか。始めに、親の生活実態を明らかにするため、テレビの視聴時間と日々の生活の規則性について質問を行っている。

図7－1は両親の1日の平均テレビ視聴時間を示したものである。基本的にはＮＨＫ等が行った調査結果と同様で、3時間前後が平均的なところであろう。親のテレビの視聴時間については、いずれ子どものテレビ視聴時間と比較しながら分析する必要がある。

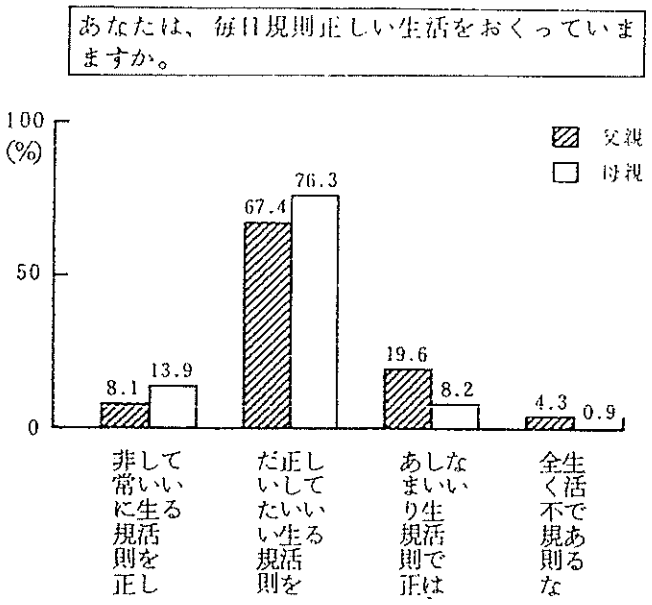
次に、「あなたは毎日規則正しい生活を送っていますか」という質問に対する親の反応は図7－2のとおりであった。この種の質問にはどうしても、たてまえの回答が起じってしまうものであるが、そのことを考慮に入れなければ、かなり多くの親が「非常に正しい」あるいは「だいたい正しい」生活をしていることがわかる。しかしながら、父親と母親を比較した場合、仕事の関係もあると思われるが、父親の方に不規則な生活を送っている人が多い。

（図7－1）

あなたは、平均してテレビを1日どのくらい見ていますか。



（図７－２）



親の生活が子どもの生活にどのような影響を与えているかについては、親子の対応関係をみる必要があるが、今回の報告書においては親子の実態を別々に紹介するにとどめて、別の機会に検討するものとする。

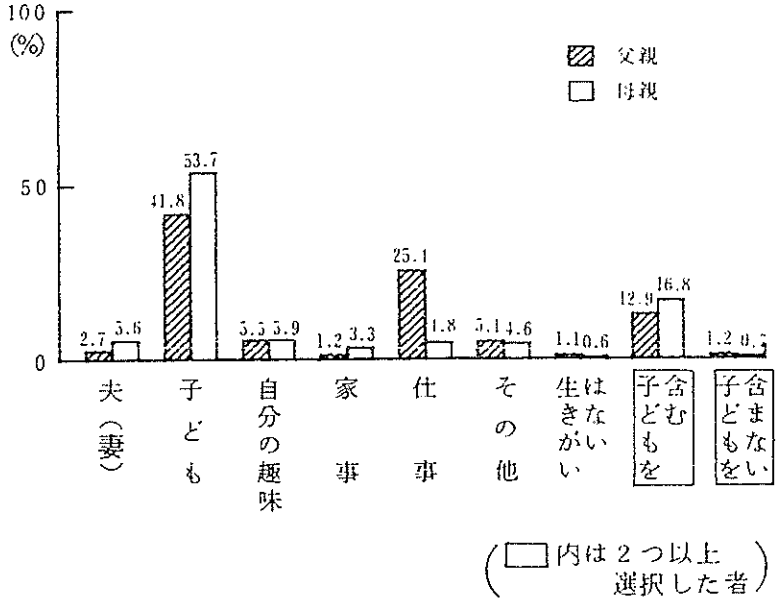
(2) 生きがい及び充実感

ほとんどすべての親が、それぞれの生きがい対象を有している。予想されたことであるが、第１位は子ども、第２位が仕事であった。父親の場合、母親よりも仕事を生きがいとする人の率がだんぜん高い。母親の場合、子どもを生きがいとする人の率が父親よりもかなり高い。「生きがいはない」としている人の率は１％以下である。図７－３は父親、母親別にみた生きがいの対象をあらわしている。

人々に生きがいの対象が明確に存在するということは当然のことながら、日々の生活の充実感を予想させる。図７－４は親の充実感をあらわしたものであるが、大部分の親が一定の充実感を持っていることがうかがえる。しかしながら１割弱の人々は必ずしも日々の生活に、はりあいを感じていない。多くの質問において、１割内外の親や子どもが、全体傾向からはずれていることが注目される。これも子どもと対応させてデータを検討したとき、親と子どもの相関関係が明らかになるだろう。

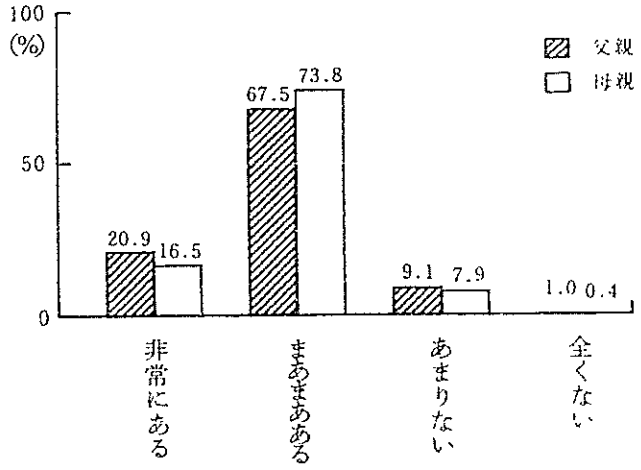
（図７－３）

あなたの生きがいの対象は何ですか。



（図７－４）

あなたは、毎日の生活に充実感がありますか。



(3) しつけについての自己評価

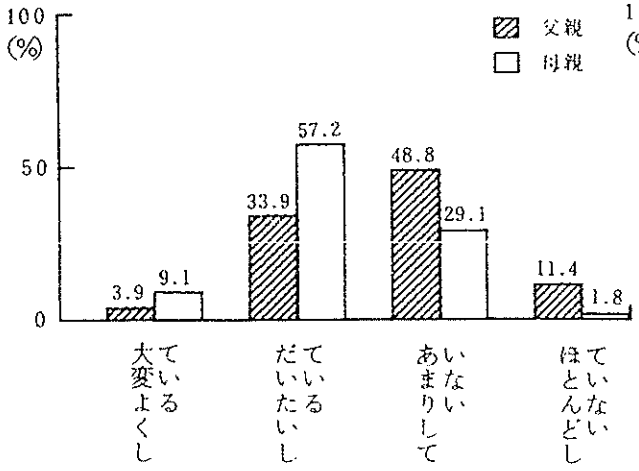
過保護とか、過干渉といった傾向が指摘されているこのごろである、親自身は子どもに対するかかわり方をどのように評価しているのであろうか。

始めに、「子どもの世話をよくしている方だと思いますか」という質問に対する回答は次のようなものである。父親38％、母親66％が「たいへんよくしている」あるいは「だいたいしている」と答えている。すなわち母親は父母に比べて、はるかに子どもの世話をしていることがわかる。これに対して全く放任している父親は11.4％、母親は1.8％である。このことから家庭という単位を考えた場合、完全な放任というのは極めて少ないということがうかがえる。また、「あまり世話をしていない」と回答した親の場合、子どもを起こしたり、夜食を作ってやったりする親の率を考えるとき、親の方は世話をしていないつもりでも実質的には、かなりの世話をしているのかもしれない。この点には留意しておくべきであろう。図7－5は親がどの程度子どもの世話をしていると思っているかについて回答したものである。

次に親は自分のしつけが甘い方だと思っているのだろうか。それともきびしい方だと考えているのだろうか。どちらかといえば「甘い」と考える親が約半分、どちらかといえば「甘くない」と考える親が残りの半分である。親の子どもに対する甘さの度合いは、子どもの学年別による相違はないが、父親の場合のみ、男の子よりも女の子にやや甘い傾向が認められる。図7－6は子どものしつけについての甘さを両親が自己評価したものである。

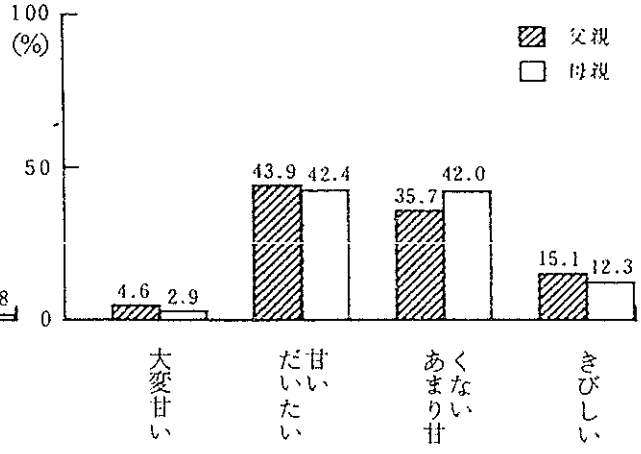
（図7－5）

あなたは、お子さんの世話をよくしているほうだと思いますか



（図7－6）

あなたは、お子さんのしつけについて甘いほうだと思いますか



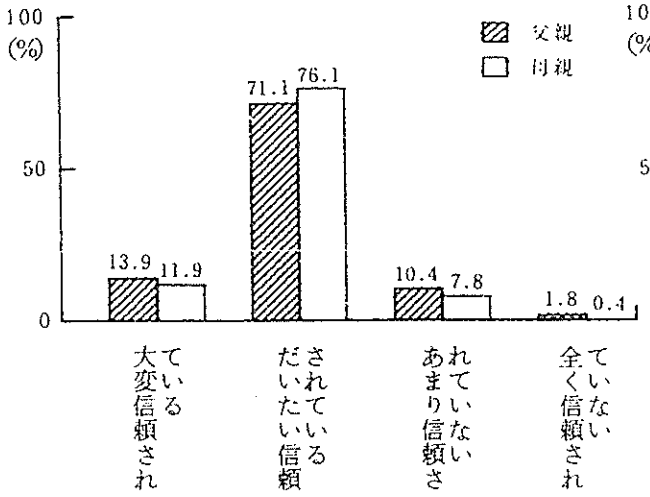
次に親は、自分を子どもがどのように評価していると考えているのだろうか。大多数の親は図７－７でみるように、子どもに信頼されていると考えている。しかし、ここでもやはり10%内外の親があまり信頼されていないだろうと悲観的である。父親では約12%が子どもに「全く」あるいは「あまり」信頼されていないと考えている。母親でも８%の人々が同様に自信がないと考えている。ここでも、また、１割の親が全体の傾向からはずれている。子どもから信頼されているかどうかの実感は、子どもの学年別によっても、性別によっても、また父母の別によっても基本的には相違ない。図７－７は子どもから信頼されているかどうかについての親の実感をあらわしたものである。

最後に、親は全体的にみて子どものしつけについて自信があるのかどうかみてみたい。これをみると、73%の父親及び62%の母親が「自信がある」と答えており、26%の父親及び37%の母親が、「自信がない」と答えている。ここでは、父親よりも母親の方が明らかに自信をもっている率が低い。子どもが思春期にあって様々な心身の問題に当面しているとき、平均して３割の親が「しつけにあまり自信がない」としているのは重大なことである。特に、先にみたようにかなりの父親が、子どもとの日常の交流や接触を有していないこととあわせて、４割弱の母親が「しつけに自信がない」と答えているのは、子どもが中学生であるだけに考えさせられる。図７－８は子どものしつけについての親の自信のほどをあらわしたものである。

子どもの学年別、性別によるしつけについての親の自信の差異は認められない。

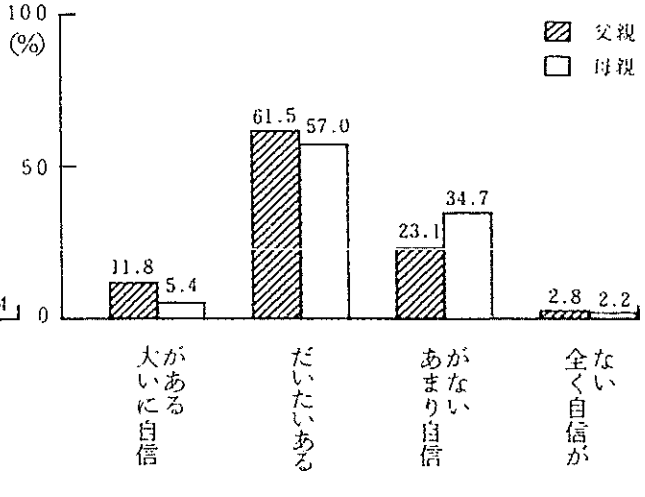
（図７－７）

あなたは、お子さんからどのように思われていると思いますか。



（図７－８）

あなたは、お子さんのしつけについて自信がありますか。

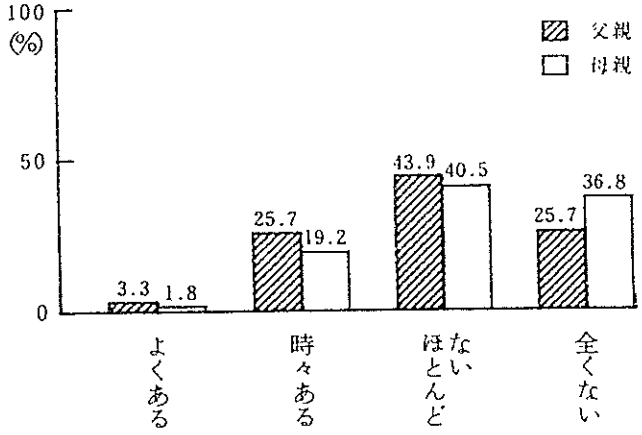


(4) 対学校・教師批判

親は、学校や教師について不平、不満をどの程度口にしているのであろうか。図7－9は両親による対学校批判の発言をあらわしたものである。父親の方が、母親よりも学校や教師に対する評価がきびしく、しかも、それを口にしていることが多い。しかし、多くの親が学校や教師に対する不平や不満を持っていたとしても、それらをほとんど口に出さないでいることがわかった。父親では70%、母親では78%が学校や教師に対する不平や不満を、ほとんど口にしていない。従って、約4分の1の親が学校や教師に対する批判的な評価を口にしている。もちろん、対学校・対教師批判はその具体的な内容をみない限り、その功罪を評価することはきわめて難しいけれども、これらの批判が、仮に、子どもたちの前で行われた場合は、学校や教師の権威を失わしめ、学校や教師に対する子どもたちの信頼を妨げる点で、きわめて重大な影響をもたらすと考えられる。

（図7－9）

あなたの御主人はあなたに、学校や先生についての不平・不満や批判を言ったりすることがありますか。



(5) まとめ

大部分の親は規則正しい生活をしており、それぞれ何らかの生きがいを有している。従って、当然のことながら大部分の親が毎日の生活に充実感を感じている。このように、本県の親は極めて健全であり、様々な問題が指摘される現代にあっても、大多数の国民が社会的な諸条件の変化を乗りこえて平和と繁栄を支えている様子がうかがえる。また、子どものしつけについての自己評価については、甘い方であるが、よく面倒をみているという親が多く、子どもたちからの信頼も、だいたい得ていると考えている。しつけについての自信も多くの親が「ある」と回答している。対学校や教師批判についても、大多数の親は節度を守って不平や不満をほとんど口にしていない。一部の子どもたちや、一

部の親が物議をかもしている社会にあっても、大部分の子どもや親が着実な努力を続けていることがうかがえるのである。

この種の調査は、問題となる一部の親や子どものあり方を指摘することが目的であると同時に、残りの多数の人々が、どのような状況にあるかを明らかにすることも極めて重要である。

日々、青少年の非行が報道され、あたかも世も末であるかのような記事が多い昨今であるが、大部分の県民は冷静、沈着に自分の生活も子育ても律していることが明らかになったのである。

Ⅲ　結論と今後の課題

昭和54年に発足した、「家庭教育総合セミナー事業」もはや4年が経過した。その間今後の望ましい家庭教育のあり方を探るために、家庭教育に関する諸問題を具体的・実証的に調査研究してきた。その結果は、昭和55・56年度の報告書（その1、その2）で公にしてきた通りである。そこで過去2年間の分析を通して注目すべき二つの傾向があることが明らかになった。

その第1は、親の属性にかかわりなく、極めて多くの親が過保護の傾向にあるにもかかわらず、一方ではかなりの親が子育てについて「全く世話をしていない」「あまり世話をしていない」及び「きびしい」「あまり甘くない」と自己評価しているという事実である。これは、親の具体的な子育ての「実態」と「意識」の間にズレがあり、「無意識の過保護」と呼ぶべき問題が存在していることである。

第2の傾向は、先の過保護傾向とは裏腹のしつけに関する「一部放任」が続いてきたということである。すなわち、一方で子どもの欲求や行為を先取りして、親がすべてやってしまうという第1の傾向があると同時に、他方では、親が当然子どもに教えたり、訓練しておくべき事がらが伝えられないまま、教えられないまま放置されているということである。

例えば、子どもに基本的な生活習慣が身についていないという状況は、親がやってしまっているから子どもに学ぶ機会がなかったという面と、親が教える努力を怠って放任してきたという面の二つの側面が存在するのである。一言でいえば「放任的過保護」とも呼ぶべき事態である。親の過保護・過干渉傾向が、ある面では最少限のしつけすらも怠るという「一部放任」の実態と抱き合せになったとき、まさに子どもたちは学校生活・社会生活を営んでいく上での基本条件すらも身につけることができないのである。（家庭教育総合セミナー報告書　その1《昭和55年度》、その2《昭和56年度》）

以上の結果をふまえて、本年、昭和57年度は、いろいろと問題が多くなってくる中学生に焦点をあて調査・分析を試みた。

調査の第1の目的は、中学生たちは、自らの生活をどのように行い、また、どのように意識しているのであろうかを明らかにすることである。

第2の目的は、中学生をもつ父親、母親の養育行動と意識の実態を明らかにすることである。

今回は、先に分析の基本的な視点で述べた通り、子どもの生活実態と親によるしつけの関連性についてはふれず、両者並列の形式で実態のみ明らかにした。

始めに子どもの方から学年別・性別によって分析検討した結果を要約すれば、およそ次のようになる。

- 子どもは大半家庭生活・学校生活に満足している。
- 子どもの悩みは、勉強や成績および進路についてであるが、男女の差なく学年が進むにつれて増加の傾向を示す。なお、相談相手はもっとも友人が多い。
- 子どもに対する親のしつけは、勉強や成績に集中して、「厳母慈父」型が増加の傾向を示している。

• 手伝いは、かなりやっているが、男女の相違は明らかで女の子が多い。

• 学年が高くなるにつれて、勉強時間が多くなり、自由時間の過し方はあまり活動的でない。

• 異性や性に対する関心は、男女とも学年が進むにつれ高くなる。

• 非行・問題行動の発生率は、学年が進むにつれ、とくに男の子に高くなる。

次に親について分析検討した結果を要約する。

• 子どもの〝ことばづかい〟や〝みだしなみ〟〝わがまま〟〝反抗的態度〟に対する親の関心は総じて高い。

• 子どものこづかいは500円～2,000円に集中していて、親はそのつかいみちを知っている。

• 子どもの成績については、親の態度は極めて冷静かつ客観的である。

• 子どもの成績があがっても、特別に報酬を与える傾向はない。

• 手伝いは、両親ともに女の子に多くやらせている。

• 性教育については、大半の親がこの種の話題を回避したり無視している傾向がある。

• 親の対話や交流は、ここでみる限りおよそ緊密かつ健全であることを示している。

• 子どもの自立性や忍耐力については、学年に関係なく3割の親が「ない」と認め、とくに母親の評価がきびしい。

• 大方の親は、子どもに対して自信をもって接しているとしながら、約4割の親が子どもの気持ちがわからないと答えている。

• 子どもに腹を立てた時、過半数の親が、〝なぐりたい〟と思っている。

• 親の生きがいの第1位は、子ども、第2位が仕事である。

• しつけについては、かなり自信はもっているものの、甘いと考える親と甘くないと考える親は半々である。

• 学校や教師に対する不平や不満は、多く親が口に出していない。

• 子どもについての悩みは、第1位は成績や進学のことである。学年が進むにつれ、全体的に親の悩みや心配の種が増していく傾向がみられる。

ところで、子どもは、一人ひとり独自の個性や素質をもっているばかりでなく、絶えず成長し変化している。子どもの発達段階とそれに対応した発達課題を見極め、適切な指導・援助をしなければならない。

中学生時代は発達段階でいえば青年期に入る。青年期は「親からの心理的離乳」の時期ともいう。身体的にも精神的にも急速に変化して、この時期の子どもを不安定にさせる。〝思春期危機〟とも呼ばれている。それまで親の権威を疑わなかったのに、親を含め周囲を批判するようになる。そして自分が無視されそうな状況に出合うと激しく抵抗する。またその反面、自分の無力さや劣等感に悩む時期でもある。さらにこの時期は、分析の結果でも指摘したように、勉強・成績および進路の問題など、子ども

の将来を決定する大事な時期でもある。このような子どもの内側、外側の危機的状況を乗りこえて、多くの子どもは親から自立していくのである。

さて、親は、一般的・原理的家庭教育論を学ぶだけでは不十分であろう。それを自分の家庭で、自分と子どもとの関係に適用することができる能力を養わなければならないことは言うまでもない。しかし、その前に親がどのようにして子どもの成長過程を正しく認識することができるかが重要な問題である。子どもの問題行動が増加し、その様相も複雑化して、家庭教育のあり方が改めて問われている昨今、密着しもつれあった母子の関係のゆがみ、いきすぎを調整し、是正していくためには、父親の参加が是非とも必要になってくる。このような親と子どもの問題に対して、具体的に親はどうすればよいか、その手がかりが緊急に求められる。

今回の調査は、子ども（中学生）の意識・行動の実態と親の養育行動・意識の実態について調べるのが目的であった。なお、結果の考察については、子どもと親を並列の形式で実態のみ明らかにしてきた。今後の課題は、子どもの生活実態と親によるしつけの関連性を探り、望ましい親と子のあり方を具体的に明らかにしていくことである。

Ⅳ　家庭教育総合セミナー事業の概要

1　趣　　旨

現代社会において、次代を担う子どもたちを健全に育成していくことは重要な課題であります。なかでも、子どもたちの生活基盤である家庭は、子どもの成長発達に重要な役割をもつものと思われます。

しかし、近年の社会構造の変化、とりわけ都市化現象による生活環境の変化、情報のはんらん、就労婦人の増加等は、新たに家庭教育に関する問題を生じているといえます。核家族化や少子化等による親の過保護や過干渉な養育態度・行動の状況もそのひとつの現われだと思います。

このような意味から、福岡県教育委員会では昭和54年度から５か年計画で当面する家庭教育に関する諸問題を具体的・実証的に調査研究し、今後の望ましい家庭教育のあり方を研究していくため「家庭教育総合セミナー事業」を実施するものであります。

なお、「家庭教育総合セミナー事業」の推進は次の３事業で実施しています。

(1)　企画研究委員会の開催

学識経験者及び現場指導者等による委員会を構成し、家庭教育に係る諸問題について調査研究を行うとともに地域別家庭教育総合セミナーの企画や研究のまとめを行う。

(2)　地域別家庭教育総合セミナーの実施

企画研究委員会での調査研究結果をもとに、家庭教育に係る諸問題について広く意見を聞き、家庭教育のあり方についての啓蒙及び意識の高揚を図る。

(3)　資料の作成・配布

企画研究委員会での調査研究や、地域別家庭教育総合セミナーでの討議の結果を連携させ、望ましい家庭教育のあり方をめざす資料を作成し配布する。

2　事業の全体計画

家庭教育総合セミナー事業５か年計画は次のとおりです。

年　次（年度）	内　　容
１　年　次 （54年度）	・県内で過去５年間に実施された家庭教育に関する調査資料の調査研究 ・地域別家庭教育総合セミナーの実施 ・児童観に係るアンケート調査 ・報告書の作成・配布

年　次（年度）	内　　容
2　年　次 （55年度）	• 小学生をもつ親を対象とした養育態度・行動についての調査研究 「子どものしつけについてのアンケート」調査 • 地域別家庭教育総合セミナーの実施 • 報告書の作成・配布
3　年　次 （56年度）	• 2年次の調査の分析・まとめ（継続） • 小学生をもつ親を対象とした養育態度・行動についての調査研究 • 地域別家庭教育総合セミナーの実施 • 家庭教育啓発資料「小学生をもつ一　あなたの子育てのために」の作成配布 • 報告書の作成
4　年　次 （57年度）	• 中学生の意識・行動の実態及び中学生をもつ親の養育態度・行動についての調査研究　「アンケート調査」の実施 • 地域別家庭教育総合セミナーの実施 • 家庭教育啓発資料「小学生をもつ　一　あなたの子育てのために」の改訂版の作成・配布 • 報告書の作成・配布
5　年　次 （58年度）	• 2～4年次に調査した実態をもとに、さらに総合的な観点からの調査研究を行い、家庭教育の指針となる資料を作成する。

3　本年度事業

(1)　企画研究委員会の開催

ア　企画研究委員会（委員　12名）　7回

イ　専門委員会（委員　5名）　2回

（専門委員会は企画研究委員の中から選出した委員で構成し、会の効果的運営を図るための企画・立案を行う）

ウ　主な内容

• 中学生の意識・行動の実態及び中学生をもつ親の養育態度・行動についての調査研究

• 地域別家庭教育総合セミナーの企画・実施

• 家庭教育啓発資料「小学生をもつ ― あなたの子育てのために」の改訂版の作成

• アンケート調査の分析・まとめ（報告書作成）

エ　調査の概要

• 調査対象　　県下の6中学校の生徒及びその父親・母親

• サンプル数　　3,417名

• 調査時期　　昭和57年10月

(2)　地域別家庭教育総合セミナー事業「これからの家庭教育を考えるつどい」の実施

地域別家庭教育総合セミナー事業「これからの家庭教育を考えるつどい」の実施

ア　研究テーマ　　「心身ともにたくましい子どもを育てるための親のあり方」

イ　方　　法　　講演　シンポジウム

ウ　会場・期日・参加者数

地　区	会　　場	期　　日	参加者数
筑後南部	大川市文化センター	9月　8日(水)	200名
筑後北部	甘木朝倉広域市町村会館	11月　7日(日)	250名
粕　屋	久山町久山会館	11月21日(日)	450名
筑　紫	大野城市中央公民館	12月　3日(金)	480名
京筑・筑豊	苅田町三原文化会館	2月27日(日)	200名

(3)　資料の作成・配布

• 家庭教育啓発資料「小学生をもつ ― あなたの子育てのために」の改訂版の作成・配布（40,000部）

• 調査結果を中心とした資料（報告書）の作成・配布（1,000部）

• 県内市町村教育委員会、小学校、中学校、社会教育関係団体等へ配布

昭和57年度企画研究委員名

（委員はアイウエオ・・・・順）

	氏　名	所　属　・　役　職	専門分野
委員長	岡　部　弘　道	九州大学健康科学センター教授	保健体育学
委　員	入　江　建　次	九州大谷短期大学助教授	臨床心理学
〃	古　味　堯　通	佐賀大学教授	教　育　学
〃	貞　光　康　子	福岡市青少年相談センター相談員	社会教育関係
〃	秦　　政　春	福岡教育大学講師	教育社会学
〃	松　本　恭　子	福岡市ＰＴＡ協議会副会長	社会教育関係
〃	三　浦　清一郎	福岡教育大学助教授	社会教育学
〃	三　谷　勝　彌	那珂川町立岩戸北小学校長	学校教育関係
〃	宮　原　和　子	近畿大学女子短期大学助教授	発達心理学
〃	村　田　勝　重	西日本新聞社筑豊総局記者	マスコミ関係
〃	横　山　正　幸	福岡教育大学助教授	児童心理学
〃	吉　田　充　三	福岡市立那珂中学校長	学校教育関係

本調査で使用した質問紙

お父さん、お母さん用の封筒と生徒用を一緒に大封筒に入れて提出してください。

生　徒　用

中学生の生活実態についてのアンケート

名前を記入する必要はありません

◎　記入の仕方についてのお願い

1　各質問に対する答えは、回答項目のうちもっともあてはまるものの番号（1.　2　3　など）を○でかこんでください。また（　）の中には番号や必要事項を記入してください。

2　次の欄に必要事項を記入してください。

あなたの学年・クラス	あなたの性別	きょうだいの中での位置
＿＿＿＿＿年	1.　男	1.　ひとりっ子
＿＿＿＿クラス	2.　女	2.　＿＿人きょうだいの＿＿番目

問1.　あなたは、今朝自分でふとん（ベッド）の整理をしましたか。

1.　はい　　2.　いいえ

→（1と答えた人へ）

問(1)　いつごろから自分自身でするようになりましたか。

1.　小学校1年　　2.　小学校2年　　3.　小学校3年　　4.　小学校4年　　5.　小学校5年

6.　小学校6年　　7.　中学校1年　　8.　中学校2年　　9.　中学校3年

問2.　あなたは、遅刻をしますか。

1.　まったくしない　　2.　週1回くらいする　　3.　ひんぱんにする（週2～3回）　　4.　遅刻する日の方が多い

問3.　家の食事の時、あなたは食事に文句を言ったり、好き嫌いによって残したりすることがありますか。

1.　よくある　　2.　時々ある　　3.　まったくない

問4.　お父さん、お母さん（家族の人）にもらうあなたのおこづかいは、月平均いくらですか。

1.　まったくもらっていない　　2.　500円以下　　3.　501円～1,000円　　4.　1,001円～1,500円

5.　1,501円～2,000円　　6.　2,001円～2,500円　　7.　2,501円～3,000円　　8.　3,001円～3,500円

9.　3,501円以上（　　円）

問5.　あなたは、これまでにアルバイトをしたことがありますか。

1.　ある　　2.　ない

問6.　あなたは、親（家族の人）からもらったおこづかいやアルバイトで得たお金を主として何に使いますか。3つあげてください。

1.（　　）　　2.（　　）　　3.（　　）

問7.　あなたは、平均してテレビを1日どのくらい見ていますか。

1.　まったく見ていない　　2.　30分程度　　3.　1時間　　4.　1時間半　　5.　2時間　　6.　2時間半

7.　3時間　　8.　3時間半　　9.　4時間　　10.　4時間半　　11.　5時間　　12.　5時間以上

問8.　あなたは、ふだん家庭でどのくらい勉強しますか。

約（　　）時間　（　　）分

問9　あなたは、試験の時家庭でどのくらい勉強しますか。

約（　　）時間　（　　）分

問10　あなたは、ラジオの深夜放送をききますか。

1．よくきく　　2．時々きく　　3．あまりきかない　　4．全々きかない

問11．あなたは、今学習塾に通ったり、家庭教師についたりしていますか。（おけいこごとはのぞく）

学習塾に｛1．通っている　2．通っていない｝　家庭教師に｛1．ついている　2．ついていない｝

問12．あなたが、ふだん勉強するのはどうしてですか。もっともあてはまるものを1つえらんで○をつけてください。

1．よい成績をとりたいから　　2．よい学校やよい会社にはいりたいから　　3．人や社会の役に立ちたいから

4．いろいろなことを知りたいから　　5．学校でみんなについて行けないと困るから

6．親を喜ばせたいから　　7．学校に行っているから　　8．親やまわりの人が勉強しろというから

9．勉強や授業がおもしろいから　　10．なんとなく

11．その他（　　）

問13．あなたは、掃除当番やクラスの決められた仕事をどのようにしていますか。

1．まじめに責任をもってやっている　　2．仕方がないから適当にする　　3．時々さぼる　　4．まったくしない

問14．体育祭、クラスマッチなどクラス全体で何か活動するとき、あなたはそれに対してどのような態度をとりますか。

1．積極的に参加する　　2．一応参加する　　3．参加しない　　4．わからない

問15．あなたは、学校にいる時間と学校外にいる時間とでは、どちらが楽しいことが多いですか。

1．学校にいる時間　　2．学校外にいる時間

問16．あなたは、帰宅後や休日とのように過ごしていますか。多いものから3つえらんでください。

1位（　　）　2位（　　）　3位（　　）

1．家でなんとなくゴロゴロしている　　2．音楽（たとえばギターやレコード）を楽しむ　　3．ラジオを聞く

4．テレビを見る　　5．ゲームセンター　　6．バイク　　7．友だちとおしゃべりをする　　8．読書

9．まんが　　10．学習塾や家庭教師　　11．勉強　　12．スポーツを楽しむ　　13．友だちに電話する

14．趣味　　15．図書館　　16．その他（　　）

問17．あなたは、中学卒業後、どうするつもりですか。

1．進学（高校・高専）する　　2．各種学校・専修学校にすすむ　　3．就職する

4．働きながら勉強を続ける（定時制高校など）

問18．あなたは、将来どんな職業につきたいですか。

（　　）

問19．あなたのお父さんやお母さん（家族の人）は、あなたが将来どんな職業について欲しいと思っていますか。

（　　）

問20．あなたの各教科別の成績は、どのくらいですか。該当するところに○をつけてください。

(例)	数　学	よい			○			わるい
			非常に	や や	中間	や や	非常に	
1.	国　語	よい						わるい
2.	社　会	よい						わるい
3.	数　学	よい						わるい
4.	理　科	よい						わるい
5	音　楽	よい						わるい
6.	美　術	よい						わるい
7.	技術・家庭	よい						わるい
8.	保健・体育	よい						わるい
9.	英　語	よい						わるい

問21. あなたは、「異性」に関心がありますか。

1. 非常にある　2. 少しある　3. あまりない　4. まったくない

問22. あなたは、どんなテレビ番組をよくみますか。2つえらんでください。

一番よくみる番組（　　）　次によくみる番組（　　）

1. ドラマ　2. 歌謡番組　3. マンガ・アニメーション　4. 映画　5. クイズ番組

6. お笑い番組（万才・落語など）　7. スポーツ　8. ワイドショー　9. ニュース・天気予報

10. 教養番組　11. その他（　　）　12. みない

問23. あなたが、もっとも楽しいと感じるのはどんな時ですか。

（　　）

問24. あなたは、どんな音楽が好きですか。2つえらんでください。

一番好きな音楽は（　　）　次に好きな音楽は（　　）

1. 歌謡曲　2. 演歌　3. ニューミュージック（フォークを含む）　4. ポピューラー音楽

5. 邦楽　6. 民謡　7. クラシック音楽　8. フュージョン（シンセサイザーを含む）

9. ロック音楽　10. マンガ・アニメ主題歌　11. ジャズ　12. イージーリスリング

13. 映画音楽　14. ラテン・タンゴ　15. シャンソン・カンツォーネ　16. ニューウェーブ

17. ハワイアン　18. きかない

問25. あなたは、仲のよい友人のグループをもっていますか。もっている場合それはあなたをふくめて、何人くらいのグループですか。

1. もっている　2. もっていない

└── だいたい（　　）人くらい

問26. あなたの友人グループで、よく話題になるのは何ですか。もっともよく話題になるものを1つえらんで()をつけてください。

1. 勉強や成績のこと　2. 進路のこと　3. 家庭のできごと　4. 部活動やH・Rのこと

5. 社会問題　6. 趣味や遊び　7. 芸能やスポーツのこと　8. 服装や髪の形

9. ラジオ・テレビ番組のこと　10. 雑誌やマンガのこと　11. 友人のこと　12. 異性のこと

13. 人生や生き方について　14. 特にない

15. その他（　　）

問27. あなたは、自分のことを深く理解してくれ、心を打明けて話せる「親友」がいますか。

1. いる　2. いない

問28. あなたは、特定の異性の友人がいますか。

1. いる　2. いない

問29. あなたが、今もっとも悩んでいること、困っていることを1つえらんで()をつけてください。

1. 健康のこと　2. 容姿　3. 性格　4. 家庭・家族関係のこと　5. 進路

6. 勉強・成績　7. クラス　8. 部活動　9. 友人　10. 恋愛・異性　11. 趣味

12. 特にない　13. その他（　　）

問30. 困っていることや悩みを、あなたは誰に相談しますか。2つえらんでください。

もっとも相談する人は（　　）　次に相談する人は（　　）

1. 父　2. 母　3. 祖父　4. 祖母　5. 兄弟姉妹　6. 友人　7. 上級生・先輩

8. 先生　9. 誰にも相談しない　10. 相談する人がいない

11. その他（　　）

問31. あなたは、学校の勉強でわからないところがありますか。

1. よくある　2. 時々ある　3. あまりない　4. まったくない

問32. あなたは、学校の勉強についてどう感じていますか。

1. とてもやる気がある　2. まあまあやる気がある　3. あまりやる気がない　4. まったくやる気がない

問33. あなたは、家庭生活に満足していますか。

1. 大変満足している　2. かなり満足している　3. あまり満足していない　4. まったく満足していない

問34. 小学生の頃、あなたは、お父さんやお母さん（家）の手伝いをしていましたか。

1. よくしていた　2. 時々していた　3. あまりしなかった　4. まったくしなかった

問35. 中学生になって、あなたは、お父さんやお母さん（家）の手伝いをしていますか。

1. よくする　2. 時々する　3. あまりしない　4. まったくしない

問36. あなたは、服装や髪型などファッションに関心がありますか。

1. 非常にある　2. 少しある　3. あまりない　4. まったくない

問37. あなたは、性について関心がありますか。

1. 非常にある　2. 少しある　3. あまりない　4. まったくない

問38. あなたは、「流行」を気にする方ですか。

1. とても気にする　2. 少し気にする　3. あまり気にしない　4. まったく気にしない

問39. あなたは、お父さんやお母さんとテレビのことやスポーツのことなどについて話すことがありますか。

お父さんと（　　）　お母さんと（　　）

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. まったくない　5. 父はいない　6. 母はいない

問40. あなたは、お父さんやお母さんと将来や人生のことについて話すことがありますか。（成人してどんな仕事につくか、どんな生き方をするかなど、受験以外のことで）

お父さんと（　　）　お母さんと（　　）

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. まったくない　5. 父はいない　6. 母はいない

問41. あなたは、お父さんやお母さんと学校生活のこと（例えば、授業のこと、クラブのこと、先生のこと、友だちのこと、学校行事のことなど）について話すことがありますか。

お父さんと（　　）　お母さんと（　　）

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. まったくない　5. 父はいない　6. 母はいない

問42. あなたは、お父さんやお母さんと、おもにどんなことについて話しますか。もっともよく話すことを1つずつあげてください。

お父さんと話すこと（　　）　お母さんと話すこと（　　）

1. 将来のこと　2. 成績のこと　3. クラブや趣味のこと　4. 学校のできごと

5. 恋愛・男女交際のこと　6. 家庭のこと　7. 歌手・スター・スポーツのこと　8. 文学・思想・社会問題

9. ほとんど話さない　10. 父はいない　11. 母はいない

問43. あなたは、お父さんやお母さんのことをどう思っていますか。

お父さんは（　　）　お母さんは（　　）

1. 大変信頼している　2. だいたい信頼している　3. あまり信頼していない　4. まったく信頼していない

5. 父はいない　6. 母はいない

問44. あなたのお父さんやお母さんが、学校の先生に対する不平・不満・批判を言うのを聞いたことがありますか。

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. まったくない

問45. あなたにとって、お父さん、お母さんはどのような存在ですか。あてはまるものを1つずつえらんでください。

お父さんは（　　）　お母さんは（　　）

1. 尊敬できる人　2. やさしく理解のある人　3. 友人のような親しみのもてる人

4. いろいろ教え指導してくれる人　5. たよりになる人　6. 暴力をふるう人　7. 自分勝手で無責任な人

8. 口うるさい人　9. 生活費をかせいでくれる人　10. いてもいなくてもいい人　11. 放任で甘い人

12. 父はいない　13. 母はいない　14. その他（　　）

問46. あなたは、次のようなことをしたことがありますか。

	はい	いいえ
1. 親にだまって友だちの家などに泊まったことがある……	1	2
2. 無免許運転をしたことがある……	1	2
3. 万引きをしたことがある……	1	2
4. 先生をなぐったことがある……	1	2
5. 家出をしたことがある……	1	2
6. 暴走行為をしたことがある……	1	2
7. 学校の帰り道などに喫茶店に行ったことがある……	1	2
8. カンニングをしたことがある……	1	2
9. 学校の帰り道などゲームセンターに行ったことがある……	1	2
10. お父さんに暴力をふるったことがある……	1	2
11. お母さんに暴力をふるったことがある……	1	2

問47. あなたは、親にかくれて、お酒をのんだことがありますか。

1. 1回だけある　2. 数回ある　3. 毎日のんでいる　4. のんだことがない

問48. あなたは、たばこをすったことがありますか。

1. 1回だけある　2. 数回ある　3. 毎日すっている　4. すったことがない

問49. あなたは、お父さん、お母さんに暴力をふるいたいと思ったことがありますか。それはどういう場合ですか（　　）内に書いてください。

お父さんに（　　）（理由　　）
お母さんに（　　）（理由　　）

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. まったくない　5. 父はいない　6. 母はいない

問50. 小学生の頃、親にきびしくしかられたり、注意されたりしたのはどのような場合ですか。それぞれ1つづつえらんでください。

何度もしかられたり注意されたこと（　　）
とくにきびしくしかられたり注意されたこと（　　）

1. 勉強や成績のこと　2. 友人のこと　3. 兄弟姉妹とのこと（ケンカなど）　4. 家業や家事の手伝い
5. 身だしなみ（服装）　6. 夜ふかし（朝ねぼう）　7. テレビのみすぎ　8. 食べものの好ききらい
9. 間食やおやつなどのこと　10. むだ使いやお金のこと　11. いたずら　12. ことばづかい
13. その他（　　）

問51. 中学生になって、親にきびしくしかられたり、注意されたりするのはどのような場合ですか。それぞれ1つづつえらんでください。

何度もしかられたり注意されたこと（　　）
とくにきびしくしかられたり注意されたこと（　　）

1. 勉強や成績のこと　2. 友人のこと　3. 兄弟姉妹とのこと（ケンカなど）　4. 家業や家事の手伝い
5. 身だしなみ（服装）　6. 夜ふかし（朝ねぼう）　7. テレビのみすぎ　8. 食べものの好ききらい
9. 間食やおやつなどのこと　10. むだ使いやお金のこと　11. いたずら　12. ことばづかい
13. その他（　　）

問52. 全体的にみて、お父さんやお母さんはあなたに対して甘いほうだと思いますか。

お父さんは（　　）　お母さんは（　　）

1. 大変甘いほうだと思う　2. だいたい甘いほうだと思う　3. あまり甘くないほうだと思う
4. きびしいほうだと思う　5. 父はいない　6. 母はいない

問53. あなたのお父さんやお母さんは、あなたに性のこと（性教育）について教えたり、助言してくれたりしますか。

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. まったくない

問54. あなたは、部活動（必修クラブは除く）をしていますか。している人は、そのクラブ名を書いてください。

1. している（　　）部　　2. していない

問55. あなたは、将来どういう人間になりたいですか、あるいはどのような生き方をしたいと思いますか。自由に書いてください。

（　　）

協力ありがとうございました

お父さん、お母さん用の両方を１つの封筒に入れて提出してください。

お父さん用

（注：お母さん用についても同様の質問紙を使用している）

中学生のしつけについてのアンケート

名前を記入する必要はありません

◎　記入の仕方についてのお願い

1. この調査用紙を持って帰られたお子さんについてお答えください。
2. このアンケートにはお父さんがお答えください。もしお父さんがお答えできないときは、ふだんお子さんに最もよく接しておられる方でけっこうです。
3. 各質問に対するお答えは、回答項目のうち最もあてはまるものの番号（1.　2.　3）などを○でかこんでお答えください。また（　　）の中には番号や必要事項を記入してください。
4. 次の欄にお子さんの学年など御記入くださるようお願い致します。

お子さんの学年	お子さんの性別	お子さんのきょうだいの中での位置	御記入くださった方	御記入くださった方の年代
＿＿＿年	1.　男 2.　女	1.　ひとりっ子 2.　＿＿人きょうだいの＿＿番目	1.　父親　2.　祖父　3.　兄 4.　その他（　　）	1.　20代　2.　30代 3.　40代　4.　50代 5.　60代以上

問1.　あなたは、今朝お子さんを起こしてやりましたか。

1．はい　2．いいえ　3．その他（　　）

問2.　あなたは、今朝お子さんのふとんをたたんだり、押入れにあげたり（ベッドの場合はあとしまつ）してやりましたか。

1．はい　2．いいえ　3．その他（　　）

問3.　あなたは、お子さんのテストのときなど一緒に起きていて夜食をつくってやったりすることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない

問4.　あなたは、お子さんの成績があがった場合、日頃欲しがっている物を買ってやったり、おこづかいをあげたりすることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない

問5.　あなたは、お子さんに１ヶ月平均どのくらいおこずかいを与えていますか。

1．全く与えていない　2．500円以下　3．501～1,000円　4．1,001円～1,500円

5．1,501円～2,000円　6．2,001円～2,500円　7．2,501円～3,000円

8．3,001円～3,500円　9．3,501円以上（　　円）

問6.　あなたは、お子さんが月々のおこづかいの他に何かの理由（友だちと遊びに行くためとか何か欲しい物を買うため）で、お金を要求した場合、きいてやることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない

問7.　あなたは、お子さんがおこづかいをどのように使っているか知っていますか。

1．よく知っている　2．だいたい知っている　3．あまり知らない　4．全く知らない

問8.　あなたは、この１週間に比較的体を動かす手伝い（風呂を掃除したり、洗たくをしたり、ゴミを焼いたり、部屋を掃除したり、夕食をつくったり）をお子さんに何回くらいさせましたか。

1．全くさせていない　2．1回　3．2回　4．3回　5．4回　6．5回　7．6回以上

問9. あなたは、お子さんのあなたに対する言葉づかいが乱暴であったような場合、どのような対応をしていますか。

1. きびしくしかる　2. おだやかに注意する　3. 特に何も言わず聞き流す

4. その他（　　）

問10. あなたは、お子さんの服装や髪型などが中学生らしくない場合、どのように対応していますか。

1. きびしくしかる　2. おだやかに注意する　3. 特に何も言わない

4. その他（　　）

問11. あなたは、お子さんがひわいなことを言ったりした場合、どのように対応していますか。

1. きびしくしかる　2. おだやかに注意する　3. 特に何も言わず聞き流す

4. その他（　　）

問12. あなたは、お子さんが他の人のことを考えず自分勝手なことを言ったり、行ったりした場合、どのように対応していますか。

1. きびしくしかる　2. おだやかに注意する　3. 特に何も言わない

4. その他（　　）

問13. あなたは、お子さんがたいして理由もないのに口答えしたり、反抗的態度をとった場合、どのように対応していますか。

1. きびしくしかる　2. おだやかに注意する　3. 特に何も言わない

4. その他（　　）

問14. あなたは、お子さんが自分が使ったものの後始末をしなかった場合、どのように対応していますか。

1. きびしくしかる　2. おだやかに注意する　3. 子どもには何も言わず自分がしてやる　4. そのまま放っておく

5. その他（　　）

問15. あなたは、お子さんとテレビのことや映画のことやスポーツのことなどについて話すことがありますか。

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. 全くない

問16. あなたは、お子さんに性のことについて教えたり、指導したり、話したりすることがありますか。

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. 全くない

問17. あなたは、お子さんと、お子さんの将来や人生について話すことがありますか。（成人してどんな仕事につくか、どんな生き方をするかなど、受験以外のことで）

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. 全くない

問18. あなたは、お子さんと、学校生活のこと（例えば、授業のこと、クラブのこと、先生のこと、友だちのこと、学校行事のことなど）について話すことがありますか。

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. 全くない

問19. あなたは、お子さんがあなたやお母さんや目上の人に対して、友だちに言うのと同じような乱暴な言い方をした場合正しい言い方を教えてやることがありますか。

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. 全くない

問20. あなたは、お子さんに何か家庭のこと（お子さん自身のことを除く）で意見を聞いたり、相談したりすることがありますか。

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. 全くない

問21. あなたのご家庭では、夕食を家族そろって食べていますか。

1. いつも家族そろって食べている　2. 時々誰か欠けることもあるがだいたいそろって食べている

3. 家族が全員そろって食べることはあまりない　4. 全くない

問22. あなたのご家庭では、夕食のときテレビを見ながら食事をすることがありますか。

1. よくある　2. 時々ある　3. ほとんどない　4. 全くない

問23. あなたは、お子さんの交友関係について知っていますか。

1. よく知っている　2. だいたい知っている　3. あまり知らない　4. 全く知らない

問24. あなたは、現在お子さんについて困っていること、悩んでいることがありますか。あるとすればその内容は何ですか。次のうちあてはまるものすべてを○でかこんでください。なお困っていることや悩みのない方は、最後の「ない」の記号に○をつけてください。

1. 成績・進学のこと　2. 身体の成長のこと　3. 家族への反抗・暴言・暴行等

4．非行（盗み・シンナー・暴走・喫煙など）　5．不純異性交遊などの異性問題　6．学校に行きたがらない

7．（親からみて）悪い友だちとつきあっている　8．生活がだらしなく、やる気がない

9．服装、髪型、言葉づかいなどがみだれている　10．子どもと話すきっかけが見出せず悩んでいる

11．その他（　　）　12．ない

問25．あなたは、お子さんの学校の成績がどのくらいと思いますか。

1．上　2．中の上　3．中の中　4．中の下　5．下

問26．あなたは、お子さんの成績に最も影響するのは次のどれだと思いますか。１つ選んでください。

1．先生の教え方や人柄　2．あなた自身の育て方　3．お子さんの友だち　4．本人の能力

5．本人の努力　6．校風　7．地域の環境　8．塾や家庭教師

9．その他（　　）

問27．あなたは、お子さんに対して腹が立ちなぐりたいと思うことがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない

問①あると答えられた方で、それは主にどういう場合ですか。

（　　）

問28．あなたは、お子さんが何を考えているのか、その気持がわからずとまどうことがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない

問29．あなたは、お子さんにはれものにさわるような気持で接することがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない

問30．あなたは、平均してテレビを１日どのくらい見ていますか。

1．全く見ていない　2．30分程度　3．1時間　4．1時間半　5．2時間　6．2時間半

7．3時間　8．3時間半　9．4時間　10．4時間半　11．5時間　12．5時間以上

問31．あなたは、毎日規則正しい生活をおくっていますか。

1．非常に規則正しい生活をしている　2．だいたい規則正しい生活をしている

3．あまり規則正しい生活ではない　4．全く不規則な生活である

問32．あなたは、毎日の生活に充実感がありますか。

1．非常にある　2．まあまあある　3．あまりない　4．全くない

問33．あなたの生きがいの対象は何ですか。

1．妻　2．子ども　3．自分の趣味　4．家事　5．仕事

6．その他（　　）　7．生きがいはない

問34．あなたの奥さんはあなたに、学校や先生についての不平・不満や批判を言ったりすることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない

問35．あなたは、お子さんは自主性があると思いますか。

1．大いにあると思う　2．だいたいあると思う　3．あまりないと思う　4．全くないと思う

問36．あなたは、お子さんは忍耐力（我慢強さ）があると思いますか。

1．大いにあると思う　2．だいたいあると思う　3．あまりないと思う　4．全くないと思う

問37．あなたは、お子さんのしつけについて自信がありますか。

1．大いに自信がある　2．だいたいある　3．あまり自信がない　4．全く自信がない

問38．あなたは、お子さんのしつけについて甘いほうだと思いますか。

1．大変甘いほうだと思う　2．だいたい甘いほうだと思う　3．あまり甘くないほうだと思う

4．きびしいほうだと思う

問39. あなたは、お子さんの世話をよくしているほうだと思いますか。

1. 大変よくしているほうだと思う　2. だいたいしているほうだと思う　3. あまりしていないほうだと思う

4. ほとんどしていない

問40. あなたは、お子さんからどのように思われていると思いますか。

1. 大変信頼されていると思う　2. だいたい信頼されていると思う　3. あまり信頼されていないと思う

4. 全く信頼されていないと思う

問41. あなたは、将来お子さんにどういう人間になってもらいたい、あるいはどのような生き方をしてもらいたいと思いますか。自由に書いてください。

（　　）

御協力ありがとうございました

調査協力校名

（順不同）

市町村名	学校名
穂波町	穂波東中学校
宗像市	日の里中学校
星野村	星野中学校
三潴町	三潴中学校
福岡市	那珂中学校
北九州市	管生中学校